

令和5年度

四天王寺大学

四天王寺大学短期大学部

FD・SD報告書



編集・発行 ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会

スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

発行日 令和6年3月31日

目 次

第 1 章

令和 5 年度 FD 活動の取り組みについて ……………1

第 2 章

令和 5 年度学生による授業評価アンケートの実施結果 ……………8

第 3 章

各学科・専攻・コースによる FD 活動について ……………16

第 4 章

本学における仏教教育について ……………123

第 5 章

学生支援センターが取り組む学修支援について ……………133

第 6 章

SD 活動の取り組みと今後の課題 ……………137

規程

- ・ ファカルティ・ディベロップメント委員会規程 ……………138
- ・ スタッフ・ディベロップメント委員会規程 ……………139

第1章 令和5年度FD活動の取り組みと今後の課題

1. 高等教育推進センターの設立

令和2年からの遠隔授業導入に伴い必要性が増すICT教育の充実化や、基礎教育の改善等を実施するため、令和3年4月1日付で高等教育推進センターが発足し、センター専任教員・兼務教員と高等教育推進課事務職員が協働して教育改革を推進している。

FD活動については、令和2年度までは教務部が担当していたが、令和3年度より高等教育推進センターが担当し、本学のFD活動を推進していくこととなった。

2. 令和5年度の取り組み

(1) 学修成果の可視化

いわゆる「三つのポリシー」の作成・改善や学士課程プログラムの改訂には、学修成果の評価をもとに進めていく必要がある。そのためには、学修成果の可視化が不可欠であり、次のような調査・アンケート・アセスメントテスト等を実施している。これらの結果については、全教職員が閲覧できるようIBUポータルに掲載している。

① 学生調査

冬学期の10月16日から11月30日の期間、全学生に対してwebで実施した。回答率は大学(66.4%)、短大(87.8%)で、前年度と比較して大学は7.9%のダウン、短大はほぼ横ばいであったが、ネットで回答率を公表している他大学と比較しても高い数値で推移している。

学生生活や学内施設・学生支援に対する満足度などを含めた総合的な調査だが、学修成果に関しては各学科等の教育目標達成度を測定・点検している。また、令和4年度より多くの学生や教職員が閲覧できるよう学内HPにおいて結果を公開している。

令和5年度は、「本学の運営母体である四天王寺(大阪市天王寺区)に行ったことがあるか」を問う設問を新たに設けた。

調査結果については、大学運営会議等でも報告され、各学科に対して授業時間外学習時間の改善策の検討を依頼した。今後も多くの学生の回答を得るため調査時期・期間、学生への周知方法、設問の設定等を必要に応じて改善する。

② PROGテスト

PROGテストとは、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を、実践的に問題を解決に導く力の「リテラシーテスト（知識を活用して課題を解決する力）」と、周囲の環境と良い関係を築く力の「コンピテンシーテスト（経験を積むことで身に付いた行動特性）」の2つの側面を測るテストで、学修成果を把握・点検し学生指導や授業改善に活かしていくことを目的に実施している。

令和4年度までは「リテラシーとコンピテンシー」の両方のテストを実施していたが、令和5年度より「コンピテンシーのみ」を実施することになった。主な理由としては、コンピテンシーと社会人基礎力是对応しており、社会的な場において成果を上げる資質・能力といえるためである。

③ 新入生アンケート

入学直後4月のオリエンテーション期間中に新入生に対して実施している。設問は全学部・学科共通設問、学部・学科等の独自設問で構成されている。内容としては入学時点での学習習慣、大学への期待・不安や、受験・入学に至るまでの行動等に関する調査・分析を行っており、アンケート結果は教育改革推進本部会議等でも報告される。

当年度の新入生の傾向を知り、どのような教育や支援を行えばいいのか参考にするだけでなく、入学者の傾向を把握し、今後の学生募集の改善や教育の質向上のための重要なデータとして活用している。そのため、毎年必要に応じた設問の改訂を行っている。

回答率は大学（98%）、短大（98.1%）で、ほぼ例年並みであった。

(2) 学生による授業評価アンケート

学生への授業評価に関するアンケート結果は、第2章で詳しく分析されている。

平成30年度までの学生アンケートは、各教員の授業改善の意識を高めるために、夏学期と冬学期の2回、担当する科目の中から1科目だけ選択し実施してきた。なお専任教員については、各学期で第1期と第2期の2回に分けて実施、非常勤講師については第2期の1回のみ実施してきた。また、教員個人が授業改革に取り組んだ結果として、リフレクション・ペーパーの提出を求めてきた。

令和元年度からは、名称を「学生アンケート」から「授業評価アンケート」に改め、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.netを通じて全科目（一部科目を除く）について授業評価アンケートを実施している。

令和5年度の回答率については、夏学期は大学55.72%（昨年度60.76%）、短大74.89%（75.67%）で、冬学期は大学53.07%（昨年度59.72%）、短大65.18%（63.51%）であった。夏学期・冬学期とも回答率は、ネットで公表している他大学の回答率と比較しても高い数値で推移しており、多くの学生が熱心に回答してくれたようである。

なお、令和4年度より多くの学生や教職員が閲覧できるよう学内HPにおいて結果を公開している。

(3) 相互授業参観

冬学期の11月～12月にかけて教職員による「相互授業参観」を実施している。原則として全専任教員は参観対象の授業をひとつ届け出て、参観対象授業一覧が全教職員に公表される。専任教員だけでなく非常勤講師、事務職員も希望すれば授業を参観できる。参観者は授業担当者に参観コメントを提出し、授業担当者はそのコメントを今後の授業の参考とすることができる。また、授業によっては合評会が行われ、授業担当教員は教職員らの意見を聴取し、授業改善に活かせる。とくに令和4年度については、「数理・データサイエンス」「ファシリテーショ

ン」等を取り入れている授業をいくつか公開し、先生方に参観を推奨した。

なお、令和5年度は大学で113授業科目、短大で18授業科目が相互授業参観として公開され、多くの教職員が参観し授業改善への参考とした。

(4) FD研修会

①ICT活用関連の講習会

令和5年度はICT関連の講習会を令和5年6月に2回、令和6年3月に2回の合計4回実施した。内容としては、「テキストマイニングについて学ぶ(オンライン形式)」「Excelの活用～初級編～(対面・オンライン形式)」「生成AI入門(ChatGPTでできること等)(対面形式)」「YouTube、PowerPointの音声機能の活用方法(対面形式)」であった。

②FD(・SD)研修会

令和3年度までは、FD研修会と事務局全体研修会(SD研修会)を別々に実施していたが、教育職員・事務職員が連携して今後取り組むべき課題を発見し、社会の変革に対応し、時代に則した教育を展開できる能力・資質を向上させることを目的とする教育職員・事務職員を対象とした「FD・SD研修会」を令和4年度より開催した。

令和5年度は、令和6年1月および2月に合計3回の研修会を実施したが、うち1回は「FD・SD研修会」として実施した。

	令和5年度 第1回 FD・SD研修会	令和5年度 第1回 FD研修会	令和5年度第2回 FD研修会
テーマ	「生成系AI時代に求められるリテラシー」 ～AI・データサイエンスの知識・スキルは理系だけのものではない!～	「初年次教育の動向」 —ポストコロナでの実践の工夫—	「今の高校生の価値観の変化・考え方・興味関心等、それらを踏まえた大阪の高校現場でのかかわり方」 ～近頃の学生が分かる～

講師	大阪教育大学 特任准教授 A I コンサルタント 安松 健	同志社大学大学院 社会学 研究科 教育文化学科専攻 博士後期課程 教授 大学教育学会 理事(常任理 事)会長 山田 礼子	(株) リクルート進学情報 Division 東名阪高校進路支援部 関西G グループマネージャー 塩川 尋紀
対象	教育職員 (専任教員) 事務職員 (専任職員、有期・ 無期職員)	教育職員 (専任教員) 一部事務職員 (専任職員)	教育職員 (専任教員) 一部事務職員 (専任職員)
実施日 時	令和6年1月31日 (水) 13:15~14:45 ※質疑等含む	令和6年2月20日 (火) 13:15~14:45 ※質疑等含む	令和6年2月29日 (木) 15:00~16:30 ※質疑等含む

(5) 教職員合同研修会

①令和5年度冬学期合同研修会

令和5年9月8日(金)14時00分から16時15分までの時間枠で、全教職員参加の合同研修会を実施した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大リスクを回避するため、千数百名収容の大講堂で前後左右十分な間隔を空けた形での座席を設定し実施した。前半は「坂本常務理事の挨拶」「須原学長の学長方針」「原田学長補佐等からの発表」を中心に、後半は「各部署からの発表・連絡」等で構成されている。

○プログラム

<p><前半></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 坂本峰徳 常務理事 「挨拶」 2. 須原祥二 学長 「学長方針」 3. 原田保秀 学長補佐 西晃平 短期大学部ライフデザイン学科助教 (大学広報企画チーム) 「全学的な大学広報の推進について」 4. 福田順 教務部副部長 「生成A I の利活用に関する報告」

<後半>

5. 各部署からの連絡

- ・東隆史 入試・広報部長 「2024年度入試 総合型選抜の状況について」
- ・浅田昇平 教務部長 「冬学期の授業運営等について」
- ・伊達由実 学生支援センター長 「学生支援センターからのお知らせ」
- ・和田良彦 地域連携推進センター長 「地域連携活動について」
- ・橋本寛 経理課長 「予算管理・経費精算システムの導入について」

6. 一居利博 事務局長 「研究不正等の防止について」

②令和6年度夏学期合同研修会

令和6年3月28日(木)13時40分～15時50分の時間枠で、令和6年度の新着任教職員を含む全教職員参加の合同研修会を実施した。前半は、開会に先立ち、人事課長より「新任教員・事務職員の紹介」があり、次に「坂本常務理事の挨拶」、「須原学長の学長方針」があった。後半は各部署から発表が行われた。

○プログラム

<前半>

1. 坂本峰徳 常務理事「挨拶」
2. 須原祥二 学長 「学長方針」

<後半>

3. 各部署からの連絡

- ・浅田昇平 教務部長・福田順 教務部副部長 「授業等に関わる学則等の改正について」
「令和6年度授業の運営について」
「本学の生成AIの利活用等について」
- ・伊達由実 学生支援センター長 「合理的配慮提供の義務化に伴う障害学生支援について」
- ・東隆史 入試・広報部長 「2024年度入試の結果と今後の取り組み」

- ・木村雅則 教職教育推進センター長 「教員採用試験結果から見えること」
- ・和田良彦 地域連携推進センター長 「地域連携活動について」

第 2 章 令和 5 年度学生による授業評価アンケートの実施結果について

1. 授業評価アンケートの実施方針

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008（平成 20）年 12 月 24 日）において「学生による授業評価の結果は、業績評価の指標としての信頼性に課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であると考え」（p.40）と指摘され、授業評価の教育面への活用が求められている。

本学においても 2006（平成 18）年度に学生アンケート委員会を設置し、学生アンケートの計画・実施を行った。その後 2008（平成 20）年度に学生アンケート委員会から FD 委員会に発展的改組を行い、以降についても試行錯誤しながら学生アンケートを実施してきた。このような試みの中、全学的な授業改善に向けた教育評価を実施する上での枠組みとして、2010（平成 22）年度には、授業を実施する前の診断的評価、途中の形成的評価、最後の総括的評価という評価の活用方法について検討してきた。すなわち、診断的評価として、プレースメント・テストや第 1 期学生アンケート（2 回目の授業時）の実施、シラバスの内容の充実、そのシラバスの内容を受講生に理解させるための試み等を実施した。その他、形成的評価として 7, 8 回目の授業時における第 2 期学生アンケートの実施、学習成果に関する中間テストの結果や学習者による自己評価の結果の活用、教員相互の授業参観による同僚評価等を行った。最後に、総括的評価として、授業に関する情報収集や授業に対する学生の評価や意識の測定のための第 3 期学生アンケート（14, 15 回目の授業時）の実施、定期試験やレポート等による学習面の成果の把握を行ってきた。2010（平成 22）年度だけではあるが、3 回の学生アンケートを実施することにより、教員に対する授業概要（シラバス）の重要性と学生への理解促進に向けた取り組みの意識付けを行った。以上のような考えに基づき、本学では授業改善に向けた様々な対応を取ってきた。

特に、診断的評価においては、1 年生入学時のプレースメント・テストの実施、シラバス内容の充実化、各授業のオリエンテーション時に授業担当者が授業概要（シラバス）の内容を受講生に周知徹底を進めてきた。特に、平成 29 年度は、学生の学修成果の可視化の一環として、PROG テストをすべての 1 年生に実施した。そして、これまでと同様に、形成的評価と総括的評価については、本章で述べる学生アンケートを学期中に 2 度実施してきた。2 回の学生アンケートの利用方法として、本学では、これまでに PDCA サイクルによる改善を目ざしてきた。すなわち、授業を計画 [P (Plan)] し、実施 [D (Do)] し、確認 [C (Check)] し、改善 [A (Act)] するという PDCA サイクルによる授業改善を進めてきたのである。大学の授業の場合、シラバスが授業の計画 (P) になり、授業を実施 (D) し、途中で教員と学生の間で教員は学生から見て授業が適切にわかりやすく実施されているか、学生は授業に積極的に参加しているかを相互に確認 (C) しあうことになる。ここで確認した結果をもとに教員と学生の双方で改善 (A) し、学生の学習内容の理解がさらに進み、単位の修得へとつながることを目指してきた。また、中央教育審議会 2012（平成 24）年 8 月 28 日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主

体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学生の学修時間の実質的な増加・確保が、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立の諸方策と連なって進められる必要があることが指摘されている。学生アンケートは、教育職員が学生からの意見を聴取し、学生の学習時間の実質的な増加に向けて、資料を収集する手段になりうるものである。そこで、特に 2012（平成 24）年度からは、授業時間以外の学習時間を測定する項目を新たに加えた。

令和元年度からは、「学生アンケート」を「授業評価アンケート」と名称を改め、平成 30 年度までの学生アンケートの質問項目について、スマートフォンを活用し、IBU.net を通じて原則として全科目の授業についてアンケートを実施した。翌令和 2 年度については、前年度の方法を採用しつつ、遠隔授業に対応して設問を一部修正した上で実施した。令和 3 年度には、授業の改善点を従来以上に抽出できる設問にするための議論を行った。その結果、授業の改善点が絞りやすい設問にするという点と、学科ごとの特徴を抽出するためにデータの散らばりが生じる設問を目指した。令和 4 年度は、令和 3 年度の設問を基本としたが、教員の指導に対する学生の姿勢の抽出と、自由記述でよかった点と改善につながる点との切り分け方について議論した。その結果「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」という設問を加えると共に、自由記述から授業の特徴を抽出しやすくするために、複数の設問に分けることとした。令和 4 年度の実施について、夏学期については、新しいアンケートについての更なる議論を継続したため、自由記述を分けた点を除いて、従来とほぼ同じ設問項目で実施した。冬学期については、議論を重ねて追加した設問項目を入れたアンケートを実施した。

令和 5 年度はこれまでの議論を踏襲し、令和 4 年度冬学期と同じ設問項目で実施した。以下、全学的な授業改善に向けた取り組みによって明らかになった傾向と課題について報告する。

2. 授業評価アンケート実施目的

本学では、授業評価アンケートの実施により、以下の 2 点の達成を目指している。第 1 に、授業評価アンケートの活用により、授業の改善が進み、シラバスに明示された到達目標が意識され、授業外学習時間も増加することで、単位の修得へとつながることを目指している。その結果、セメスターごとに決められている履修上限（キャップ制）の制度が機能し、セメスターごとの学生の達成感や知識・技能を身につけることができたという有能感も高まることが期待される。第 2 に、全体的に学生の単位修得が進むことで大学全体の GPA は上昇し、大学全体の教育力を示す指標としての GPA 制度が機能することを目指す。本学で導入されているセメスター制、キャップ制、GPA 制度は、それぞれ別個の制度ではなく、教員による教育の改善と学生の学習の成果の向上とに関連してそれぞれの制度が関係しながら、機能していくものと考えられる。以上のことを踏まえ、授業評価アンケートによる授業改善の目標として、「学生の意見に耳を傾けることにより、学生にとって理解しやすい授業の実施に向けた工夫を進める」「学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識を深める」の 2 点を設定し、アンケートを実施した。

3. 授業評価アンケートの実施方法

令和5年度は、専任教員・非常勤講師を問わず、学期の第14回または15回の講義時に、IBU.netを通じて授業評価アンケートを実施した。各教員は、授業評価アンケートの趣旨等の説明文を共有し、講義内でそれを資料または口頭で説明して、学生にアンケートの回答を求めた。またアンケート回答の総計は、IBU.netで集計され、その結果について各科目単位で教員が改善コメントを入力した。授業評価アンケートの選択設問項目は、ほぼ夏冬学期同じである。表1にて示す。

表1 授業評価アンケートの設問項目

【設問項目】	
設問内容	(評価値) 回答内容
1. 授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
3. 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等のICTが活用されていましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
4. 先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
7. 授業で学んだ内容を元に、自分で調べたり考えたりしましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
8. この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか。	(5): 意欲的に取り組んだ (4): ある程度意欲的に取り組んだ (3): どちらともいえない (2): あまり意欲的に取り組まなかった (1): 全く意欲的に取り組まなかった
9. この授業1回分に対する予習・復習等について平均してどのくらいの時間をかけましたか。	(5): 4.5時間より多い (4): 4.5時間以内 (3): 3時間以内 (2): 1.5時間以内 (1): 30分以内
10. この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか。	(5): 達成できた (4): ある程度達成できた (3): どちらともいえない (2): あまり達成できなかった (1): 全く達成できなかった
11. あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない

表1の設問項目について説明する。アンケート全体を、授業の分かりやすさ、ICT活用の有無、アクティブラーニング要素の有無、学生意欲の変化、学習時間を問う、履修に際しての学生の姿勢業全体の統括、という内容で構成している。授業の分かりやすさに対して、設問1「授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。」、設問2「授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。」と2つの設問に分け、改善点を絞るようにしている。設問3「授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホ、インターネット等のICTが活用されていましたか。」では、授業でのICT活用の有無という視点を取り入れている。設問4「先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら進めていましたか。」と設問5「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」では、「主体的・対話的で深い学び」を導くアクティブラーニング要素の有無を問うている。設問6「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」と設問7「授業で学んだ内容を元に、自分で調べたり考えたりしましたか。」では、授業を受けたことによる学生意欲の変化を問うことで学習効果を検証する材料としている。設問8「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」では、学生の学びに対する姿勢を問うている。さらに、設問9「毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。」は、学習時間を問

うている。設問 10「この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか。」については、昨年度のディプロマポリシーや履修に際しての学生の姿勢を引き継ぐ形で「シラバスの理解」という視点を取り入れている。設問 11「あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。」は、授業全体の統括をする設問としている。

集計は、「1:(そう思う)」が 5 点、「2:(少しそう思う)」が 4 点、「3:(どちらともいえない)」が 3 点、「4:(あまりそう思わない)」が 2 点、「1:(思わない)」が 1 点で採点している。これらの選択設問に加え、自由記述として「この授業で良かった点があれば書いてください。」「この授業の改善につながるような意見があれば書いてください。」「その他、自由に感想を書いてください。但し、単なる批判や誹謗中傷は慎んでください。」という 3 つの問いを設定して、授業の特徴が抽出しやすい形にした。

(1) 夏学期授業評価アンケート

夏学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 5 年 7 月 10 日(月)～7 月 24 日(月)を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 5 年 7 月 25 日(火)～8 月 8 日(火)を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

(2) 冬学期授業評価アンケート

冬学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 5 年 12 月 23 日(土)～令和 6 年 1 月 16 日(火)を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 6 年 1 月 17 日(水)～2 月 3 日(土)を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

4. 集計結果と授業評価アンケートの結果に対する対応

(1) 夏学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

夏学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 2 の通りである。回答率については、大学合計 55.72%(前年度 60.76%)、短大合計 74.89%(同 75.67%)、総計 57.36%(前年度 62.26%)となった。

表2 夏学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率

【実施科目数等】				
授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率 (%)
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）	1	971	674	69.41%
日本学科	66	1,521	910	59.83%
国際キャリア学科	52	854	503	58.90%
社会学科	84	3,674	1,883	51.25%
人間福祉学科	66	1,372	778	56.71%
教育学科小学校教育コース	126	4,201	2,149	51.15%
教育学科中高英語教育コース	33	727	283	38.93%
教育学科保健教育コース	22	867	553	63.78%
教育学科幼児教育保育コース	58	1,586	829	52.27%
経営学科 公共経営専攻	37	1,232	832	67.53%
経営学科 企業経営専攻	60	3,111	1,866	59.98%
看護学科	59	2,062	1,017	49.32%
高等教育推進センター	11	753	423	56.18%
大学非常勤	424	16,759	9,416	56.18%
大学合計	1,099	39,690	22,116	55.72%
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）	1	147	136	92.52%
保育科	45	1,629	1,025	62.92%
ライフデザイン学科	29	893	812	90.93%
短大非常勤	33	1,050	812	77.33%
短大合計	108	3,719	2,785	74.89%
総合計	1,207	43,409	24,901	57.36%

集計された授業評価アンケートの結果は、IBU.net を通じて科目担当者に公開された。その後、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

(2) 夏学期授業評価アンケート集計結果について

夏学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表3の通りである。

表3 夏学期授業評価アンケートの回答結果（平均値）

【設問項目に対するアンケート集計結果 ※平均値】											
授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）	4.16	4.17	3.94	3.43	2.92	3.75	3.34	4.06	1.57	4.00	3.90
日本学科	4.26	4.22	4.19	4.19	4.14	4.17	4.20	4.37	2.45	4.13	4.30
国際キャリア学科	4.29	4.28	4.29	4.25	4.38	4.21	4.17	4.28	1.89	4.07	4.28
社会学科	4.34	4.29	4.33	4.21	4.02	4.26	4.18	4.34	2.14	4.15	4.39
人間福祉学科	4.27	4.22	3.96	4.11	3.98	4.22	4.00	4.27	1.95	3.99	4.36
教育学科小学校教育コース	4.31	4.27	4.28	4.27	4.42	4.30	4.13	4.40	1.96	4.21	4.43
教育学科中高英語教育コース	3.94	4.04	4.35	4.01	4.18	4.06	3.98	4.28	2.19	4.13	4.10
教育学科保健教育コース	4.24	4.29	4.20	3.90	3.69	4.20	4.04	4.30	1.96	4.16	4.39
教育学科幼児教育保育コース	4.40	4.27	4.18	4.22	4.46	4.40	4.20	4.51	2.00	4.27	4.50
経営学科 公共経営専攻	4.18	4.20	3.98	4.08	3.92	4.11	4.07	4.25	1.81	4.12	4.25
経営学科 企業経営専攻	4.30	4.23	3.97	4.13	3.81	4.13	3.97	4.23	1.81	4.06	4.28
看護学科	4.40	4.40	4.33	4.39	4.54	4.38	4.36	4.54	2.43	4.32	4.47
高等教育推進センター	4.26	4.34	4.55	4.16	4.02	4.07	4.05	4.27	1.96	4.12	4.23
大学非常勤	4.24	4.15	4.04	4.09	3.95	4.10	3.98	4.28	1.88	4.08	4.26
大学平均	4.27	4.21	4.12	4.13	4.03	4.17	4.04	4.31	1.96	4.12	4.31
和の精神Ⅰ／仏教Ⅰ（瞑想）	4.33	4.30	4.27	3.81	3.46	4.09	3.71	4.29	1.51	4.18	4.14
保育科	4.63	4.44	4.05	4.39	4.45	4.60	4.19	4.61	2.01	4.34	4.68
ライフデザイン学科	4.49	4.47	4.40	4.38	4.24	4.36	4.13	4.46	1.50	4.27	4.50
短大非常勤	4.56	4.50	4.24	4.45	4.21	4.48	4.28	4.55	1.79	4.33	4.57
短大平均	4.50	4.44	4.25	4.33	4.18	4.42	4.17	4.50	1.79	4.28	4.52
総平均	4.30	4.24	4.13	4.15	4.05	4.20	4.05	4.33	1.94	4.14	4.33

前年同様、学習時間を問うた設問 8（「毎日の授業時間について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか」）以外は、評価平均点

が概ね 4.00 ポイントを超えている。このことから、学生は意欲的に学習に取り組み、教員の授業への工夫等も正当に評価されていることが窺える。特に、設問 11（「あなたは総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。」）については、大学も短期大学もそれぞれに高いポイントとなっていて、全体的に学生にとっても満足度の高い授業が実施されていると考えられる。

一方、設問 9（「毎日の授業時間について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか」）については、全ての学部・学科で 3.00 ポイントを下回っている。このことは、多くの学生が一つの授業に対し、その授業時間を含めても 3 時間以内または 1.5 時間以内しか勉強していないということを示している。つまり、授業時間以外に行なっている学習時間は極めて短いものであるため、授業時間以外に学習をさせるための手立てを講じる必要があるようである。前年も同様の結果が見られ、教員が各々改善を行ったと考えられるが、改善に至らなかったと考えられる。

上述した通り、授業評価アンケートの集計後には、IBU.net を通じて各教員に対して改善コメントの記入を求めた。また、「この授業の改善につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください。」とした自由記述の回答結果については、担当者・担当科目を匿名化した上で、学科ごとに整理し、各 FD 委員によって傾向と課題が各学科に報告されている。

（3）冬学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率等について

冬学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表 4 の通りである。回答率については、大学合計 53.07%（昨年度冬学期 59.72%）、短大合計 65.18%（同 63.51%）、総計 53.34%（同 60.11%）となった。なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメントの内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

表 4 冬学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率

【実施科目数等】				
授業担当教員の所属	授業数	受講者数	回答者数	回答率 (%)
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ (写経)	1	937	612	65.31%
日本学科	53	1,346	849	63.07%
国際キャリア学科	56	1,136	573	50.44%
社会学科	78	3,330	1,523	45.73%
人間福祉学科	59	1,189	589	49.53%
教育学科小学校教育コース	93	3,583	1,848	51.57%
教育学科中高英語教育コース	26	479	224	46.76%
教育学科保健教育コース	21	977	545	55.78%
教育学科幼児教育保育コース	44	1,499	833	55.57%
経営学科 企業経営専攻	54	2,504	1,417	56.58%
経営学科 公共経営専攻	33	1,108	714	64.44%
看護学科	43	1,124	502	44.66%
高等教育推進センター	9	398	212	53.26%
大学院専任	2	95	42	44.21%
大学非常勤	347	13,383	7,079	52.89%
大学合計	919	33,088	17,562	53.07%
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ (写経)	1	144	116	80.55%
保育科	43	1,583	910	57.48%
ライフデザイン学科	29	720	585	81.25%
短大非常勤	32	1,428	915	64.07%
短大合計	105	3,875	2,526	65.18%
総合計	1,024	36,963	20,088	54.34%

(4) 冬学期授業評価アンケート結果について

冬学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値は、表5の通りである。以下、設問ごとの特徴についてみていく。

表 5 冬学期授業評価アンケートの回答結果 (平均値)

授業担当教員の所属	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ (写経)	4.16	4.14	4.02	3.54	3.12	3.75	3.50	4.12	1.77	4.06	3.94
日本学科	4.35	4.28	4.22	4.31	4.30	4.33	4.37	4.50	2.61	4.24	4.42
国際キャリア学科	4.24	4.19	4.14	4.28	4.29	4.16	4.10	4.23	1.94	4.05	4.23
社会学科	4.32	4.29	4.33	4.19	4.04	4.22	4.16	4.29	2.29	4.13	4.33
人間福祉学科	4.33	4.20	4.01	4.27	4.29	4.35	4.21	4.34	2.10	4.12	4.40
教育学科小学校教育コース	4.36	4.32	4.31	4.28	4.40	4.34	4.23	4.46	2.02	4.27	4.46
教育学科中高英語教育コース	4.25	4.26	4.37	4.17	4.34	4.16	4.06	4.40	2.08	4.06	4.29
教育学科保健教育コース	4.27	4.30	4.13	4.13	3.88	4.17	4.12	4.31	2.02	4.11	4.36
教育学科幼児教育保育コース	4.22	4.23	4.19	4.13	4.33	4.32	4.17	4.44	1.98	4.20	4.39
経営学科 企業経営専攻	4.31	4.28	4.11	4.18	3.94	4.17	4.06	4.27	1.89	4.12	4.29
経営学科 公共経営専攻	4.39	4.36	4.16	4.29	4.02	4.31	4.20	4.35	1.90	4.20	4.42
看護学科	4.29	4.29	4.32	4.34	4.33	4.27	4.27	4.42	2.21	4.25	4.39
高等教育推進センター	4.31	4.30	4.56	4.29	4.08	4.23	4.12	4.32	2.23	4.08	4.26
大学院専任	4.21	4.36	4.45	4.48	4.64	4.43	4.45	4.55	3.07	4.26	4.48
大学非常勤	4.25	4.17	4.04	4.13	4.01	4.15	4.03	4.29	1.90	4.12	4.28
大学平均	4.29	4.23	4.14	4.17	4.08	4.21	4.09	4.33	2.01	4.15	4.33
和の精神ⅠⅠ／仏教ⅠⅠ (写経)	4.17	4.16	4.25	3.96	3.54	3.97	3.77	4.23	1.80	4.12	4.14
保育科	4.58	4.40	4.11	4.44	4.47	4.56	4.23	4.60	1.78	4.43	4.64
ライフデザイン学科	4.53	4.51	4.43	4.45	4.33	4.45	4.24	4.53	1.62	4.38	4.56
短大非常勤	4.38	4.34	4.21	4.17	3.98	4.29	4.08	4.33	1.76	4.20	4.40
短大平均	4.45	4.40	4.28	4.34	4.20	4.37	4.16	4.46	1.72	4.32	4.48
総平均	4.31	4.25	4.16	4.19	4.09	4.23	4.10	4.34	1.98	4.17	4.34

まず、設問1・設問2の授業のわかりやすさと設問4のアクティブラーニング要素については、ほとんどの学科の平均が4.00ポイントを超えていて、学生にとってのわかりやすく活動的な授業が大学全体で展開されていることがわかる。一方で、設問5（「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」）については、4.00ポイン

トに届かない学科がいくつかあり、「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、授業方法の検討が望まれるだろう。設問3の ICT 活用の有無については、どの学部のポイントも高く、授業内において ICT が積極的に活用されてきたことが示された。設問6と設問7の学習意欲の変化と、設問10の授業全体の統括については、どの学科もそれぞれに高いポイントを指している、これまでと同様に満足度の高い授業が実践されていた様子が窺えた。設問8の学生の学習態度については、全ての学科において4.00ポイントを超えており、学習に対する積極的な態度が育成されたと考えられる。設問9の学習時間については、前年同様どの学科も夏学期に比べると概ね増加している。このことについては、学生の学習意欲向上や教員の授業法の改善がみられたことなど複数の要因が考えられる。

以上、令和5年度の授業アンケートの結果を概観した。学生の学びを深化させる授業の実施を目指して、今後は学部学科を越えて、授業方法を共有する取り組みが課題となろう。今後もアンケート結果を活かした、日々の教員の授業改善の取り組みが必須である。

5. 今後の課題

本学では、PDCA サイクルにより、授業改善を進めてきた。今年度もほとんどの科目について授業評価アンケートを実施し、全学的な課題等は把握できた。しかし、具体的な授業改善については、各科目担当に委ねられている状況である。また、学生の授業に対する態度や学生自身の学びに対する自己認識については、数値上は一定の成果がみられるが、学修成果に結びついているか否かについては、検討が必要だろう。上述したように、各科目単位での授業改善だけでなく、学科単位での授業改善や学生と協働した授業改善等、組織的な授業改善の取り組みが重要であり、今後、FD 委員会を中心とした組織的な検討がより重要になろう。なお、デジタル社会に応じた授業のあり方が問われる現在においては、FD 活動の充実がより重要になる。従来から取り組んで授業概要(シラバス)のあり方やリフレクション・ペーパーの活用等による学生とのコミュニケーションの改善についても、授業形態に応じた工夫が必要であろう。本年度の取り組みを踏まえ、次年度以降もシラバスや授業方法に関する FD の研修会を通して、授業改善に向けた課題意識の共有を図っていきたい。

[引用文献]

- 文部科学省 2008 年 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」(答申)
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf)
- 文部科学省 2012 年 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)

第3章 各学科・専攻・コースによるFD活動について

人文社会学部 日本学科

1. はじめに

本報告書では、下記の科目・取り組みについて述べる。

2. (1)「大学基礎演習Ⅰ」(2)「大学基礎演習Ⅱ」(3)「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」(4)「日本学基礎演習Ⅰ」 3. 授業相互参観について 4. (1)「パフォーマンス実践演習」(2)「日本学インターンシップ演習」(3)教員採用試験対策 (4)「地域・文化発信演習」

いずれもおおむね順調で、期待した効果が得られた。教員採用試験対策では、大きな結果に結びつき、5名の現役合格者(中学国語4名・高校国語1名)を得た。また、「大学基礎演習Ⅰ」「大学基礎演習Ⅱ」「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」「パフォーマンス実践演習」では、学期末に各科目で独自にアンケート調査を行っており、「有意義だった」などの肯定的評価を得ている。ただし、後述の「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」報告が指摘するように、アンケートで否定的な学生に退学のおそれがあることは、注意しておかねばならない。

新型コロナが収束し、対面授業が本格化したための好影響もあった。「日本学基礎演習Ⅰ」では、グループ活動・プレゼンテーションを増やすことができ、満足度も高まった。「パフォーマンス実践演習」も、全面对面になったおかげで、身体表現により発信力を延ばすという、授業本来の良さが発揮でき、満足度100%という快挙であった。

一方、今後の課題も複数見えてきた。まず、日本漢字能力検定・日本語検定について、合格者数が伸び悩んでいる問題がある。日本学科らしい基本的知識・教養を修得させたいという意図での取り組みである。現在、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」(1年生必修)・「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」(2年生必修)の授業内容に取り入れ、模擬試験も実施している。今後、学習意欲を引き出すための、何らかの工夫が必要である。

履修者数の少なさという問題も存在する。本報告書で取り上げている「パフォーマンス実践演習」「地域・文化発信演習」「日本学インターンシップ演習」は、学科の中核的な位置づけの科目である。それだけに、学生にとっては負担が大きいらしく、しばしば履修者が少ないという現象が起きる。すでに対策として行っているのは、授業紹介動画を見せての勧奨であり、ある程度の効果はあった。しかし、「地域・文化発信演習」はいまだに少ないため、令和6年度は授業内容の見直しを行う予定である。

個別の科目では、「日本学基礎演習Ⅰ」(2年生必修・4クラス割)が、後述するように、課題の量や内容について調整が必要である。すでに令和5年度も、担当者間の話し合いが行われたのだが、学期末アンケートからさらなる調整の必要性が判明した。令和6年度に向けて、担当者間ですでに協議済みである。

最後に、生成系AIについて述べる。いずれ、すべての授業で対応が求められるが、まずは「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」で問題となるだろう。小論文やスピーチ原稿などを書かせる機会が多いためである。令和6年度に向けて複数の対策を立てておくことが急務である。

(文責 田島智子)

2. 基礎的必修科目について

(1) 「大学基礎演習 I」(1 年次必修)

Plan (計画)

R5 年度は、扱う内容はほぼ前年度を踏襲し、次のように計画した。①初期は、クラスメートや教員との人間関係を築くこと、入学時ガイダンスで指導しきれなかった学修・ICT に関する指導を主眼とする。②学生の日本語力向上につながる様々な取り組みを行う。③将来の進路や、それに向けて学生時代にすべきことへの意識を持たせる。

Do (実施)

①については、前倒し第 1 回～第 4 回授業で、全体合同または 2 クラス合同授業の形態で、学修に必要な知識や ICT 技能の指導（実践練習を含む）を行った。②については、教員に向けたメールの指導、グループでの討論、「私の薦める一冊」の原稿作成およびプレゼンテーション、漢字能力検定 2 級・日本語検定 2 級合格相当の力を目指しての取り組みを行った。③については、学科上級生のスピーチ、キャリアに関する専門家のお話、卒業生のスピーチを聴聞し、先達の経験や助言から学び、将来について考える機会を設けた。

Check (評価)

〈受講生の評価〉学期末に実施した学科独自アンケート（64 名回答）から抽出する。

1 「大学基礎演習 I」全体について…有意義との回答 87.5% 2 ICT 指導…高評価（1 を最良とする 5 段階評価における 1 と 2）76.6% 3 ディスカッション…高評価 78.2% 4 「私の薦める一冊」原稿作成…高評価 84.4% 5 「私の薦める一冊」プレゼンテーションと相互評価…高評価 78.1% 6 漢検・日検 2 級相当の日本語力への取り組み…高評価 79.7% 7 在学生・キャリアの専門家・卒業生のお話を聴く…高評価がそれぞれ、82.8%・79.7%・76.5%。2～6 は前年度を上回った。つねに高評価の 7 が例年ほどではなかったが、評価理由を見ると、欠席者が「欠席で聞いていない」を理由に低評価をしているケースが少なくない。1 年生にとってのロールモデルの提示、有用な助言の提示という意義があり、今後実施していく。なお、自由記述の感想はほぼ肯定的であった。

〈授業担当者として〉令和 5 年度入学生数は例年より少なく、6 つ割クラスの人数も少なくなったので、その分、各学生に割く時間が取れ、じっくりと指導できた。それが 2～6 の評価に結びついたのかと思う。

Act (改善)

授業で扱うテーマを大きく入れ替える要はないと思われるが、次の項目については検討が必要であると考えられる。

・日本語力向上の取り組み…ディスカッション（聞く・話す）、「私の薦める一冊」原稿作成（読む・書く）とプレゼンテーション（聞く・話す）には学生も身を入れて取り組み、効果を上げていると言える。しかし、漢字検定・日本語検定 2 級合格者の増加というわかりやすい結果は残念ながら出せていない。学科として受験を推奨し、この授業内で時間を割いているが、R5 年度入学生の漢検 2 級受験者はのべ 3 人で、合格者は 0 だった。日検は本

学での受験者がなかった。授業内での限られた取り組みだけでは不十分で、自主的な試験勉強が必要であることは1年生に言っているがあまり浸透していない。学科上級生では、漢検2級受験者10名、合格3名で、勉強の時間をかければ合格率は上がることがわかっている。1年生に対しても、実力に結びつける良い方策がないかが検討課題である。

・生成AIの普及の影響…「教員へのメール」の実践課題や「私の薦める一冊」の原稿作成において、学生が自ら内容を考えることなく安易に生成AIを利用してしまふ懸念があり、それへの対策が必要である。1回完結のメール指導については、宿題にせず授業内課題とすることで対処できるが、数回かけて取り組み部分的に宿題とする「薦める一冊」原稿作成については、別の有効な対策を考えなくてはならない。場合によっては、このテーマ自体の変更もあり得るが、「大学基礎演習Ⅱ」の主要項目「ブックトーク」につながる本学科の特徴的な取り組みであり、何とかこのテーマは保持していきたいと考えている。

(文責：高橋美奈子)

(2)「大学基礎演習Ⅱ」(1年次必修)

Plan (計画)

本科目は日本学科初年次ゼミ科目として開講12年目となる。プログラムの柱としている授業前半の「ブックトーク」個人発表と「四天王寺ツアー」グループ発表は、以前より、読解力やプレゼン能力の向上にある程度の効果が認められていることから、その基本的な授業形態を維持することとした。それに、「日本学表現演習Ⅰ」から継続する漢字検定と日本語検定の模試をおこなって、成績評価に加えることとした。

Do (実施)

授業の実施形態は、おおむね計画通りに実施できた。対面実施が必須である漢字検定と日本語検定の模試についても、スムーズに実施できた。

Check (評価)

昨年度に引き続き、この科目の独自アンケートをGoogle Formにて実施し、受講者数約83名のうち49名から回答を得た。ブックトークは約94%から「有意義であった」という回答を得たのに対して、四天王寺ツアーは約88%の回答にとどまり、後者の満足度がやや低かった。これは例年の傾向と同じであるが、やや改善されたように思われる。

また、「漢字検定と日本語検定の模試」については約80%が「有意義だった」と回答している。

Act (改善)

今年度は、当初より最後まで対面で授業が実施することができた。受講学生からは一定の評価を得ていることから、プログラムを大きく変える必要はないと思われる。

とはいえ、四天王寺ツアーの取り組みへのテコ入れ、漢字検定と日本語検定の模試をどのように組み入れるか、またそれらを独自アンケートに反映させることを検討する必要があるように思われる。

(文責：今田健太郎)

(3)「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」(1年次必修) (旧科目名「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」)

Plan (計画)

本科目は、日本学科のディプロマ・ポリシーを具体的に実践すべく、学生が日本語(表現)についての幅広い知識を体系的に修得し、基本的な事項を理解することとどまらず、そうした知識・事項にもとづいた精確かつ適切な日本語表現力を身に付けて、これを的確に運用できるようになることを目指している。これは従来どおりである。なお、授業担当は、1年生全員を学籍番号順に4分割し、夏学期の「Ⅰ」は、①中村、②田島、③野中、④坂田が、冬学期の「Ⅱ」は、①田島、②中村、③坂田、④野中がそれぞれ担当した。

Do (実施)

それぞれの授業内容は、Ⅰは、①概論、「言葉とは何か」を考える、叙述・構成の方法を学ぶ、②「言葉と私」の小論文を書く、メールの書き方、③小論文「言葉と私」の発表と相互評価、④敬語の学習、⑤「心に残る表現」の原稿作成とスピーチ、⑥スピーチ「心に残る表現」のルーブリックによる相互評価、⑦「言葉と私」の小論文(最終レポート)、の7項目である。Ⅱは、①表現の工夫について(流行語・キャッチコピー・レトリック等)、②履歴書の書き方の説明と実践、③スピーチ(自己アピール、原稿作成と発表)、④スピーチの相互評価とフィードバック、⑤正式な手紙の書き方の説明と実践、⑥文章の要約のしかたの説明と実践、⑦スピーチ(和の精神と私、原稿作成と発表)、⑧スピーチの相互評価とフィードバック、⑨敬語の学習、の9項目である。

Check (評価)

Ⅰ・Ⅱともに、学期末に学生に対する独自アンケートを実施した。質問項目は、それぞれ上記授業内容に加えて、Ⅰでは⑧授業全体の感想を、Ⅱでも⑩授業全体の感想を尋ね、「評価1=とても勉強になった 2=勉強になった 3=どちらとも言えない 4=勉強にならなかった 5=まったく勉強にならなかった」の5段階で学生に評価させた。集計結果は次のとおりである。(自由記述欄は割愛) これは、昨年度と変わっていない。

Ⅰ							Ⅱ						
	1	2	3	4	5	合計人数		1	2	3	4	5	合計人数
①	42	18	1	0	1	62	①	40	22	2	1	0	65
	49						②	47	15	3	0	0	65
②		12	0	0	1	62	③	45	17	2	1	0	65
③	45	15	1	0	1	62	④	48	15	1	1	0	65
④	45	13	2	1	1	62	⑤	45	17	2	1	0	65
⑤	42	15	4	0	1	62	⑥	46	14	5	0	0	65
⑥	40	18	3	0	1	62	⑦	43	18	3	1	0	65
⑦	40	15	6	0	1	62	⑧	41	19	4	0	1	65
⑧	45	13	2	1	1	62	⑨	46	18	0	1	0	65
							⑩	49	14	0	1	1	65

Act (改善)

上に掲出したアンケート結果は、かなり良好な学生からの評価と言えよう。ただ、授業全体の感想を尋ねたⅠの⑧とⅡの⑩において、ごく少数だが否定的評価をしている者がいるのは気になるところである。このような学生は、基礎的な授業であるにもかかわらず授業についてこられず、大学の授業に意義を見出せなくなって退学する可能性を秘めているからである。我々担当教員は、より丁寧な授業を心掛けるとともに、受講学生の情報を共有し、より適切かつ懇切に学生を指導しなければならない。ピアタを有効に活用するのも一法であるが、これまで以上に、教員と学生、および、学生同士の人間関係・コミュニケーションをより密なものにして、授業についてこられない学生を出さないように心掛けたい。

(文責：坂田達紀)

(4)「日本学基礎演習Ⅰ」(2年次必修)

令和5年度は、完全対面での実施となったため、従前の授業パターンに戻して実施した。

Plan (計画)

- ・これまでの学修課程において、本来対面で実施すべき授業をオンラインで受講していることも多かったことから、学生に不足している大学生としての学修能力を確実に修得させ、ゼミでの学修につなげる。ただし、学力に応じて、学習内容を削減し、学生の負担を減らす。
- ・学生の相互評価ルーブリックは、プレゼン回数に応じて「プレゼンテーションにおいて達成すべきこと」→「達成すべきことが達成できているか」という段階的のルーブリックを使用。
- ・「日本学インターシップ演習」などの実践的な科目に発展的にリンクさせるべく、授業期間内に相互連携の時間を設ける。
- ・授業担当者によって課題の内容に相違があることへの不満が相変わらず示されたので、課題についての担当者間での調整作業を行い、学生間での不満が無いようにする。

Do (実施)

- ・対面授業となったため、グループワークやプレゼンは、可能な限り計画通りに実施した。
- ・メディアリテラシー教育・日本語能力・漢字検定模擬試験については計画通りに実施した。
- ・学科独自アンケートについては、グーグルフォームを使用してこれを実施した。

Check (評価) ⇒ Act (改善)

- ・学科独自アンケートの結果を踏まえて評価および改善すべき点について述べる。
- ★大学生に求められるレベルのレポートを作成できるようになるための学びについて
大変役に立った＝53.6% (昨年度 48.1%) ある程度役に立った＝41.1% (同 38.9%)
＝合計 94.7% (前年度 87%) *学習内容については満足していると思われる。
- ★結果として、あなたのレポート作成能力は向上したと思うか
向上したと思う＝89.3% (前年度＝64.8%)
どちらともいえない＝10.7% *対面実施による充実した指導の成果が出ている
- ★グループおよび個人でのプレゼンテーションについての感想
非常にやりがいを感じた＝41.1% (前年度 37%) ある程度やりがいを感じた＝53.6% (同 55.6%)
＝合計 94.7% (同 92.6%) *やはり対面授業の成果か

★シラバスについて変更の必要はない＝94.6%（前年度 88.9%）

*完全対面授業に戻ったことで、レポート作成技術がそれなりに取得できたという学生の自覚が学びについての満足度を上げています。現行の授業内容で、この科目としての目標は達成できる状況にあると考えるが、自由記述欄で、作成物や提出物の多さに対する不満が記されており、実際、担当教員にとっても負担が大きかったことから、導入部分での作業量を削減し、もう少し時間的にゆとりのある授業展開ができるように、次年度のシラバスを改定すべく、担当者同士の協議をおこなった。（文責：南谷美保）

3. 授業相互参観について

Plan（計画）

10月23日（月）のFD委員会からの依頼に応じ、学科各教員が各々相互授業参観を実施した。本学科においては教員養成に関する科目、また近年授業に求められている課題に関する科目を公開し、授業内容や方法について教員相互の知識技術の研鑽を目指した。

Do（実施）

参観は11月7日（火）～12月15日（金）にかけて実施した。全教員が自身の対象授業を設定し、また他の教員の授業に参観した。

Check（評価）

参観後、参観者は「参観シート」を記入し、速やかに授業担当者に提出し、授業担当者は「参観シート」をもとに「評価できる点」「改善すべき点」「検討を要する点」「今後への展望」などの観点から自己評価した、

Act（改善）

1月25日（木）・31日（水）の2回に渡り、オンライン学科会議内で合評会を実施した。各教員が自身の授業への参観シートに対しリプライし、それに対し学科教員が質問、補足、アドバイスを行うという形で進めた。指摘された課題や改善点について、他の科目にも共通する事例を挙げながら議論した。

（文責：森嶋俊行）

4. 学科独自の取り組みについて

（1）「パフォーマンス実践演習」

Plan（計画）

この科目は、学生の対面コミュニケーションの力を伸ばすために、「ヴォイストレーニング、口頭表現、身体表現などの諸要素を実習し、それらを踏まえながら、「他者への理解」あるいは「コミュニケーション」について取り扱ったパフォーマンスを、グループごとに創作し、発表する演習」（シラバスより）である。例年、夏休みの4日間の集中講義、いわば「合宿」のようなかたちで実施され、受講した学生からの満足度も高い。当初の計画は、ここ数年のプログラムを踏襲しつつ、洗練させたものであった。

Do（実施）

令和3年度にはリモートにせざるをえなかったが、それ以降は全日程を対面授業で実施することができてきている。また、履修希望者が適正な人数（20名程度）以内であっ

たため、選抜はおこなわなかった。ただ、当日前後に体調を崩す学生が続出したため、最終的な受講生は10名となった。またターゲットとしていた1年生よりも2年生が多い結果となった。

Check (評価)

科目の独自アンケートの結果、受講した学生の満足度は、対面授業で実施したこともあって「大変有意義だった」という評価が100%となった。短期集中のワークショップにより、自分が成長した実感をえられたと考えられる。

Act (改善)

今年度コロナ禍以前の授業形態を取り戻すことができた。今後は、対面授業の実施を前提のうえで、さらなる教育効果をあげるための工夫をおこなっていきたい。

(文責：今田健太郎)

(2)「日本学インターンシップ演習」

Plan (計画)

この科目は、日本学科の特性(表現能力を高め、日本文化を学ぶ)を活かしたインターンシップを5日間体験するものである。インターンシップに加え、インターンシップ前の事前授業、インターンシップ後の事後授業の取り組みにより、①学生が、自らの進路について考え、今後のキャリア形成に主体的に取り組むことができる、②「職場」を経験することにより社会人としての心構えや必要な技能・知識を習得することができる、③主体的な学びへの態度の育成、などを旨とする。開講から5年目に入り、昨年の取り組みを踏襲しつつも、昨年度の振り返りをふまえて事前授業や事後授業を計画した。

Do (実施)

例年、本授業の受講生確保に苦慮しているため、今年度は「日本学基礎演習Ⅰ」の授業時間内に、本授業の説明動画を流していただき、前年度の受講生の感想などを踏まえた実習先説明プリントを配布した。申し込み期間も7月初旬から下旬と長めに設定し、学生が受講しやすくなる工夫を行った。

受入先と学生の配属

受入先は、公立中学校(2校、6名)、日本語学校(1校2名)、公立学校図書館(2名)、市立図書館(2名)、市役所観光関係部署(2箇所2名)、広告代理店(1社2名)、イベント企画運営会社(1社2名)、人材教育・育成(1社4名)である。

実際の授業

事前学習：9月5日1～3講時、6日1～3講時(対面)

内容：インターンシップの心構え、基本的ビジネスマナー、会社・企業研究など。

インターンシップ実践：9月～12月の間、40時間の就業体験。

評価：受入機関の担当者からルーブリックによる評価をいただいた。

事後指導：実践終了後、個別に礼状作成、ビジネス文書の書き方などを指導。

成果発表会：1月31日3・4講時自己評価シートによる振り返りと発表用資料作成

2月1日 3・4講時 体験発表会(ハイブリッド)、授業アンケート

Check (評価) → Act (改善)

成果発表会は、zoom を利用したハイブリッド形式で実施し、受け入れ先企業ご担当者複数に参加した。学生が司会進行を務め、活発な質疑応答の場となった。また、授業評価アンケートも肯定的な評価が多数を占めていた。しかし、課題もある。第一に、派遣先の確保である。今年度は、例年お願いしていた1社にスケジュールが合わず、学生派遣ができなくなった。本授業を継続させるためにも派遣先と十分なコミュニケーションを取る必要があるだろう。第二に、発表に対する意識の向上である。成果発表会に向けて、授業外の時間に発表練習を行うように指示したが、当日の発表では原稿やスマホを読み上げる学生も少なくはなかった。学生の発表に対する意識を向上させる必要がある。

(文責：麻生迪子・野中拓夫)

(3) 教員採用試験対策

Plan (計画)

夏学期前半には、1次試験(大阪府は2次試験)に向けての面接練習指導受講(教職教育推進センター主催)を促し、夏学期後半は、専門教科対策として、主に4年生対象の専門教科セミナーの実施、2次試験(大阪府は3次試験)対策の面接・模擬授業の練習などを計画した。冬学期には、例年どおり、キョーサイ合格ころえプロジェクトの実施、3年生向け専門教科セミナーの実施、公立中学校授業見学会の実施を予定した。

1・2年生に向けては新設された「一般教養パワーアップ講座」の受講を強く推奨。また、教採の実施時期前倒しの流れを受け、教育実習を半期ずらし、3年生冬学期に実施するべく、カリキュラムの改変(授業実施セメスターの変更)準備をおこなった。また、「教科教育法Ⅱ(国語)」の履修要件の見直し、判定時期の変更等を行った。

Do (実施)

- ・専門教科セミナーは、一次試験の結果発表後、実施。現代文(松山担当)は7/25、27、8/1、4、7。古文(野中担当)は7/25、27、8/1、4、7。漢文(矢羽野担当)は7/25、27、8/1、4、7 に実施した。参加者は各日10名前後。対面を基本として実施。
- ・3年生の動機づけのため、今年も10月に自主勉強会のグループを2つ結成。週に一度、教採関連の学習をする時間を設け、仲間とともに教採合格を目指す環境作りを行った。
- ・1月から「キョーサイ合格ころえプロジェクト」を開始。実施日程は、1/15、22、2/2、5、16、19、26、3/1、11、の9回。実施内容は、「自主勉強会の手引き」を活用し、教採合格体験談、効果的な勉強方法(ノート作りを含む)紹介の後、自己PR、自治体別「求める教師像」の把握、教育観の醸成などを、原案づくり→模擬面接で確認というルーティーンで行った。参加者は、SA4年生6名、教職志望3年生14名であった。すべての回を対面で実施できた。
- ・2月以降、専門教科セミナーを設定した。実施は以下の日程で対面実施。現代文(松山担当)2/2、16、26、3/15。古文(野中担当)2/5、19、3/1、11。漢文(矢羽野担当)2/2、16、3/1、15 参加者は毎回13名程度あり、熱心に取り組んでいた。
- ・2/19に、公立中学校での授業見学会を実施。3回生12人と4年生2人が参加した。藤井寺市立第3中学校 且野翼先生(2017年卒)の授業を参観。ゆったりと参観できる

よう、2回に分けて実施してくださり、有意義な機会となった。

Check (評価)

- ・4年生教採受験者は、16名、うち合格者5名であった。大阪府の高校にも1名合格することができた。コロナ禍の一番厳しい時期に入学し、十分な対策も取れない時期が長かったが、諦めずに健闘してくれたと言えよう。
- ・キョーサイ合格こころえプロジェクトは学生の厚意に支えられながら引き継がれ、後輩たちもよく応えた。SAは教採合格者ばかりではなく、不合格者の有志も参加し、自分の失敗談を語ってくれた。
- ・「一般教養パワーアップ講座」は、申込段階では教職志望者の大半が登録したが、回を重ねるたび、出席者が減少し、定着させることができなかった。

Act (改善)

教採前倒しの影響で、大きくカリキュラムが変わることになった。特に新3年生、2年生は、入学時のカリキュラムからの変更が多岐にわたり、至る所で想定外の対応が求められることになる。学生への周知を適切に行うとともに、モチベーションを維持できるような丁寧な働きかけが必要となる。

(文責：野中拓夫・松山雅子)

(4)「地域・文化発信演習」

Plan (計画)

本科目は、日本学科における地域連携科目の中核として発展することを期し、令和3年度に開講されたが、受講者数が期待したほど伸びなかったため、本年度以降新たに松井浩子先生と田中清隆先生を担当教員に加え、授業計画をリニューアルした。学期前半に田中先生が地域の歴史や文化の概要を講義し、受講者が基本的な知識を学んだうえで、地域の文化を代表する文化資源を実際に訪れ、後半に松井先生の演習により動画作成方法を学び、地域の歴史や文化の魅力を発信する動画を完成させることを目標とした。実際に訪れる対象として、令和4年度は道明寺天満宮を選んだのに対し、本年度は令和3年度同様、誉田八幡宮とした。

Do (実施)

【内容及び形態】

前年度の受講者数が3名と少なかったことを踏まえ、本年度は夏学期において2年次必修科目「日本学基礎演習Ⅰ」及び3年次必修科目「専門演習Ⅰ」授業内で担当教員と前年度受講者による授業紹介をリモートで実施した。

今年度の最終的な履修登録者は、学科4セメスター生以上の6名であった。授業は計画の通り、前半において田中先生の講義を中心とし、そこで得ることのできた基本的な知識を踏まえた上で、11月19日(日)午後、誉田八幡宮を見学し、宮司へのインタビュー調査を実施した。その後後半で、各受講者が動画を作成し、発表した。

【成績評価】

授業前半の田中先生の課題評価30%、最終成果物の出来30%、平常点40%の比率で成績評価を行った。

Check (評価)

各受講者が地域の歴史や文化に関する知識を持ち、実際にフィールドを巡って情報やデータを得るとともに、これらの魅力を動画で表現することが出来た。

Act (改善)

履修登録者数は6名と、令和4年度の3名を上回ったものの、最終課題を提出し、単位認定に至った受講者数は3名にとどまってしまった。これは、前年度まで動画作成の授業が本学科に皆無だったこともあり、最終成果物を完成させることに困難を感じた受講者が多かったのも一因と考えられる。次年度以降はカリキュラム上の映像作成関連の授業も増え、動画作成の基礎的素養を修得済みの学生が本授業をもっと受講することに期待したい。

日本学科としては引き続き本授業を地域連携の中核科目と位置づけ、学生への周知をより進めるとともに、地域連携活動へ学生が取り組む意義についても理解を深めるようにしていきたい。授業内容についても、前半の講義について学生が難しいと感じているように見える状況が多かったので、担当教員間で話し合うなどして逐次改善を重ねていきたい。

(文責：森嶋俊行)

以上

人文社会学部 国際キャリア学科

1. はじめに

国際キャリア学科では、教育課程編成・実施の基本的な考え方として、グローバル化した社会、より複雑になりつつある国際問題に対処できる能力・知識・スキルを体系的、実践的に学ぶことを目的として教育課程を編成している。1、2年次では語学力の向上に重点を置き、さらに3年次からは各自の進路・適性に応じて、①英語・英語教育コース、②国際理解・協力コース、③国際ビジネスコースの3領域からそれぞれ指定の科目を選択履修します。3、4年次では「専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(ゼミ)」を受講し、希望者は「卒業研究」に取り組む。

1) 1年次においては、「英文法Ⅰ・Ⅱ」「Extensive Reading 初級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリア英語入門Ⅰ・Ⅱ」を必修とする。加えて、マクロ経済学、英語圏文化概説の授業が選択し、世界の文化や経済についての基礎的知識を学んでいる。

2) 2年次においては、中級レベル以上の英語力や国際的な感覚を身に付けるために、「Extensive Reading 中級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」を必修として受講する。また、それら学科共通領域に加え、3年次からのコース制のコアであるゼミ(専門演習)での教育に向けて、①英語・英語教育コースでは、「Reading(Culture)」「Reading(Society)」「Reading(Literature)」「英語学概説」「英語学」、②国際理解・協力コースでは、「国際理解教育」「異文化共生論」、③国際ビジネスコースでは、「国際ビジネス論」「国際経済学」「グローバル・ファイナンス」、の3つの領域を土台として科目を選択し、次年度への知識固めに取り組む。

3) 3年次からは、各自の所属する専門演習(ゼミ)を中心に、学生は各自、コース領域や進路・適性に応じて科目を選択し、履修していく。①英語・英語教育コースでは、「Reading(Language)」「Extensive Reading 上級Ⅰ・Ⅱ」「アドバンストコミュニケーションⅠ～Ⅷ」等、②国際理解・協力コースでは、「国際政治学」「国際問題論」「英国史」「社会情報論」等、③国際ビジネスコースでは、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」「金融システム論」「貿易理論」等の授業が選択できる。また、学科共通領域として、「英米文化論」「異文化理解」「国際コミュニケーション論」等も履修することができ、ゆるやかなコース制として学生の卒業要件を満たすようにしている。

近年、社会において、英語の能力がより一層問われるようになってきている。このような背景の下、本学科としては、学生の英語の能力向上のため、TOEICや英検などの資格取得を学生に促していくとともに、異文化に対応できる柔軟な考えを持った学生を育成したいと考えている。したがって、詳細については後述するが、このような授業を通じた指導に加えて学生の自主的学習をサポートするe-learningを希望者に無償で提供し、さらに自主勉強会を応援することで学生の学びの質的保証を確保するように取り組んでいる。加えて、観光・ホスピタリティ領域を拡充し、「使うための英語」を実践的に学ぶ取り組みに参入している。また、地域連携の取り組みについても、地元をはじめとしたさまざまな企業と提携した活動を行ってきた経験から、今年度は学生の希望をもとにさらに導入し

ていく。さらに今年度も去年度に引き続き、インドネシア、ベトナムなどの大学とのオンライン交流を進め、多くの学生が参加するなど世界とつながりたいと考える学生の意識を高める取り組みを進めている。

新しくできた学科の特徴的な学びの起爆剤の一つとすべく、今後も留学や語学研修、インターンシップ等の各プログラムを再検討するとともに、各コースの特性を生かしたプログラムを実施していく。

2. 大学基礎演習について

1) 大学基礎演習 I

全学共通の初年次教育の一環として、建学の精神を基に、大学における専門能力の滋養と大学生活を有意義に送るために必要な情報や技能を提供する。大学生として求められる基礎的な知識・技能・態度を修得し、大学および学部・学科・専攻コースへの所属意識を持ち、4年間の大学生活を見通して、学科の特色が身に着くような講義を展開する。

大学基礎演習 I を通じて、国際キャリア学科に所属している学生は、自ら学ぶ意義と課題を把握することになる。まず、本学の建学の精神について理解させ、卒業後の進路について話し合い、キャリア形成のための大学生活について教員が学生に説明している。

2) 大学基礎演習 II

大学基礎演習 I で学んだ学習の意義を踏まえながら、より主体的に大学の学修に取り組むことができるよう、アカデミック・スキルを向上させることを目標とした。初年次の学びをより確実にし、2年次以降の高度な学びへスムーズに移行できるように講義を展開した。大学基礎演習 I でも行われたプレゼンテーションをより発展させ、充実した内容となるよう、プレゼンテーション大会の指導が行われたほか、アカデミック・スキルなどの授業については3人の本科目担当者が分担して授業を行った。

授業の内容は、図書館の活用方法や文章の読み方、発表の聞き方・質問の仕方、調査・分析結果のまとめ方、プレゼンテーションの構成・引用の規則・参考文献の提示方法などであった。また、大学在学中と卒業後に必要とされるリテラシー能力として、情報収集力や情報分析力、課題発見や問題解決のための考察力、プレゼンテーション準備における協働力や発信力について取り上げ、こうした能力の向上を目指すにはどのような方法があるのかについて理解できるように授業を展開した。

3. 授業相互参観について

以下の日程で授業相互参観を実施した。

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	合評会（実施時期）
奥羽 充規	12月12日	火	5	教科教育法IV	4-259	授業後教室

神野 雅代	11月16日	木	1	Reading(Language)	4B-152	授業後教室
深見 環	11月22日	水	3	貿易実務 II	4-406	授業後教室
宮脇 敏哉	11月14日	火	3	異文化共生論	2-311	5時間目に7号館研究室
山崎 英一	11月22日	水	2	Extensive Reading 初級 II	4-259	授業後教室
李 美子	11月24日	金	2	中国語 II	4-214	授業後教室
上野 舞斗	11月8日	水	3	英語音声学	5-301	4限後に非常勤講師室にて
ロバート・ケリガン	11月21日	火	2	専門演習 II	4-209	授業後教室
平田 和義	11月17日	金	3	異文化理解	6-301	11月21日(火)3限、講師控室
若松 正晃	12月6日	水	2	Reading (Literature)	4-260	授業後教室

上記授業を参観した授業参観者のコメントを授業ごとに記す。

教科教育法 IV 奥羽充規 12月12日 4-259

参観者：若松正晃

参観した授業の内容はフラッシュカードの活用術についてであった。ご自身の現場経験から、その目的と実践方法を明確に示し、その重要性を講義された。前回までの内容を振り返りつつ今回の授業内容にスムーズに導入されていた。また、授業内では学生にタスクを与える際に所要時間を明確に示すなど、授業時間の配分が計算され授業をデザインされているため、無駄な時間がなく集中しやすい授業スタイルであった。

学生をそれぞれの教育現場に合わせた ICT に対応させるため、スライドの作成手順を指南し実際に作成させるなど、一見すると時間がかかりそうなタスクも完了させることができるのは、授業者の相当な準備の結実であろう。

技術論のみではなく、スキルの奥にある教育哲学と教師としての姿勢を身につけさせようとする授業者の強い想いが見てとれる。学生も、その熱意を受け取っているのか集中を切らさず参加しているので、非常に密度の高い授業となっていた。その緊張感の一方で、難を抱えている学生の応答についても肯定的に拾い上げるなど、それぞれの学生に適切な指示を与えるなど、質問しやすい雰囲気があった。

今回、授業を参観させていただいた経験を、参観者自身の授業にも活かしていきたい。

異文化理解 平田和義 11月10日 6-301

参観者：ロバート・ケリガン

Guest instructor: Explained about life in Tanzania.

Introduced the language, currency, facts, clothing, geography, lifestyle, food, etc.

Comments: Although Hirata Sensei was the not the main instructor in this class, having a guest speaker

talk about life in Tanzania is a novel way to introduce various cultures to the students. It is also a great way to keep their attention. I certainly learned a lot about the country and the lifestyle there. I am sure the students truly found this a learning experience. Hirata Sensei also has a good command of the classroom. He clearly enjoys interacting with the students and is very empathetic and approachable. He also was more than willing to help the guest instructor by playing Tanzania music or clarifying ideas. The guest instructor also had great enthusiasm for the topic, which made the students more engaged in the lesson. I think more lessons like this with guest experts for this subject would be very beneficial for the students. I thoroughly enjoyed this lesson.

Reading (Literature) 若松正晃 12月6日 4-260

参観者：深見環

教員は学生の近くで解説を行い、双方向的で質問のしやすい雰囲気です授業展開を行った。授業の初めには、前回の授業の復習を行い、その流れの中から学生に質問を投げかけ学生からの回答を引き出していた。センテンスの和訳を学生に求めると、意欲が高く、その一方で学生の理解の補足を教員が行い、物語の情景、登場人物の様子などについて、非常に詳細な解説を加えていた。そのため、学生の内容理解へ巧みに誘導を行っている印象であった。

こうしたことから、物語の中での登場人物の行動などについて、教員が質問を行っても学生は質問に答えやすいと思われた。学生の回答についても教員が肯定的に受け止めている為、学生自身、解答しようとする意欲が高いと感じた。

教材については、PC等に保存されており、随時予習や復習ができるようになっている。授業に教材プリントを忘れてきても、スマホなどを見ながら授業に参加できる。これは、iPadなどで授業を受けてきた昨今の学生には適応性があるものと感じた。

質問にはすべての学生が答えることはなかったが、より多くの学生への質問を行うことで、授業の双方向性がさらに高まっていくのではないかと思われた。

参観者：上野舞斗

参観を通して多くを学んだが、なかでも以下の2点の指導技術が参考になった。

(1) 読みを誘発する発問：本文の大意をうまくとらせるために、「〇ページの×行目の△△の英文ってどんな意味だろう」と発問を投げかけ、これによって学生は漫然と作品に挑むのではなく、小さなゴールを目指しながら読解に向かうことができていた。

(2) 答えの受容の方法：指名された学生が的はずれな答えをしたときも、「なるほど、うん。うん。」と全面的に受容し、学生が発表しやすい雰囲気ができていた。

参観者は、英語教育、英語学が専門であり、英文を読む際にどうしても統語構造等に目をとめてしまうが、担当教員の授業はその先にある、抽象的表現の解釈にまで配慮があった。これはまさに本授業の真正の学びであり、文学的アプローチによる読解であると言える。一方で、構造(例、倒置)や、不透明な表現(1+1が2にならない表現；例、drop on)に関する

る解説はほとんどなかった。予習を前提としているため不要とも考えられるが、高校時代に学ぶべき知識が欠落している学生が多い現状からもこうした点についての説明があってもよかったかもしれない。参観者もここに学び、マクロとミクロのバランスの取れた授業展開を心がけたい。

参観者：平田和義

本授業ではアメリカ小説『グレート・ギャツビー』の英文読解を主にしていた。文脈から登場人物の性質を読み取ることは学生は興味を示していた。アメリカ文化的な事象が物語の各所に登場するので、英語だけでなく舞台の背景を理解する重要性が担当教員から学生に伝えられていたと考える。

学生が英訳を発表する場面があったが、学生が十分に意味や内容を説明できない場合であっても、教員は学生の見解を上手く回収し解説を加えていた。学生が発表を続け、難解な英文読解に根気よく挑戦する機会を与えていた。

当時のニューヨークについての特徴や現代との違いが小説から読み取れることや、他の小説家の例も示され、学生に読書の幅を広げることも示唆されたように考える。

総じて、英語表現を読み取ることの重要性が感じられる授業であった。

参加者：鈴木彩希

Great Gatsby のストーリーや登場人物の心情を細かく理解していただくだけではなく、作家の思想や「癖」を読み解いていく進行をされていたので、没入感のある授業展開でした。たんにリーディングをするだけではなく、翻訳をする際にもそのような作業が重要だと考えていたところでしたので、非常に勉強になりました。そうした意味では、初級者から、ある程度英文を読んだ経験のある学生まで幅広く楽しむことができる授業だと思います。

また、教員の意見を押しつけるのではなく、学生とともに考えることで想像力を膨らませる練習をさせているところは、参考になりました。物語が 1920 年代を舞台にしているので、同時代の写真資料などがあるとより授業に引き込まれると思います。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 『てんしば』プロジェクト

「てんしば」プロジェクトとは、天王寺の「てんしば」エリアにあるゲストハウスで国際キャリア学科の学生たちが研修も含むインターンシップ業務に参加するというプロジェクトである。学生は、国際キャリアインターンシップという科目を履修登録すれば、卒業の際の単位としても認められる。

国際キャリア学科の学生たちは、様々な国からの観光客の方々に、いかにおもてなしできるかを考え、日々行動している。毎年、ゲストハウスでの接遇やイベントプロデュースをより良いものに仕上げるためイベントチームごとの中間発表会が行われている。令和元年度までは学生たちがゲストハウスでお茶（茶道）の指導をしたり、習字を教えたりと海外からの旅行者がこれまでに経験したことがないイベントを企画したが、令和5年度

は、昨年同様、ゲストハウスでの外国人観光客への接遇ができなかったため、てんしば公園を使った来園客向けサービスや SNS のフォロワー獲得のための新しい企画を実施して、できる範囲での活動を行った。

(2) Jump-Start English (JSE)

Jump-Start English (JSE) は、国際キャリア学科の学生たちが、A0 あるいは、推薦入試に比較的早い時期に合格し、本学科に入学するまで時間のある高校生に向けて、土曜日の夕方に実施している入学前英語指導プログラムである。学生が中心となって、高校生に英文法、英文読解、コミュニケーションを基礎から教えるもので、毎年実施されている。授業実施に際する細かな指導技術については担当教員が指導しているが、実施に際して、国際キャリア学科の全教員が交代で毎回本プログラムに監督者として参加し、学生の指導にあっている。入学予定者にとって、入学前に英語力の基礎部分を築き直すことができるだけでなく、新入生同士、在学生との関係性を築くこともできることもあり、本プログラムは毎年好評を得ている。令和 5 年度は対面で実施した。あべのハルカスサテライトキャンパスにて学生が授業を行った。コロナ禍中のオンライン実施に比べ活気のあるプログラムの実施となった。

(3) 海外留学特待生 100 万円奨学金プログラム

国際キャリア学科が実施している 100 万円奨学金プログラムとは、国際キャリア学科の学生が毎年ニュージーランドに実質 5 名程度の学生が留学し、オークランド大学の付属の英会話スクール (ELA) で 3 月から 6 月までの 4 か月間の語学研修に加えて、ニュージーランドにおいて、インターンシップ (1 か月) を経験させるというプログラムである。今年度も渡航先の受け入れ状況を鑑み、昨年と同様に大学間提携を行っている**カナダのビクトリア大学**で実施した。

本プログラムは、参加を希望する学生の中から筆記試験と面接を行って学生を選抜し、選抜された学生達は自己負担 50 万円で本プログラムに参加できる。本プログラムは総額で 180 万円～200 万円程度 (為替レートの変動による) の費用がかかるものの、大学がその差額 (150 万円～200 万円) を奨学金として負担している。本プログラムを終えて帰国した後、TOEIC の勉強に励み、卒業するまでに 730 点突破を目指すことになっている。

令和 5 年度においては、例年通りに無事プログラムをスタートし、とどこおりなくプログラムを実施した。

(4) TOEIC e-learning プログラム

1 年生の冬学期、2 年生以上には夏学期より Really English の TOEIC 講座を、条件を満たした学生に無償でアカウントを提供し、自立的に学ぶ学生への動機づけを行なった。

(5) 教員採用試験対策勉強会

国際キャリア学科には少数ながら毎年、中高の英語教員を志望する学生がおり、教職科目担当教員 (奥羽准教授、上野講師) が指導にあっている。授業外でも、春休みには、

教育実習、教員採用試験を見据えた授業力を身につけるために「模擬授業練習会」と称した実践型の集中勉強会を開催している。また、4月初旬から8月末にかけては教員採用試験を受験する4回生を対象にした学科独自の勉強会を毎週開催している。令和5年度も、対面とオンラインとの併用となった。こうした取り組みも助けて、令和5年度は、2名の教員採用試験受験者のうち、1名が大阪市の教員採用試験(中学校英語)に現役合格した。

(6) アジア圏の大学との国際文化交流会

コロナ禍により海外への渡航ができず、海外との国際交流ができない状況を少しでも改善すべく企画したオンラインプログラムである。令和5年の6月にはインドネシア、8月にはネパールと交流会をオンラインで実施した。交流会の中で、それぞれの国の学生が自分の国や地域の文化や歴史、慣習などを紹介し、お互いに質問しあったり、疑問点などを旧友することで、異文化交流を図った。参加した学生もそれぞれ30名以上の本学の学生が参加しており、今後も継続して実施していく。

5. その他

国際キャリア学科は、実践的な外国語能力とコミュニケーション能力を習得し、変動する国際問題に関する基盤となる知識を身につけ、さらに、卒業後のキャリア形成に必要な知識とスキルを獲得し、グローバル化社会で活躍できる人材の養成を目的としている。

そのため、学生は、①外国語能力として、「読む・聞く・話す・書く」の各言語能力において実践的な教育を受け、②高い外国語能力に基づき、グローバル化した社会に即応したコミュニケーション能力を習得し、③環境・民族紛争・宗教・経済・金融等の国際的な問題を認識し、国際社会における日本の役割を実践的に把握する能力を身につける。④言語の背景にある歴史・文化・政治・経済等に関心を持ち、異文化理解への関心と意欲を身につける。⑤自ら課題を設定し他者と協同しながら問題解決にあたり、グローバル化社会で有為の人材となるために必要な知識とスキルを獲得することになる。

FSD活動を通じて、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、今後も様々なイベントや企画を学生に提供するとともに、授業の進め方を工夫し、学生が積極的に授業に参加できるような環境を提供できればと考えている。

以上

人文社会学部 社会学科

1. はじめに

令和5年度の授業は、新型コロナウイルスの感染拡大に対応を強いられる以前の授業形態に戻った。とはいえ、文字通りに過去の形態に戻ったわけではない。学生も教員も IBU ネットを基本的に使用することになり、ほぼすべての科目において基本的に ICT が活用されることになったからである。ICT を活用した授業には、当然のことながらメリットとデメリットがあるが、そのメリットを活かすことを前提にした授業のあり方に、現在、個々の教員が取り組んでいるとあってよい。またその観点から、対面授業を基本としつつ遠隔授業を取り入れることも視野に入れることも必要になっている。その理由の一つは、受講生が 100 名以上に及ぶ授業の「質保証」に対する対応であり、もう一つは授業配慮申請者に対する対応である。この両者に対する対応の仕方は、まったく異なるとはいえ、IBU ネットの使用を前提にした ICT のさらなる可能性を引き出す活用法が求められているという点で共通しているといえよう。

さて、こうした点を念頭に置きながら、本稿の「2. 大学基礎演習について」および「3. 授業相互参観について」において、社会学科の教員の取り組みの一端を紹介する。また、「4. 学科独自の取り組み」では、生成系 AI の登場をふまえて授業においてどのように対応していくのかについて、現状を紹介しておくことにしたい。今後の大学での授業のあり方を激変させる可能性のある生成系 AI について、FD の観点からしばらくのあいだ、その動向を見守っていく必要があると考えるからである。

2. 「大学基礎演習」について

大学基礎演習 I の概要は次のとおりである。「本科目は、全学共通の初年次教育として、建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、大学での学修に必要な技能を獲得することを目標としています。初年次における課題を自覚し、求められる基礎的知識・技能・態度を修得し、四天王寺大学社会学科の学生としての所属意識をもち、大学生活全般および卒業後の進路についての見通しを持てるようになります。大学では、高校までとは違ったアクティヴ（能動的）な学びを身につける必要があります。レポートやディスカッションなどの方法で自分の考えを表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。今年度の授業計画は、以下のとおりであった。

第 1 回 オリエンテーション・履修指導

第 2 回 本学での学び① 建学の精神

第 3 回 本学での学び② 個人面談、学修ポートフォリオ「学修成果可視化」記入

第 4 回 本学での学び③ 学内スタディツアー

第 5 回 【学科合同】大学生活について(先輩の話)

- 第 6 回 本学での学び④ ノート・テイキング、テキストの読み方など
- 第 7 回 本学での学び⑤ 社会問題に関する映像資料の視聴
- 第 8 回 図書館の利用方法(図書館ツアー)
- 第 9 回 レポートの書き方① レポートの書き方についての講義
- 第 10 回 レポートの書き方② ミニレポートの作成
- 第 11 回 レポートの書き方③ ミニレポートの発表と講評
- 第 12 回 ディスカッション① ディスカッションの方法についての講義、資料収集
- 第 13 回 ディスカッション② グループでのディスカッション
- 第 14 回 【学科合同】キャリアについて 先輩の話(卒業生)
- 第 15 回 まとめ(期末レポートの作成など)

令和 2 年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、授業運営に様々な制約が生まれた。しかし、令和 5 年 5 月 8 日から、新型コロナウイルス感染症の位置づけが 5 類感染症へと変更になり、徐々にではあるがコロナ禍以前の授業運営へと戻りつつある。例えば、学科合同授業は、4 年ぶりに学生たちが一堂に会して実施することができた。他方で、令和 5 年度開始前後から、Chat GPT に代表される生成系 AI が注目されるようになり、「大学での学修に必要な技能を獲得すること」を目標とする本科目にとって看過できない事態も生まれた。

このような状況を踏まえつつ、今年度の授業運営の特徴を挙げると、次の 2 点である。

第一に、生成系 AI の登場を「好機」と捉え、大学で学ぶことの意義を考える課題設定をおこなったことである。あるクラスでは、社会問題に関する映像資料として、Chat GPT について取り上げた報道を視聴し、その特徴や賛否両方の立場の見解を理解した上で、自分たちの意見をまとめる学習活動をおこなった。その上で、最終課題として、教員側が提示した資料（生成系 AI に関する本学の基本方針、Chat GPT の使用に関する教育関係者へのアンケート調査結果、クラス内での賛否の意見など）や自分たちで調べた資料に依拠して、Chat GPT の是非について自らの見解をまとめるレポート課題を課した。Chat GPT の登場を肯定的に捉える意見が多数を占めると思われたが、本音かどうかはともかく、否定的な意見や Chat GPT の限界を指摘する意見も多くみられた。授業内では、このような賛否の意見を小グループで交流するとともに、自分の頭で考え、自分の言葉で上手く表現できている学生のレポートをクラス全体で共有した。このように生成系 AI の持つ可能性と限界を踏まえながら、それぞれの学生が、大学でいかに学ぶかを考えたことは、「大学における学修と生活の意義を自覚」することに繋がったのではないだろうか。

第二に、学科合同授業として、大学生活やキャリアについて、在學生や卒業生の話を聞く機会を設けたことである。学科合同授業そのものは従来から実施しているが、前述したとおり、今年度は 4 年ぶりに学生全員が 1 つの教室に集まって実施することができた。

5月に実施した「大学生活について」の回では、社会学科に在籍している5名の学生に、学生運営委員会、ピアサポーター、学生広報、クラブ・サークル、教員免許や認定心理士などの資格取得について話をして頂いた。質疑応答の際には、LiveQという匿名で質問することのできるアプリを用いたこともあり、1回生から多くの質問が挙がった。また、今後の学生生活の参考になったという感想も多く寄せられた。1回生にとっては、先輩の話や質問への回答内容だけではなく、充実した学生生活を送っている先輩の「眼差し」や「姿」からも刺激を受けたようである。

7月に実施した「キャリアについて」の回では、2名の卒業生に、現在の職務内容や学生時代のエピソード、就職活動や後輩へのメッセージなど多岐にわたる内容についてお話し頂いた。当初は、中学校教員を含め4名の卒業生にお話し頂く予定だったが、ご都合により生命保険会社の営業職をされている方と特定非営利活動法人で働いておられる方の2名にご登壇頂いた。お二人とも、学生時代の様々な経験や現職に至るまでの紆余曲折についてお話し頂いた。生涯を通じて同じ職場で働くことが当たり前ではなくなりつつあるなかで、お二人の話は目先の「就職活動」だけではなく、将来の「生き方」を1回生が考える契機にもなったと思われる。

なお、新入生オリエンテーションや履修指導（時間割の作成）などの様々な場面でPIATAに所属する社会学科の学生の協力を得た。また、学内スタディツアーや図書館ツアーについては、本学の職員の皆様のご協力のもと、円滑に実施することができた。ここに謝意を表したい。

次に、大学基礎演習Ⅱの概要は、以下のとおりである。「この科目は、大学における学修と生活の課題を自覚し、必要な技能を獲得することを目標としています。具体的には、夏学期の演習をふまえて、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとします。大学では、高校までとは異なったアクティヴな学び方を身につける必要があります。この科目では、さまざまな社会問題をとりあげ、テーマについてのグループ学習をすすめるなかで、「生きた学び」を体験します。そこから得たものをもとにいろいろな角度からディスカッションし、自分なりに表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。今年度の授業計画は以下のとおりであった。

第1回:オリエンテーション(夏学期の振り返りと冬学期の学修計画)

第2回:個別面談とポートフォリオ入力(1)

第3回:個別面談とポートフォリオ入力(2)

第4回:社会問題について考えるために(1)(社会問題へのまなざし)

第5回:社会問題について考えるために(2)(関心のある社会問題について調べる)

第6回:社会問題について考えるために(3)(関心のある社会問題についてディスカッション)

第7回:【学科合同】社会問題について考える(1)(ゲストスピーカーによる講演)

- 第8回:社会問題について考える(2)(意見発表とレポート作成)
- 第9回:【学科合同】社会問題について考える(3)(ゲストスピーカーによる講演)
- 第10回:プレゼンテーションの基本と準備(1)(振り返りとディスカッション)
- 第11回:プレゼンテーションの基本と準備(2)(テーマ設定と個別・グループ作業)
- 第12回:プレゼンテーションの基本と準備(3)(資料整理と情報収集)
- 第13回:プレゼンテーションの実際と演習(1)(プレゼンテーションに向けた役割分担とリハーサル)
- 第14回:プレゼンテーションの実際と演習(2)(プレゼンテーションの実施と相互評価)
- 第15回:まとめ

授業概要に沿った今年度の授業運営の特徴である「生きた学びの体験」と「レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させること」について、実施内容と成果をまとめておきたい。

まず「生きた学びの体験」について、今年度は、ゲストスピーカーを招いて社会問題について考える機会を、コロナ禍以前と同じ対面での合同授業というかたちで、第7回、第11回に設けることができた。本来、2人目のゲストスピーカーは授業計画では第9回での予定であったが、大学レベルでの日程変更があったため、あらためて日程調整をおこなったうえで第11回に実施するかたちとなった。具体的には、第7回では子ども食堂をはじめ、子どもやその家族を中心に地域を巻き込んだ支援をおこなっている NPO 法人の方々に、自らの活動の来歴や困難や成果について語っていただいた。また第11回では、視覚障害の当事者の方に登壇をお願いし、見えない経験とはいったいどういうものなのか、当事者はどのようなかわりや支援を求めているのか等について学んだ。いずれも、当事者の経験を媒介にしながら、社会問題を肌で感じ、考える機会になった。なお、どちらの回においても、質疑応答の際には匿名質問アプリの LiveQ を用いたことで学生ならではの視点にもとづいた率直な質問が多く寄せられ、ディスカッションが盛りあがるとともに、そのことで理解が深まったという声も多かった。社会科学の大学基礎演習 II では長年このように社会問題を感じ考える視点をもつ機会を提供しており、この授業をきっかけに子ども食堂に関心をもって卒業研究のテーマにした学生がいるなど、その後の学科での学びにもつながっていることがわかる。

他方、「レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させること」については、クラスごとに多様な試みを実施された。基本的なプレゼンテーションの方法(パワーポイントの作り方など)は数年前に比べて高校までの学びで獲得済みの学生が多い。となれば問われるのは、いったいなにをプレゼンテーションするのかである。あるクラスでは、「多様な見方をふまえたレポートの作成」ということで、まずは各人がそれぞれのテーマを設定し、設定したテーマについての多様な意見や立場を各種媒体から調べてまとめる作業をおこなった。次に、その多様な意見や立場をふまえつつ、自分の

意見や立場を立論していく作業をおこなった。そのうえで、作業の成果を冊子にまとめるとともに、「多様な見方をふまえた自身の意見や立場のプレゼンテーションと議論」を実施した。社会的な事実や既存の議論をふまえた意見というものは、発表者の意見を相対的に明確にさせるとともに、発表者の個性を映し出す。また、個性のともなったプレゼンテーションは、それを聞く者に、相対的に深い関心や疑問をいだかせる。その結果、プレゼンを聞く学生たちから面白い質問が出され、応答も含めた議論が盛りあがる場面を、しばしばともに体験することができた。リテラシーというものは経験の積み重ねのなかで獲得されていくものであるが、大学基礎演習Ⅱも、その蓄積の場のひとつとして機能することができているのではないかと思われる。

3. 授業相互参観について

(1) 相互授業参観の実施

11月7日(火、月曜日授業)～12月15日(金)にかけて、社会学科の専任教員が担当科目のいずれかを公開し、各自ひとつ以上の公開科目を参観する、という形式で実施した。公開科目とその担当教員、参観した教員は以下のとおりである。

氏名	公開日	曜日	時限	授業名	教室	参観希望者
中村洋樹	12/15	金	4限	社会教科教育法Ⅱ	4-215	丸岡 田中 五十川
茂木洋	11/13	月	2限	心理学概論	(5-302)	-
上野淳子	11/13	月	4限	発達心理学	6-351	曾野 藏口
座主果林	11/22	水	5限	家族関係論	4-316	中村 津崎 大関 茂木
丸岡稔典	12/6	水	2限	基礎統計学	4-209	上野 三宅
津崎克彦	11/13	月	5限	国際経済論	4-314	-
五十川飛暁	12/15	金	3限	環境社会学	5-210	-
藏口佳奈	12/8	金	1限	心理学実験法	2-311	-
田原範子	11/27	月	1限	文化人類学	6-354	-
田中誠	12/1	金	1限	日本史研究Ⅰ	2-209	田原 藤谷
大関雅弘	12/4	月	4限	社会意識論	2-305	座主
曾野洋	11/8	水	4限	演習Ⅳ	7-116	四方
三宅麻希	12/1	金	3限	職場メンタルヘルス	4-416	-
四方俊祐	12/1	金	5限	歴史学特論	4-213	-
藤谷厚生	11/13	月	1限	日本思想史	4-312	-

(2) 合評会の開催

合評会に先立ち、合評会資料を作成した。参観者は参観シートにコメントを記入し提出した。全てのコメントは Google Drive 上で学科教員が共有できるようにした。全 18 ページから成る合評会資料の一部を以下に示した。

(複数回参観して頂く場合はコピーしてください)		(複数回参観して頂く場合はコピーしてください)	
令和5年度参観シート		令和5年度参観シート	
※簡潔な内容で構いませんので、必ず授業参観後1週間以内にコピーを授受またはデータをメール (koto@shitennoji.ac.jp) で高等教育推進課にご提出してください。		※簡潔な内容で構いませんので、必ず授業参観後1週間以内にコピーを授受またはデータをメール (koto@shitennoji.ac.jp) で高等教育推進課にご提出してください。	
参観した授業科目名	発達心理学	参観した授業科目名	社会意識論
授業担当教員名	上野淳子先生	授業担当教員名	大関正弘先生
令和 5年 11月 13日 (月)	教室: 6-351	令和 5年 11月 27日 (月)	教室: 2-305
参観した授業に関して、お気付きの点などご記入ください。		参観した授業に関して、お気付きの点などご記入ください。	
一、大教室における講義。詳細なレジュメに基づき、「思いやりと道徳性の発達」という論点で、生後9か月頃から6-7歳頃の子どもの様子が解説された。		【授業内容】今回の講義タイトルは『社会意識』とは何か①であった。講義の前半では、前回の課題(学生の質問・疑問)への解説が行われた。各学生は自主性と分節化についてなど、前回の講義テーマにそって400字程度で自由に疑問や各自の考えを展開しており、それに対し教員からの応答が文章で示されるとともに、口頭でもコメント、解説および本日との授業内容との関連が示された。後半の「社会意識とは何か」の講義では、学生の前回の課題内容などとりいれた文章が提示され、これにそって講義が行われた。授業資料が文章として学生各自がいつでも利用できる形でIBUネットで配布されることで、授業後も復習が行いやすい形式となっていた。	
二、映像や、上野先生の子育て原体験も交えた、実に興味深い講義内容である。しかしながら、開始後50分を過ぎたあたりから、教室後ろに座っている学生の中に、居眠りを始める者が取見できた。		【授業の工夫について】授業に参加していた学生は、私語や授業以外のことをするものは見当たらず、講義を聞きながらパソコンで配布されたレジュメを閲覧したりメモをとったりしていた。前回の授業の復習から『社会意識』とは何か①の講義の終わりまで、授業の内容は比較的抽象的なテーマも含むものであったにも関わらず、受講生全体の講義への集中が維持されていた。この講義への集中を維持する授業づくりの工夫として、前回の課題への応答が非常に丁寧になされていたことが特に印象に残った。毎授業で課題に対する丁寧な解説が行われることで、受講時の疑問が解消され学習内容が定着するとともに、次回の課題に向けて、講義を受動的に聞くだけでなく自分なりの疑問をもとめようという意欲をもって授業に参加することにつながっているのではないかと感じた。今回の授業でも、参加学生の多くは授業の終わりまでに講義への疑問を見出し、授業の終わりには、早速パソコンで課題に取り組み始めるものもいた。講義のなかでは、生活世界と価値について、積み木を例に用いて説明するなど、講義への親しみやすさと社会意識論への加的関心の維持・涵養を両立する工夫が随所になされていた。	
三、たまたま参観した回が、どちらかというと、一方通行型の講義イメージで展開されたかと思う。そのうえで、時おり、学生へ質問を投げかけるなどで双方型授業展開を試みられると、さらに豊かな「授業」になる。そんな感想をもった。		今後、自分の講義内容を改善していくうえで、大いに参考としたい。	
* 参観でき、勉強になりました。ありがとうございます。 以上		参観者所属	参観者氏名
参観者所属	参観者氏名	社会	座主 果林
社会学科	曾野 洋		

令和6年3月7日(木)の学科会議終了後、資料に基づき、Zoomにて合評会を行った。

参観者が参観した授業で評価できる点についてそれぞれ述べたあと、授業担当者が先にあげられた点について工夫している点などを述べ意見交換を行なった。とくに話題に上がったのは社会学科では比較的多い、大教室で受講生の多い授業でいかにアクティブラーニングを行うかであった。ある授業では、授業回によってIBU.netのクラスフォーラムで個人個人が意見を出し合う回、ワークシートにコメントを書き、教員が机間巡回してコメントをピックアップして紹介する回、グループに分かれてディスカッションする回をローテーションしながら取り入れていることが紹介された。どのスタイルをとるかは必ず予告し、学生が心理的準備を整えることができるように工夫していることも報告された。受講生が多ければ学生の得手不得手、配慮の有無もさまざまであり、授業の進め方を多様化し、どんな学生も主体的に学ぶことのできる工夫が共有された。

今後も、さまざまな学生が入学し学ぶことを念頭におき、学科教員全体で工夫を共有しながら学びを深めることができる授業を展開していきたい。

4. 学科独自の取り組み

今年度から新たに生じた課題として、生成系AIに対応した授業をどのように構築するの

かが挙げられる。教務部においても取り組むが始まっているが、ここでは社会学科の専門科目をふまえた現状を述べていきたい。

上記の「2. 「大学基礎演習」について」の大学基礎演習 I において生成系 AI の活用事例を紹介した。今後も、大学基礎演習 I・II において、演習のなかで生成系 AI について取り組んでいくことが予想される。とはいえ、現在のところでは、専門科目においては、それほど活用が広がっているわけではない。

大学全体の調査結果（社会学科では 11 名が回答）に基づくならば、社会学科での生成系 AI の対応に関しては、積極的な利用よりは不正利用対策が中心である点であることが明らかである。教員の利用についての次の質問に対して、「1. 教員が授業で頻繁に利用している」（0 名）、「2. 教員が授業で時々利用している」（0 名）、「3. 教員が授業でほとんど利用していない」（2 名）、「4. 教員が授業で利用したことがない」（9 名）となっている。また、「1. 学生に頻繁に利用させている」（0 名）、「2. 学生に時々利用させている」（0 名）、「3. 学生にほとんど利用させていない」（0 名）、「4. 学生に利用させたことがない」（11 名）である。なお、「不適切な利用を防ぐための指導」に対しては、「積極的にしている」（0 名）、「必要に応じてしている」（10 名）、「していない」（1 名）である。また、「効率的な利用を促すための指導」に対しては、「積極的にしている」（0 名）、「必要に応じてしている」（1 名）、「していない」（10 名）である。こうした、回答の背景には、現象に対する知識よりは、現象に対する視点や思考力を主な評価対象とするため、生成系 AI で不正しても高い評価を得ることができないという社会学科の特性があると考えられる。

最後に、生成系 AI と授業（定期試験なども含む）との関係についての現状や取り組み、見解について、社会学科のある教員の意見を紹介したい。現時点での社会学科教員の最大公約数的なものと考えることができよう。

現時点では、生成系 AI を積極的に授業に活用するメリットを感じられない。生成系 AI は「もっともらしい文章」を出力するため、知識の浅い状態で使用するとその誤謬を鵜呑みにする可能性があり、そもそも自ら考える行為を放棄したような態度を助長すると考える。資料や検索エンジンによって収集できる情報の取捨選択は、学生自身の見識に基づいて行うものであり、その情報の取捨選択にこそ学力や知力が反映される。生成系 AI が出現した現代においては、その付き合い方も重要であるとする見解には一定の理解を示すものの、新たな知を獲得していく段階においてやみくもに使用することは、学生の学びを阻害する可能性もあると考えている。

そのため、授業の予習復習を含めて、活用は推奨していない。しかし、レポート課題の取り組み等において学生の使用が疑われるケースも散見されるため、成績に過大な影響が出ないような配慮・取り組みは実施している。たとえば、レポート課題において単純に調べれば良いようなものや感想を問うようなものは出題せず、当該授業の担当教員と受講生しか知り得ないような情報の提示を条件とする課題を課すなどである。また、レポー

ト課題はすべて Chat GPT に対して事前に出題している。これは、あらかじめ出力される回答の傾向を把握することで、当該生成系 AI が簡単に正答にたどり着かない課題内容になっているかを確認するためである。

このように、生成系 AI を授業において利用しているものの、積極的な活用ではなく、むしろ安易な使用を防ぐ目的での使用というのが現状である。

人文社会学部 人間福祉学科 健康福祉専攻

本報告書の構成は以下の通りである。

1. はじめに
2. 大学基礎演習について
3. 授業相互参観について
4. 学科独自の取り組みについて
 - (1) ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会
 - (2) ソーシャルワーク実習・実習報告会
 - (3) 社会福祉士国家試験対策講座
 - (4) 精神保健福祉士国家試験対策講座
 - (5) 福祉系公務員受験対策講座
 - (6) その他

1. はじめに

本報告書は、令和5年度に行った人間福祉学科健康福祉専攻のFD活動をまとめたものである。

本専攻のFD活動は、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに則って、以下の2点（Ⅰ、Ⅱ）を目的としてA～Iの活動に取り組んでいる。

- Ⅰ 講義・演習との緊密な協働を通して実習教育を充実させる。
 - A. 大学基礎演習
 - B. 授業相互参観
 - C. ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会
 - D. ソーシャルワーク実習・実習報告会
 - E. 社会福祉士実習懇談会
 - F. 精神保健福祉士実習懇談会
- Ⅱ 受験対策講座を充実させることを通して国家試験（社会福祉士・精神保健福祉士）の合格率を向上させる。
 - G. 社会福祉士国家試験対策講座
 - H. 精神保健福祉士国家試験対策講座
 - I. 公務員社会福祉職受験対策講座

以上のA～Iについて、FD活動としての概略を説明する。

A. 大学基礎演習

従来のこの科目の目的は、1年生にこれからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供しながら、「学びのスキル」を習得させることである。教員の提示する課題設定に対し、学生が主体的に取り組む発表するものであり、「学生が主体的に学ぶ」ことを目指している。今年

度からは、対面授業で実施しているが、新型コロナの影響で欠席する学生についてはオンライン授業を認めた。①学生が大学生活に円滑に適応できるようにサポートする、②課題レポートや登校日を利用して学生の状況を把握する、③レポートの書き方の指導に重きを置いた。学科の全教員で担当している。

B. 授業相互参観

令和5年度は「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心にした参観科目とは決めずに授業相互参観をおこなったが、公開科目としては「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目が多く公開された。また参観者があった科目については事後に合評会を実施した。

C. ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会

講義科目と並んで実習を支える基礎となる演習科目に関して、原則年度末に年1回、新旧の科目担当者が一堂に会して、授業方法の実際を相互に開示し、課題等について議論している。この打ち合わせは、第1に教員のファカルティの中核である教授力（とりわけ演習及び実習指導）を高める場、第2に実習生としての態度形成にかかわる個別指導上の課題を共有する機会、第3に社会福祉士養成カリキュラムの課題や改善点を見出す場として機能している。

D. ソーシャルワーク実習・実習報告会

4回生についての科目名は「社会福祉相談援助実習」であるが、受講者の大半を占める3新カリキュラムとなっている。このため、実習報告会の名称もそれに合わせて「ソーシャルワーク実習報告会」に統一した。

A～Cの活動の集大成として学生主体による「ソーシャルワーク実習報告会」を開催した。昨年度からは新型コロナ及びインフルエンザ等の感染状況を考慮しながら、対面もしくはオンラインの両方を想定しながら準備をした。結果的には対面で開催することができた。実習報告会は学生（3回生中心、編入生など一部4回生）の主体性を高める目的で、準備から当日の進行においてもすべて学生が行うものであり、文字通り主体的な学びになっている。

令和元年度まで実施していた全体発表ではなく、令和4年度及び本年は最初から分科会形式で開催、聴講者を変え同じ発表を4回ずつ繰り返して意見交流を行った。聴講者は次年度「ソーシャルワーク実習B実習」を希望する学生（大半が2回生）である。それに加えて当日の動画撮影したものを後日1回生にも視聴させた。この実習報告会によって、24日間（社会福祉相談援助実習については23日間）、180時間以上に及ぶソーシャルワーク実習のイメージや自分の目指すべきキャリアとしての社会福祉士像を確立させてもらいたいと考えた。

また、今年度も、実習の履修を希望する1回生には、「社会福祉士に向けての実習」のイメージを早くより持ってもらう目的で、それぞれのグループの発表をZoomシステムの活用にとって録画し、その中で関心のある発表4つを選択し、ビデオ聴講することを春季課題として義務付けた。1回生の段階から実習報告会に参加することで、自分の目指すべきキャリアとしての「社会福祉士」をイメージし、意欲を持って学ぶ姿勢にもつながってくる重要なものであると考えている。

E. 社会福祉士実習懇談会 F. 精神保健福祉士実習懇談会

実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る実習懇談会は、例年2月に行われ、実習教育に関する特定のテーマについて議論する機会であるが、新型コロナウイルスが五類に移行したものの今年度も新型コロナウイルス感染拡大防止を理由に開催を見合わせた。

G. 社会福祉士国家試験対策講座

講義を担当するのは東京アカデミーのインストラクターであり、本専攻の教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する役割を担った。3年生は、夏期と春期の休暇中に集中講義を実施している。前年度から対面授業で実施している。新卒者の合格率は60.9% (28/46) で、例年より高い合格率となった。一方、既卒者は41.5% (22/53) と、昨年度の24.2% (15/62) に比べ倍近い高い合格率であった。令和6 (2024) 年度から、試験科目・出題範囲が新カリキュラムに基づき大幅に変更されることが、この合格率の高さに表れているとも分析できる。

H. 精神保健福祉士国家試験対策講座

昨年度までと同じく、本専攻の石田が引き続いて講座を担当している。合格率は85.7% (7名中6名合格) であった。なお既卒者の受験生は1名で1名が合格した。

I. 公務員社会福祉職受験対策講座

公務員社会福祉職に求められる資格 (必須ではないが) として、社会福祉士や精神保健福祉士が位置付けられる。公務員社会福祉職受験対策として集中講義で開講している。公務員社会福祉専門職採用試験の過去問を取り寄せ、社会福祉に関する専門試験を中心に講座を組み立てている。公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な講座であるが、社会福祉協議会や独立行政法人などの採用試験にも役立つ。

2. 大学基礎演習について

(1) 大学基礎演習 I

建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、必要な技能を獲得することを目標とする。大学において、求められる基礎的知識・技能・態度、ソーシャルワークに関する基本的な知識を修得し実践する。また、人間福祉学科健康福祉専攻への帰属意識を高め、専攻における仲間意識を育み、大学生活全般への見通しをもてるように、授業計画を策定する。授業形態は、全学共通の到達目標に則りながら、演習の形で行う。

今年度は、コミュニケーションスキルを高めるためのグループワーク、学びのスキルを高めるためのノートテキングやレポートライティング・スキルの講義、学びのプランを主体的に組み立てるための卒業生の講義、学習ポートフォリオを活用した学びの目標の設定などを実施した。

	日程	内容
1	4月6日(木)	和の精神・授戒会説明、履修登録説明(上續先生)、履修登録、授業計画紹介、PROG動画視聴、履修相談
2	4月13日(木)	コミュニケーションのスキルを高める①スゴロク自己紹介・他己紹介・自己紹介(石田)
3	4月15日(土)	PROGテスト
4	4月20日(木)	「ポタジェプロジェクト」紹介(学生)、学修ポートフォリオ入力(石田)、個人面談(各先生)
5	4月27日(木)	学びのスキルを高める①ノートテキングスキル(鳥海先生)
6	5月11日(木)	学びのプランを組み立てる①学生企画プロジェクト紹介(2545014上野由貴YMCAキャンパカウンセラー活動の勧誘)
7	5月18日(木)	図書館ガイダンス
8	5月25日(木)	学びのスキルを高める②レポート・ライティング・スキル(笠原先生)
9	6月1日(木)	コミュニケーションスキルを高める②答えのあるグループワーク(濱田先生)
10	6月8日(木)	コミュニケーションスキルを高める③答えのないグループワーク(川下先生)
11	6月15日(木)	学びのプランを組み立てる②卒業生講師
12	6月22日(木)	学びのプランを組み立てる③児童福祉について(上續先生)障害者福祉について(原先生)高齢者福祉について(笠原先生)
13	6月29日(木)	学びのプランを組み立てる④卒業生講師
14	7月6日(木)	学びのプランを組み立てる⑤高齢者福祉・認知症サポーター養成講座(外部講師)
15	7月13日(木)	学修ポートフォリオ入力(石田)、各クラス個別面談:PROGの結果について、和の精神・エピソードについて、レポートについて、クラブなど学生生活・学習面のことなどについて(各先生)

(2) 大学基礎演習Ⅱ

「大学基礎演習Ⅰ」で学んだ「建学の精神」と「本学で学ぶ意義・目的」を深めるとともに、11月と12月に実施する見学実習を含む学外活動等とその事前・事後学習を通して2年次以後の学修に必要な基礎的知識・技能・態度のステップ・アップを図る。また、授業全体を通して、自分の進路について考えることができるよう学修を深める。

新型コロナウイルス感染予防対策として、見学実習に関しては、すべての実習参加学生と引率教員に「実習生健康管理表」(学科独自作成)を配布して、実習前2週間、検温してそれに記入してもらうことにした。

回	月日	内容等
1	9月21日(木)	シラバスの確認と授業計画について、アンケートの結果について、学位授与方針の自己評価入力
2	9月28日(木)	見学実習について、見学実習予定先の調査1・各実習先の概要説明
3	10月5日(木)	見学実習予定先の調査2・各実習先の概要説明
4	10月12日(木)	見学実習予定先の調査3・各実習先の概要説明(川下先生) 謝礼金の説明
5	10月19日(木)	各施設説明・実習先希望調査・実習先決定 健康管理表の配布 誓約書の説明と配布
6	10月26日(木)	実習の心得(濱田先生)・実習ノートの書き方(原先生) 実習ノートの配布 誓約書提出
7	11月9日(木)	3年生:2名 4年生11名による見学実習に関するグループワークの実施
8	11月16日(木)	見学実習先最終確認と実習ノート作成
9	11月30日(木)	見学実習① 12月7日見学実習の学生は休講
9	12月7日(木)	見学実習② 11月30日見学実習の学生は休講
10	12月14日(木)	実習ノート作成・提出 プレゼンテーション資料作成
11	12月21日(木)	実習ノート返却、プレゼンテーション資料作成
12	12月28日(木)	プレゼンテーション資料完成・提出
13	1月4日(木)	プレゼンテーション、実習ノート提出
14	1月11日(木)	学びのプランを組み立てる⑤(学科目標の省察、3セメ学科目標作成) 来年度以降の実習に関する授業について 実習の手引きの配布

見学実習一覧表（44名）

実施日	見学実習先	参加学生数	引率教員
令和5年11月30日	ぼんぽこはうす	6人	原
令和5年11月30日	羽曳野荘	9人	上續
令和5年11月30日	清心寮	6人	笠原
令和5年11月30日	大阪市中央こども相談センター	2人	川下
令和5年12月7日	四天王寺悲田院養護老人ホーム	4人	大西・鳥海
令和5年12月7日	四天王寺悲田院在宅	4人	大西・鳥海
令和5年12月7日	四天王寺悲田院特別養護老人ホーム	5人	大西・鳥海
令和5年12月7日	四天王寺悲田富田林苑	8人	笠原

3. 授業相互参観について

(1) 実施計画

本専攻の授業相互参観は、「社会福祉士」「精神保健福祉士」国家試験受験資格取得のための指定科目および「教科に関する科目」を中心に、所属教員全員が公開授業を計画し、その後予定された日程等をふまえて授業相互参観を実施した。

以前は12月に実施する「実習報告会」（科目名は「社会福祉相談援助演習V」「社会福祉相談援助実習指導C」）を公開授業としていたため、多数の教員の参観が集中した。それを避けるために、近年は「実習報告会」を公開授業科目とはせず、基本的には教員からの公開授業科目と公開日時の申告により、学科内教員全員が授業相互参観を実施できるように計画している。その詳細は以下の通りである。

(2) 授業相互参観の実施

授業相互参観・合評会の実施は下記の表の通りである。

担当教員	日時	時限	公開授業科目名	教室	合評会
石田晋司	12月14日	木1	精神保健福祉の原理	6-303	授業終了後
上續宏道	12月20日	水2	児童・家庭支援と福祉	6-351	授業終了後
大西敏浩	11月7日	火1	障害者福祉	6-254	授業終了後
笠原幸子	12月13日	水3	高齢者支援と福祉	6-354	授業終了後
川下維信	11月10日	金5	臨床心理学	6-351	授業終了後

鳥海直美	11月16日	木1	ソーシャルワークの基盤と専門職Ⅱ	6-351	授業終了後
濱田佐知子	12月12日	火1	ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ	6-352	授業終了後
原 順子	12月13日	水5	障害者支援と福祉	6-351	授業終了後

(3) 合評会の内容

授業参観者がいた科目については予定通りに合評会が実施された。その後授業参観者が「参観シート」を作成し高等教育推進センターに提出した。以下の内容は授業参観者の「参観シート」を転記したもので、書式および文体は不統一である。

科目名：精神保健福祉の原理

- ・とても雰囲気の良い授業でした。学生たちの意見を聞きながら授業を進めていました。
- ・学生と教員の距離も近く、学びやすい環境づくりに心掛けられたわかりやすい授業と思いました。授業内容の理解を深めるために、関連した映画を鑑賞し、それをもとに、専門用語の概念を説明していました。

科目名：児童・家庭支援と福祉

- ・授業開始前に脱帽を指示されるなど、授業規律維持を徹底されていると感じました。そのためか、私語や居眠りをする学生も少なく、熱心にメモを取る学生が多いのが印象的でした。座席を指定制にされているのも学修環境として効果的に感じました。
- ・講義は、家庭裁判所調査官をゲストスピーカーに招いた実務講義でしたが、単なる講義だけではなく、面接場面のロールプレイやフリートーク、質疑応答など社会福祉士をめざす学生の興味が喚起されるよう工夫されており、そのためか、学生からの質問も活発に感じられました。同講義を参観された先生のご指摘で気付いたのですが、これは、事前の綿密な打ち合わせがあつての結果だろうと思われ、自身がゲストスピーカーを招聘する際も参考にしたい貴重な気づきを得ることができました。
- ・また、講義は視覚障害のある学生も受講していましたが、何ら支障なく受講しているように見受けられ、外部講師の授業であっても、丁寧な配慮がなされていると思いました。この点もおそらく事前の入念な準備の賜物だと感服いたしました。
- ・全体を通して、とても安定した講義だと思いました。他学科からの履修生が3分の1ほど受講しているということでしたが、受講態度も良く、担当教員との関係性が成立していると思えました。この点に関しては、質疑応答が延長し、講義終了時刻を超過したにもかかわらず、誰一人中座しようとする学生がいなかったことも印象的でした。貴重な講義を参観させていただきありがとうございます。

科目名：障害者福祉

- ・授業始めには、前回の授業内容に関する質問をおこない、答えは受講生がスマホから teams に提出するという方法をとられており、学生も手慣れた感じで答えを書いていた。誰がどんな回答をしているかをすぐに教員はわかることができるので、とても良い方法だと思った。
- ・本科目は共通教育科目なので、障害者福祉にどの程度の興味関心を持って受講しているのか参観者はわからないが、少しでも障害者に関心を持ち、障害者を理解してほしいと思われている授業担当者の気持ちが十分に理解できる授業であった。

科目名：高齢者支援と福祉

- ・介護保険に関するサービスメニュー等について、特に福祉用具の利用に関して、パワーポイントを用いて詳細な説明がなされていた。パワーポイントの画像の中で、重要事項は赤字で記載され、ポイントが把握されやすい内容になっていた。
- ・随時、前回までの学修内容の振り返りと確認が行われつつ、関連する新しい学修内容につなげられるように工夫がなされていた。クイズ形式で学生に質問なども行われ、理解の定着をはかるための働きかけが行われていた。
- ・社会福祉士国家試験の内容にも触れながら、今後の受験合格のために必要なポイントなどについても折に触れて説明がなされ、受験を考える学生にとっても有益な内容説明となっていた。
- ・一定の説明の後に、学生に質問などがないか確認をしたり、机間巡視を行いながら個別に声をかけ、その反応を確かめながら授業がすすめられていた。
- ・教員に対し学生からも主体的に疑問や質問に関する発言がなされるなどの反応がみられ、講義形式ではあるが、学生との対話を重視した闊達な授業展開が見られた。
- ・授業の終盤には、QR コードを利用した本時の学修内容の確認などが実施され、理解の取りこぼしがないようにすすめられていた。併せて、これまでの録画してきた授業を、学修内容の定着のために活用できるような方法について学生と相談されていた。学生と教員の距離も近く、学びやすい環境づくりに心掛けられたわかりやすい授業と感じた。
- ・授業内容と方法：福祉用具貸与、特定福祉用具販売など要支援・要介護の鑑定を受けている高齢者が対象となる種目についての講義。
- ・パワーポイントを使用し、記載した重要な言葉については赤字で示していた。ひとつひとつの用具について図で示し、よく似た名称の器具は対象者によって名称が変わることに注意をすることなど、わかりやすく説明していた。貸与か販売かの違いを単に暗記で覚えるのではなく、なぜその器具を貸与にするのか、販売にするのかの理由を明確にして説明していた。制度の内容について、知識として定着するように何度も繰り返し確認していた。これまで学習したことについても学生に質問し、理解度を確認していた。
- ・社会福祉士国家試験問題に出しやすい項目を例に挙げ説明するなど、国家試験問題を意識した授業になっていた。最後に授業の録画をどのように利用するかについて、学生と相談していた。学生は前に座り、よく質問していた。
- ・感想等：ゆっくりとわかりやすい言葉で授業を進めていた。教員は一人ひとりの学生との距離感を大切にし、フロアを巡回して話をしたり、質問をしたりしていた。ひとつの

授業に多くの内容を詰め込むことなく、学生の反応を見据えたうえで、授業を進めていく大切さ、学生の意見に耳を傾けることの大切さを感じた。

科目名：障害者福祉

- ・外部講師を招いた前回の授業や夏学期の授業のことを振り返っておられ、連続性のある授業展開が参考になりました。また、その振り返りの中で学生の意見や感想も匿名で紹介されていました。
- ・「〇〇について知っている人」と挙手を求められ、授業への参加も促されていたのが印象的でした。
- ・合評会でお話していたのですが、福祉の歴史を教えるときにいかに時代背景を知らせていくかということが課題です。授業担当者は YouTube での映像を用い、視覚的に印象付け、それをベースに伝えないと年代だけでは関心が湧きおこらないと話されていて共感いたしました。
- ・また、授業の感想や意見は IBU ネットを活用されていました。課題管理はもちろんですが、ちょっとしたリアクションペーパー代わりの活用方法も知ることができました。私も CSV ファイルの保存方法について知っていることを伝え、このように互いの ICT の知識を共有できる機会は貴重だと改めて感じました。
- ・最後に、学生目線で話を展開されている姿を参考にさせていただきたいと思うと同時に、自身が学生に配慮しているつもりでも我流であることを反省しました。
- ・貴重な機会をいただき、ありがとうございました。授業参観をする・されることはプレッシャーでもありますが、自分の教育技法を確認することができたように感じます。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会

年 1 回、「ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会」を開催し、「ソーシャルワーク演習 I・II・III・IV」の担当者 7 名（非常勤講師 1 名を含む）の参加のもと、今年度の授業の振り返りと次年度の演習指導にかかわる改善点及び留意点の確認が行われている。今年度は 2024 年 4 月 1 日に担当教員による打ち合わせを実施した。

議事録は次のとおりである。

(以下、議事録を転載)

2024 年 4 月 2 日

ソーシャルワーク演習 担当者打ち合わせ 議事録

日 時：2024 年 4 月 1 日（月）16 時 00 分～17 時 30 分

会 場：四天王寺大学 事務局棟 1 階 第 1 会議室

出席予定者：脇田，上續，大西，濱田，原，吉田，鳥海（敬称略）

1. 2023 年度をふりかえって

➤ 担当教員一覧（敬称略）

科目	学期	時間割	担当者
ソーシャルワーク演習Ⅰ	冬	月曜 5 限	上續, 鳥海, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅱ	夏	月曜 5 限	重野, 鳥海, 濱田, 原
ソーシャルワーク演習Ⅲ	冬	月曜 4 限	重野, 鳥海, 濱田, 原
ソーシャルワーク演習Ⅳ	夏	月曜 4 限	大西, 鳥海, 吉田, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅴ	冬	水曜 2 限	大西, 川下, 鳥海, 濱田, 吉田

➤ 受講状況（単位修得状況、授業内容の工夫、授業運営にかかわる課題など）

・単位未修得者の情報共有

・授業運営上の課題

【演習Ⅳ】補講の特別講義（4コマ）を無断欠席した学生に対して、レポート課題を課して出席にかかわる配慮を行ったが、冬学期に実習を中断したために受験資格取得につながらなかった。

➤ 受講アンケート（自由記述回答）などの情報共有

【演習Ⅰ】12月25日に他のクラスは休講なので休講にしてほしい、という意見がみられた（2クラスが教員の都合により休講）。

【演習Ⅳ】「演習をふりかえって」という独自課題を提示したところ、他クラスに比べてレポートの課題数や文字数が多い、という意見がみられた。

2. 2024 年度に向けて

➤ 担当教員一覧（敬称略）

科目	学期	時間割	担当者
ソーシャルワーク演習Ⅰ	冬	月曜 5 限	上續, 鳥海, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅱ	夏	月曜 5 限	鳥海, 濱田, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅲ	冬	月曜 4 限	鳥海, 濱田, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅳ	夏	月曜 4 限	大西, 鳥海, 吉田, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅴ	冬	水曜 2 限	大西, 川下, 鳥海, 濱田, 吉田

【全クラス共通】

●初回に共通シラバス（添付）＋各クラスの授業計画

●欠席遅刻の取り扱い

→IBUnet のシラバスに明記する必要があるため、教務課に修正を依頼した（4月2日修正済）。

【現】遅刻・欠席は原則として認められない。



【新】実習の評価方法に準じて遅刻・欠席は認められない。体調管理も実習の評価項目に含まれることによる。遅刻も欠席として取り扱うとともに、欠席は原則として2回までとする。

●学校感染症による登学停止時の出席にかかわる配慮のあり方

実習に向けた事前学習の機会を保障することを目的として、課題（レポート、ワークシート等）を提示し、提出期日までに提出をもって出席として取り扱う。

●授業配慮の提供方法

- ・授業配慮申請や長期入院等による出席に代替する配慮の提供方法については、その都度、個別に教員間で協議を行う。
- ・実習が対面形式で実施されることに準じて、出席に代替する配慮の提供を認めていなかった経緯がある。

【演習Ⅱ】

- 期末課題（各クラス共通）≒個別支援計画書

【演習Ⅲ】

- ソーシャルワーク実習 A
- ・実習期間：11月11日（月）～11月24日（日）
- ・2コマの補講→学生との協議を要する

【演習Ⅳ】

- ソーシャルワーク実習 B
 - ・実習期間：6月3日（月）～7月4日（木）
 - ・5コマの補講→特別講義で5コマを充てる
-
- 特別講義（合同授業）
 - ・日 時：5月25日（土）1・2・3・4・5限
 - ・講 師：羽曳野市社会福祉協議会
 - ・テーマ（案）：羽曳野社会福祉協議会の役割と機能，羽曳野市の困りごと解決プロジェクト
 - ・教 室：6-253, 6-254
-
- 脇田先生による実践報告（合同授業）
 - ・日時：5月13日（月）4限
 - ・内容：前半に脇田先生より東大阪における地域活動の現状と課題についてご報告いただき、後半にグループディスカッションに取り組む。

・教室：6-354

➤ 藤井寺市社会福祉協議会との連携

- ・多様な地域の活動を理解することを目的として、2025 年度を目途に藤井寺市社会福祉協議会にも特別講義をご依頼したい。

3. クラス・担当者

➤ 配慮を要する学生等にかかわる情報共有（個人情報を含むため割愛）

【演習Ⅳ】

- ・視覚障害のある学生への合理的配慮の提供として、使用するテキスト（事例のコピーなど）をスキャンして word に変換・編集する作業を要した。
- ・視覚障害のある学生に合理的配慮を提供するにあたっては、時間を要することから早期に担当者を選定する必要があるのではないかと。
- ・視覚障害のある学生に、学生サポーターが同席した授業では、学生サポーターの役割に大きな効果がみられ、本人が円滑に演習課題に取り組むことができた。

4. その他

- ・学外実習、施設見学、地域連携などの機会を演習の授業内容に含める場合は、他クラスの学生も可能な限り参加できるようにすることによって、学生が学びの機会を選択できる。
- ・ChatGPT を活用したグループディスカッションの方法を習得することで、欠席者がグループディスカッションに疑似的に参加できる可能性がある。
- ・教員の体調不良や出張時に、他クラスと合同で実施することで、教員間が相互に支援する体制を敷くことができる。

以上

（転載終わり）

演習科目において、対話や討議などの受講生間のコミュニケーションや、グループによる協働作業は授業の大きな構成要素である。実習に対する動機形成や、コミュニケーションにかかわる主体性の涵養に向けて、教員が継続的にかかわり、実習生としてのレジリエンスを培う機会となることが期待される。

打ち合わせでは、学生について気になったことや、担当教員が把握した実習意欲などを共有し、実習科目と関連づけていくことが目指されている。

なお、「打ち合わせ会」および「ソーシャルワーク演習」全体の主担当は鳥海、副担当は濱田である。

（2）ソーシャルワーク実習・実習報告会

「ソーシャルワーク実習 B」及び「社会福祉相談援助実習 B」は、社会福祉士の指定実習として 5 週間にわたり現場施設等に通う実習である。例年 6 月上旬から 7 月上旬に大半の学生が実習に行き、若干名が 8 月の夏季期間中に実習を実施している。実習先の受け入

れ状況に応じた実習期間を設定したこともあり、スケジュールにずれは生じたものの、いずれの施設でも規定の実習時間を満たすことができた。

令和5年12月9日（土）に「実習報告会」を実施した。約5週間の「ソーシャルワーク実習」及び「社会福祉相談援助実習B」を終えた3回生など（一部4回生）が発表学生となり、2年生など（一部3回生）の聴講学生に対してその経験とそこから得られた知見を毎年報告している。

この「実習報告会」は、当日の司会進行など、すべて学生主体で行われている。プログラムや役割分担の企画などについて従来は教員が主に担当していたが、平成28年度から学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの変更などを企画している。

今年度も、オンライン開催にするか対面開催にするか、感染状況を鑑みながら検討してきた。対面開催とした際も感染対策のため大勢で集まる全体会をやめ、最初から分科会形式で行うことにした（参照：「ソーシャルワーク実習報告会プログラム」）。

学生の発表は、いずれのグループ（分科会）も優れたプレゼンテーションとなっていた。

実習の履修を希望する1年生にも聴講することを新型コロナ以前は、義務づけていたが、昨年同様に動画を記録して「ソーシャルワーク実習指導A」の事前課題の一つとした。

今後も学生の主体性を高める場、学年を越えた学びの交流の場となるように引き続き展開していきたい。

なお、「社会福祉相談援助実習・実習報告会」の担当は大西（主）、鳥海（副）、川下、濱田、吉田〔教育学部〕であり、石田、上續、笠原、原、平川、が参加した。

表1 プログラム

令和5年度 社会福祉相談援助実習報告会 プログラム
12月9日(土) 9:25~14:55

1 グループ発表会 (第1部)	
9:10	入室開始
9:25	資料配布 連絡事項等説明
【グループ発表】発表15分+質疑交流10分	
9:35	1回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Gグループ
10:00	
10:10	2回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Gグループ
10:35	
10:45	3回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Gグループ
11:10	
11:20	4回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表A-Gグループ
11:45	
11:45	休憩
2 グループ発表会 (第2部)	
【グループ発表】発表15分+質疑交流10分	
12:30	入室開始
12:40	5回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表H-Oグループ
13:05	
13:15	6回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表H-Oグループ
13:40	
13:50	7回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表H-Oグループ
14:15	
14:25	8回目 発表(15分)／質疑交流(10分) 発表H-Oグループ
14:50	
14:50	受講アンケート記入 14:55 聴講計画書・受講アンケート・出席票提出
3 MSWインターンシップ説明会 4-263 (15:10~16:10)	
※現3回生、希望者のみ	
①インターンシップの概要説明	
②先輩の体験談	
③申込用紙配布	
④質疑応答	

表2 グループ発表会のテーマ等

4 グループ発表会 資料目次

【発表方式】	発表15分+質疑交流10分	
	第1部 発表A~G	第2部 発表H~O
【時間】	1回目 9:35~10:00	5回目 12:40~13:05
	2回目 10:10~10:35	6回目 13:15~13:40
	3回目 10:45~11:10	7回目 13:50~14:15
	4回目 11:20~11:45	8回目 14:25~14:50

障害分野(障害A=障害者、障害B=障害児・者、障害C=障害児)

	発表	分野	テーマ	グループ名	教室
1	発表A	高齢1	専門職と地域住民の関わり	いちご杏仁豆腐	4-259
2	発表B	地域・高齢	地域のつながりの場を提供する大切さ	さくらんぼとバナナ	4-260
3	発表C	地域1	多職種他機関連携	さかい	4-261
4	発表D	障害A	一人ひとりに合った支援のあり方	ハチワレ	4-262
5	発表E	障害B	障害のある子どもからおとなまで	チームみらくる	4-263
6	発表F	母子・ 児童養護	様々な事情の母子に寄り添う	パン食べ放題	4-207
7	発表G	障害C1	子どもへの自立に向けた支援	きりん	4-208
※注意:4-206は先に使用されています。出入り等は静かにお願いします(廊下での私語は慎んでください)。					
8	発表H	地域2	地域で暮らす精神障害者への支援	おこめ	4-259
9	発表I	地域3	様々な事情を抱える高齢者との向き合い方	チームとまと	4-260
10	発表J	高齢2	認知症の方との関わり方	キティちゃん	4-261
11	発表K	子ども	子どもの向き合い方	パンどろぼう	4-262
12	発表L	子ども	児童分野でのソーシャルワーカーのあり方	ごきげんパンダ	4-263
13	発表M	障害C2	子どもと保護者に寄り添う	チームたぬき	4-207
14	発表N	障害C3	障がい児への伝え方の工夫	信仰会	4-208
15	発表O	病院	病院で働くソーシャルワーカー	くらんけん	4-209

(3) 社会福祉士国家試験対策講座

1. 全体の概観

3年生の社会福祉士国家試験対策講座である「社会福祉探求Ⅳ」では、これまでの指定科目や関連専門科目の学びと連動させながら、国家試験受験を視野に入れた科目である。具体的には「福祉行財政と福祉計画」、「福祉サービスの組織と経営」、「就労支援サービス」について体系的に学んでいる。「社会福祉探求Ⅴ」では、「社会福祉探求Ⅳ」で学んだ科目を中心に復習の講義時間を取り入れ、今回は「社会調査の基礎」、「相談援助の理論と方法」、「社会保障」「権利擁護と成年後見制度」「更生保護制度」について講義を実施した。

4年生には「社会福祉研究Ⅰ」「社会福祉総合研究Ⅰ」「社会福祉研究Ⅱ」「社会福祉総合研究Ⅱ」を毎週土曜日と夏季休暇中に実施した。今年度の第36回社会福祉士国家試験の合格率は60.9%（受験者46名のうち28名が合格）で、合格率50%の目標を達成することが出来なかった。

授業に係るさまざまなこと（講師との連携、小テストの準備、出欠等）は担当教員がローテーションを組んで行った。

2. 各講座科目日程等

学年	セメスタ	科目名	開講期間	責任者
3年	5	社会福祉探求Ⅳ	8/3, 8/4, 8/5, 8/7 (計15回+定期試験)	川下
	6	社会福祉探求Ⅴ	1/25, 1/26, 1/27, 1/29 (計15回+定期試験)	上續
4年	7	社会福祉研究Ⅰ	夏学期・火曜4・5限	全員*
		社会福祉総合研究Ⅰ	8/2, 8/4, 8/7, 8/9, 8/17, 8/21, 8/24 (計17回+定期試験)	全員*
	8	社会福祉研究Ⅱ	冬学期・火曜4・5限	全員*
		社会福祉総合研究Ⅱ	冬学期・火曜4・5限	全員*

■社会福祉研究Ⅰ・社会福祉総合研究Ⅰ 夏学期

回	月	日	2限(10:55~12:25)		3限(13:15~14:45)		4限(15:00~16:30)		5限(16:40~18:10)	
			科目	講師	科目	講師	科目	講師	科目	講師
0	11	火					オリエンテーション(15:00~15:30)/夏学期プレ試験(第1回学内模試)(15:45~18:00)			
1	18	火					現代社会と福祉①	坂本	現代社会と福祉②	坂本
2	25	火					社会理論と社会システム①	各務	社会理論と社会システム②	各務
3	2	火					相談援助の理論と方法①	坂本	相談援助の基礎と専門職①	坂本
4	9	火					地域福祉の理論と方法①	各務	地域福祉の理論と方法②	各務
5	16	火					権利擁護と成年後見制度①	田坂	権利擁護と成年後見制度②	田坂
6	23	火					更生保護制度①	田坂	更生保護制度②	田坂
7	30	火					人体の構造と機能及び疾病①	大西	社会福祉研究Ⅰ定期試験	
集中講義			教室[4-209(変更後)]							
8	2	水	社会保障①	竹元	社会保障②	竹元	社会保障③	竹元		
9	4	金	福祉行財政と福祉計画①	竹元	福祉行財政と福祉計画②	竹元	低所得者に対する支援と生活保護制度①	竹元		
10	7	月	保健医療サービス①	竹元	保健医療サービス②	竹元	低所得者に対する支援と生活保護制度②	竹元		
11	9	水	心理学と心理的支援①	向	心理学と心理的支援②	向				
12	17	木	高齢者に対する支援と介護保険制度①	大西	高齢者に対する支援と介護保険制度②	大西				
13	21	月	児童・家庭に対する支援と児童家庭支援制度①	竹元	児童・家庭に対する支援と児童家庭支援制度②	竹元				
14	24	木	障害者に対する支援と障害者自立支援制度①	竹元	障害者に対する支援と障害者自立支援制度②	竹元	社会福祉総合研究Ⅰ定期試験(15:00~16:00) 国家試験受験手続説明会(16:15~17:15)			

■社会福祉研究Ⅱ・社会福祉総合研究Ⅱ 冬学期

2023		2限		3限		4限		5限	
回	月 日	曜日	科目	講師	科目	講師	科目	講師	科目
0	9	26	火				オリエンテーション(15:00~15:30)／冬学期プレ試験(第2回学内模試)(15:45~17:30)		
1		3	火				保健医療サービス③(演習)	竹元	低所得者に対する支援と生活保護制度③(演習)
*		7	土	ソ教連模試(10:00~12:15/13:00~14:45)					
2		10	火				福祉サービスの組織と経営①	竹元	福祉サービスの組織と経営②(演習)
3		17	火				社会調査の基礎①	大西	社会調査の基礎②(演習)
4		24	火				社会保障④	竹元	社会保障⑤(演習)
5		31	火				就労支援サービス①	竹元	就労支援サービス②(演習)
*		11	土	中央法規模試(10:00~12:15/13:00~14:45)					
6		14	火				人体の構造と機能及び疾病②(演習)	大西	高齢者に対する支援と介護保険制度③(演習)
7		21	火				社会理論と社会システム③(演習)	各務	地域福祉の理論と方法③(演習)
8		28	火				相談援助の理論と方法②(演習)	坂本	相談援助の基礎と専門職②(演習)
9		5	火				現代社会と福祉③(演習)	坂本	心理学理論と心理的支援③(演習)
*		9	土	東京アカデミー模試(10:00~12:15/13:00~14:45)					
10		12	火				模試解説会①	竹元	模試解説会②
11		19	火				福祉行財政と福祉計画③(演習)	竹元	障害者に対する支援と障害者自立支援制度③(演習)
12		26	火				児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度③	竹元	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度④(演習)
*		28	木	社会福祉研究Ⅱ・社会福祉総合研究Ⅱ 総合試験(13:00~15:00)					
13	1	9	火				権利擁護と成年後見制度③(演習)	田坂	更生保護制度③(演習)
14		16	火				総まとめ①	竹元	総まとめ②

3. 既卒者（卒業後3年以内）向け

働いている卒業生が受講しやすいように、年末年始にオンデマンドで社会福祉士国家試験講座を配信している。今年度の配信期間と実施内容は以下のとおりである。卒業生5名、在学生26名が受講した。

配信期間：12月28日（木）～1月4日（木）

開講科目：人体の構造と機能及び疾病・心理学理論と心理的支援・社会調査の基礎・高齢者に対する支援と介護保険制度・児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度

配信期間：1月5日（金）～1月10日（水）

開講科目：現代社会と福祉・地域福祉の理論と方法・福祉行財政と福祉計画・福祉サービスの組織と経営・更生保護制度動画・権利擁護と成年後見制度・社会理論と社会システム

配信期間：1月11日（木）～1月16日（火）

開講科目：社会保障・保健医療サービス・低所得者に対する支援と生活保護制度・就労支援サービス・障害者に対する支援と障害者自立支援制度

今後の課題は、①既卒者の視聴応募者を増やすこと、②配信時期の検討、③オンデマンド教材の内容の検討などである。

オンデマンド教材一覧

No.	科 目	コマ数	時間
1	人体の構造と機能及び疾病	1	1.5
2	心理学理論と心理的支援	1	1.5
3	社会理論と社会システム	1	1.5
4	現代社会と福祉	1	1.5
5	社会調査の基礎	1	1.5
6	地域福祉の理論と方法	1	1.5
7	福祉行財政と福祉計画	1	1.5
8	福祉サービスの組織と経営	1	1.5
9	社会保障	1	1.5

10	保健医療サービス	1	1.5
11	高齢者に対する支援と介護保険制度	1	1.5
12	低所得者に対する支援と生活保護制度	1	1.5
13	障害者に対する支援と障害者自立支援制度	1	1.5
14	就労支援サービス	1	1.5
15	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	1	1.5
16	更生保護制度/権利擁護と成年後見制度	1	1.5
	計	16	24

(4) 精神保健福祉士国家試験対策講座

合格率は 85.7% (7 名中 6 名合格) であった。なお既卒者の受験生は 1 名で 1 名が合格した。精神保健福祉士の国家試験対策は、10 月 8 日 (日) 3 限・4 限、12 月 10 日 (日) 1 限・2 限で実施した。

(5) 公務員社会福祉職受験対策講座 (社会福祉特別講義 I・II)

社会福祉特別講義は、公務員採用試験受験支援講座として、東京アカデミーと協働し平成 29 年度より、集中講義で開講している。

社会福祉特別講義 I は、公務員試験の 1 次試験対策として位置づけられており、一般教養採用試験の国語・算数が授業内容となっている。

本講座は、短期大学部保育科との合同開講となっている。受講対象学生は保育科 1 年生 (1 セメスター) と人間福祉学科健康福祉専攻 2 年生 (3 セメスター) である。令和 4 年度の履修人数は、54 名 (短大保育科 37 名・人間福祉学科健康福祉専攻 17 名) で、今年度は、両学科とも多かった。

社会福祉特別講義 II は、社会福祉専門職採用試験に関わる社会福祉の専門知識を確実なものにするための講座である。授業内容は、社会福祉全般・社会学概論・心理学を中心に社会福祉の専門用語の理解、社会福祉に関するテーマの論文対策となっている。

また、本講座は社会福祉専門職公務員採用試験社会福祉協議会採用試験、独立行政法人病院機構 (国立、公立) 採用試験などにも有効で、社会福祉士国家試験、精神保健福祉士国家試験の学習にも役立てることが可能である。

いずれの社会福祉特別講座も公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な科目である。

(6) その他

(1) ~ (5) に示した学科独自の演習、実習指導、受験支援は、授業時間内だけでは成立しない科目である。常に学生一人ひとりと向き合い、その学びの質と成果を学生と共に確認していく取り組みが求められている。令和 5 年度はハイブリッド型授業を含めた遠隔授業の実施は減ったものの、今後もさまざまな ICT を活用した教授方法の向上にも努めていくことが必要である。学科のすべての教員がチームとして学生を育てていく体制を実

施しているが、今後はそれらをさらにブラッシュアップして取り組んでいくことが求められている。

なお、この報告書作成者は以下の通りである。

- | | |
|--------------------------|-----------|
| 1. はじめに： | 原 順子 |
| 2. 大学基礎演習について： | 石田晋司 |
| 3. 授業相互参観について： | 原 順子 |
| 4. 学科独自の取り組みについて | |
| (1) ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会： | 鳥海直美 |
| (2) ソーシャルワーク実習・実習報告会： | 大西敏浩 |
| (3) 社会福祉士国家試験対策講座： | 鳥海直美・笠原幸子 |
| (4) 精神保健福祉士国家試験対策講座： | 石田晋司 |
| (5) 福祉系公務員受験対策講座： | 石田晋司 |
| (6) その他： | 原 順子 |

*本原稿は、学科長（石田）とFD委員（原）が回覧した上で承認を受けたものである。

教育学部 教育学科 小学校教育コース

1. はじめに

1.1 小学校教育コースの現状

教育学科小学校教育コースは、多様なニーズのある社会、学校等、子どもに応えることができる豊かな人間性と教育に関する専門的知識および実践力、指導力を持ち、「いい先生」とは何かを問い、生涯にわたり学び続け、社会や学校で活躍できる優れた小学校教員になることをめざしている。

R5年度は、卒業生114名のうち、公立学校教員（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）57名、講師28名、公立保育園1名、私立園6名、一般就職16名、公務員1名、福祉職3名、その他3名となり、75%以上が教育職に就いている（令和6年4月1日時点：「資料1」参照）。これらの成果は、学生の基礎学力向上の取り組みや教員採用試験や就職試験対策の充実に加え、本コースの教員および教職教育推進センター・キャリアセンター等の学生への継続的な支援の結果でもある。教員をめざす支援としては、教採スタートアップ講座、エントリーシートや小論文等の添削指導、面接指導、集団討論、模擬授業指導や場面指導のロールプレイの他、卒業生の教員や合格した先輩との交流会や自主勉強会のフォローなど、学生のモチベーションを継続的に促す環境づくりを行っている。また一般就職を目指す学生についても同様に、エントリーシートから最終面接に至るまで、長期にわたる就職活動支援を行っている。

取得可能な免許は、小学校教諭一種免許状の取得に加え、各プログラムの選択によって、学生は特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語）（数学）、高等学校一種免許状（英語）（数学）がある。

カリキュラムの特徴として、1年生では「学びなおし・学びほぐし」をめざす科目である「扉シリーズ」（「数理探究の扉」「英語探究の扉」）や、プログラム選択を判断するいわゆる「お試し科目」（「多様な子ども理解入門」「子育て支援論」「ベーシックコミュニケーションI」「数学的リテラシー」など）などが開講され、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」をめざして学修している。また、2年生では小学校教育実習の実習要件である「インターンシップ」や「スクールサポーターI」が開講されている。さらに、3年生では配属実習を基本とした教育実習（週に1度の実習を2ヵ月間行い、その後連続して2週間の実習を行う本学独自の实習）に参加することにより、大学で学ぶ理論と現場で学ぶ実践の往還を行うことを通して、実践的な学びの充実に図っている。

1.2 今後の課題

授業運営において、学生が主体的に参加できるよう工夫することが求められる。学生が「学習者」として受け身で授業に臨むのではなく、自らを「授業者」の立場におきながら授業に参加することができる実践的な学びを実現させたい。そのためには、教職科目で学んだ理論的な内容を実習科目や演習科目、さらには模擬授業を行う教科教育法科目などに繋げて、理論と実践の往還を図る。評価方法については、相対評価ではなく絶対評価を用いることで、学生が授業の到達目標に合わせて自身の目標を明確にし、個々の成長を自覚できるようにする。これらを通じて、学生の高い学修意欲を維持することを目指す。

学習環境においては、現在対面授業が基本である一方で、オンライン教育やデジタル教材を取り入れた教育環境が充実してきている。このため、これらのツールを活用した教育方法

のさらなる改善が必要である。

今後、学生によるプログラム選択が本格化していく中で、各プログラム選択者が必修であるプログラム科目を漏れなく履修しているか、プログラム別の卒業必修単位数を理解しているか、各プログラムで行われる各種教育実習の実習要件を満たしているかなど、学生指導の充実が必須である。また、2 回生になりプログラム選択を変更する学生も見られるため、履修指導の充実が不可欠である。特に、教育実習がかかわるプログラムについては、実習内諾交渉時期を干渉しないタイミングでのプログラム変更を徹底しなければならない。そして、プログラム非選択者のプログラム関連卒業必修単位取得の保障など、学修充実をどのように図るかが課題である。

2. 「大学基礎演習 I II」の取り組み

2.1 「大学基礎演習」を実施するにあたって

本コースでは、「いい先生になる」という一貫した理念に基づき4年間のカリキュラムを設定しているが、「大学基礎演習 I・II」はその最も基礎的部分をなすものと言える。大学ディプロマ・ポリシーを受け、大学基礎演習の学修内容をマネジメントした。

〔大学ディプロマ・ポリシー〕

- 1) 教員としての自己分析・自己研鑽の力
学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもに伝えることができる専門的知識及び実践力、指導力を身に付け、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。
- 2) 教員としてふさわしい豊かな人間性
多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および教員としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。
- 3) 変化する社会、学校で活躍できる力
学びや実践を通して多様なニーズのある社会、学校、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

<令和5年度「大学基礎演習」の到達目標>

- ① これからの大学生活の基盤となる様々な学修や学修ポートフォリオ活用のスキル、および、学習環境の活用のスキル等を身に付けることができる。
- ② 和の精神を持ち、学生同士がともに学び合い高め合うことのできる人間関係を構築しようとし、真理や本質の探究を目指し、積極的に討議等の協働的な活動に参加することができる。
- ③ 学修ポートフォリオやリフレクションを生かし、自分の学びについて振り返り、自己の成長の姿や学修についての改善点に気づき、今後の学びのデザインを描くことができる。

<大学基礎演習の内容作成にあたって考えたこと>

- 1 主体的に学ぶ力を培い、集団を動かす経験をできるだけ多く積むことができるように、授業の運営は、極力学生が行う。(学級代表による輪番)
- 2 「いい先生」に関する講義やレポート作成を通して、卒業論文作成の第1歩を学ぶ。
- 3 討議の時間を設定し、討議の仕方を学ぶとともに、自分の意見を伝えたり、他者の

- 意見をよく聞き自分の考えを高めていったりできるようにする。
- 4 私の考える「いい先生」の学修を通して、自分が描く教師像をもつとともに、それを目指すために、自分を取り巻く他者の人権・個性を大切に生活を送ることができるようにする。また、そうした資質や日常の態度こそが教師に求められるものであることを理解し、豊かな大学生活を送っていくための基礎となる力を養う。
 - 5 事前に告知された内容についての事前学修、行った授業に対してのまとめの学修を行い、学んだことが確かなものになるようにする。

令和5年度の「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、本学科小学校コースのカリキュラムにおいて1年次の1)基礎教育科目・共通教育科目と、2)専門教育科目の両者における学びをつなぎ、関連づけながらも、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」で習得した知識やスキルをベースとして2年次、3年次、4年次の専門教育科目へと学びをつなげ、発展させていく科目として位置づけられている。具体的には、大学ディプロマ・ポリシーを受け、①本学での学びと生活のための基本的なスキルの習得、②専門教育への橋渡し、③キャリアデザインの3点を目標として全30回の授業計画を設計した。これは従来の大学基礎演習のカリキュラム上の位置づけと基本的に同様である。

授業運営においては、5月に、新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行されたことに伴い、生活上の様々な制約が解かれたとはいえず、新型コロナの感染症そのものがなくなったわけではないことから、対面授業が全面復活した後も、話し合い活動等については、状況に応じながら、適切に行ってきた。

2.2 「大学基礎演習Ⅰ」の内容

回	テーマ	内容	
1	ガイダンス1	履修説明・プログラム選択・4年間の実習等	全体
2	「いい先生とは」①	学級内交流（自己紹介）	クラス
3	ガイダンス2	PROGテスト・学生支援Cより・図書館等施設活用	全体
4	「いい先生とは」②	KJ法による「いい先生とは?」・「和の精神」目標入力	クラス
5	「いい先生とは」③	KJ法による「どのような学生生活を送れば良いか」	クラス
6	「いい先生とは」④	「いい先生」をテーマとしたオムニバス講義	全体
7	「いい先生とは」⑤	「いい先生」についての発表会	クラス
8	アカデミックライティング1)	レポート作成に向けて（表記面等）	全体
9	アカデミックライティング2)	レポート作成・レポート提出	クラス
10	プレゼンづくり1)	*教育学部休講のため、各自で課題への取り組む	課題
11	プレゼンづくり2)	*教育学部休講のため、各自で課題への取り組む	課題
12	ガイダンス3	教職履修カルテ作成・教育実習等の説明等	全体
13	ようこそ!先輩①	先輩講話「大学生活をどのように過ごすか?」	全体
14	大学生活を振り返って	1分間スピーチ	クラス
15	大学生活を振り返って	学級代表者による1分間スピーチ・夏学期のまとめ	全体

「大学基礎演習Ⅰ」では、15回の前半の活動として、「いい先生とは?」をテーマに、各学生が自分の考えを深めると共に、学級の活動として、「KJ法」を用いながら、各班で仲間と交流しながら、班の活動として、自分たちの考える「いい先生像」をまとめた上で、そ

の「いい先生」になるためにどのような大学生活を送れば良いのかを考えた。

さらに、各担任がオムニバス講義として、15分ずつを持ち時間として、各担任が考える「いい先生とは？」の講話を行い、それを参考に、教育学部休講期間に、各学生がパワーポイントで、各自が考える「いい先生」をまとめた。

また、「ようこそ！先輩」と題して、小学校教育コースの3回生・4回生の先輩に、どのように充実した大学生活を送って来たのかを「体験談」も交えながら、語ってもらった。先輩の歩んできた道を聞くことで、「いい先生」になるための大学生活を具体的にイメージできたのではないかと考える。

また、夏学期の締めくくりとして「1分間スピーチ」を全員が行う活動を行った。のびのびと話すことができる学生、メモを見ながらたどたどしく話をする学生等、様々であった。教壇で子どもたちに話す機会や、採用試験等におけるスピーチなど、様々な場面で活かしていくことのできる経験の場となった。

2.3 「大学基礎演習Ⅱ」の内容

全15回の内容は下記のとおりである。ハロースクールに行っている学級があるときには、各クラスで行う基礎演習となる。その内容がシラバス下に示してある。

回	テーマおよび内容		ハロースクール	授業形態		
1	オリエンテーション（履修指導中心に） 大学基礎演習Ⅱの概要・授業計画			全体		
2	ハロースクールガイダンス			全体		
3	人権講話「学校で人権教育を担うみなさんへ」			全体		
4	ようこそ！先輩②「学内・学外で活躍する先輩たち」			全体		
5	┌ └		1組	クラス		
6			2組	クラス		
7			3組	クラス		
8		下欄の各クラスの取り組み参照	4組	クラス		
9			5組	クラス		
10			6組	クラス		
11	└		保健	クラス		
12	インターンシップについて（教職センター） プログラム選択までの手続き・志望理由書 和の精神ポートフォリオ（エピソード入力）			全体		
13	ようこそ先輩③「インターンシップ・教育実習について」			全体		
14	1分間スピーチ <一年間を振り返って>			クラス		
15	1分間スピーチ発表・1年間の振り返り			全体		
形態	1組	2組	3組	4組	5組	6組
クラス1	ハロースクール	学級レクリエーション計画	学級レクリエーション計画	学級レクリエーション計画	学級レクリエーション計画	学級レクリエーション計画
クラス2	ハロースクールの振り返り	ハロースクール	学級レクリエーション実施	学級レクリエーション実施	学級レクリエーション実施	学級レクリエーション実施
クラス3	学級レクリエーション計画	ハロースクールの振り返り	ハロースクール	アカデミック・ライティングの復習	アカデミック・ライティングの復習	アカデミック・ライティングの復習
クラス4	学級レクリエーション実施	学級レクリエーション実施	ハロースクールの振り返り	ハロースクール	レポートの構想と執筆①	レポートの構想と執筆①

					(図書館の活用)	(図書館の活用)
クラス5	アカデミック・ライティングの復習	アカデミック・ライティングの復習	アカデミック・ライティングの復習	ハロースクールの振り返り	ハロースクール	レポートの構想と執筆②
クラス6	レポートの構想と執筆① (図書館の活用)	レポートの構想と執筆① (図書館の活用)	レポートの構想と執筆① (図書館の活用)	レポートの構想と執筆① (図書館の活用)	ハロースクールの振り返り	ハロースクール
クラス7	レポートの構想と執筆②	レポートの構想と執筆②	レポートの構想と執筆②	レポートの構想と執筆②	レポートの構想と執筆②	ハロースクールの振り返り

外部講師(堺市立小学校の校長先生)を招いて具体的な事例をもとにして人権講話をして頂いた。大阪以外からの学生も多くおり、人権についての知識や理解、それに対する意識は、府県によって温度差がある。早くからこうした講話の位置づけは大変重要である。さらに、ハロースクールに行く前に「人権講話」を位置づけたことには、大きな意味がある。実際の教育現場には多様な子どもたちがいて、その一人ひとりの人権を大切にするという思いをしっかりと思ってもらおうという意味もあるのである。

「大学基礎演習Ⅱ」の柱となる活動として、四天王寺小学校を訪問し、午前中、子どもたちとも関わりながら、学校現場を体験する「ハロースクール」を実施した。これは、2年次でのインターンシップ、3年次の教育実習へと続く、四天王寺大学教育学部の独自の取り組みである。ハロースクール終了後には、次の週までに各自がそれぞれの「学び」をまとめ、各クラスで、ハロースクール後の経験の交流の場面を位置付けた。各クラスでそれぞれの交流を進めていく中で、四天王寺小学校の教育の全体像をとらえることもでき、非常に有意義であった。

「ようこそ先輩②」は、夏学期に続いて、先輩から後輩へのメッセージとして、「学内・学外で活躍する先輩たち」と題して、部活・サークル・委員会等で活躍する先輩、学外のボランティア等で頑張っている先輩の話聞かせてもらった。話す側も聞く側もたいへん意義が大きく、特に聞く側は同じ学生の話として、内容がよく伝わりやすい様子があった。また、自分のそうした経験をしたかった憧れへとつながっていた。

また、「ようこそ先輩③」は、いよいよ2年生を目前にして、これからの様々な施設・学校実習について、「インターンシップ・教育実習について」と題して、先輩たちに体験談を踏まえて語ってもらった。

また、学級活動では、「学級レクリエーション」(企画・実施)を2時間枠でとり、各班が創意工夫を凝らして企画した「プログラム」をクラスの全員が楽しみながら、取り組んで行くこととした。

1年間の締めくくりとして、前期末と同様、「1分間スピーチ」を全員が行う活動を行った。1年間のまとめとして、「一年間を振り返って」と題して、1年間の各自の学びと来年度に向けての抱負・決意を述べてもらった。

1年間の最後を締めくくる第15回には、各クラスの代表の「1分間スピーチ」と共に、各担任から一言ずつメッセージを送った。

2.4 成果と課題

(1) 成果

- ・対面での授業を行うことを基本に、学級内での学生同士の交流を大切にしながら、コミュニケーションを図り、仲間づくりを進めていくことができた。

- すべての学生がパソコン必携となり、持参できるようになった。各自が作成した PPT をパソコン画面で見せ合うことによって、互いにアドバイスし合いながら、改善していくような取り組みができた。今後も活用することが大いに期待できる
- 先輩講話を聞くことは、同学年同士の交流だけでなく、一步先に行く先輩たちの姿を垣間見ることが、自分たちの“今”を、“これから”を見つめる上で、非常に有意義であった。
- アカデミック・ライティングの基礎を学ぶ機会を設定することで、高校生までの「作文」から、大学生としての「論文」や「レポート」を意識しながら、論理的な文章作成に対して、学生たちの意識が、少しずつではあるが、高まってきている。
- 学生主体で授業を進めていこうという方針のもと、学年全体の集会では、司会進行を学生たちが担うこととした。まだまだ、司会シナリオを流しているだけという感もあるが、冬学期には、各クラス委員が、全体の流れについて考えるという面も出て来た。
- クラス全員の前で、「1分間スピーチ」という形でテーマに沿って自分の「主張」を発表する機会を夏学期・冬学期に1回ずつとった。また、クラス代表を全体で発表させることで、その内容について、全体で共有することができた。

(2) 課題

- コロナ禍を経て、高校生活で、「対面」での活動を十分に行えなかった学生も多く、人前で、自分の考えを発表したり、テーマに沿って話し合っただけといった活動に対して、やや消極的な学生も少なからずいた。また、一時間目の授業に来ることができない、人とのつながりをうまく形成することができないといった学生が増えているように思う。そうした学生も含めて、これからも対面での活動を通して、鍛え上げていく必要を痛感した。
- 今年度は、夏学期に各担任が、5月の連休までに「個人面談」を実施したが、そうした改まった機会を取らなくても、気になる学生や支援を必要としている学生が1対1で教員に相談できる機会を設定していきたいと考えているが、なかなかむづかしいのが現状である。
- 担任団も他に様々な業務をもっており、定期的な学年会の設定が非常に難しかった。(どうしても必要は場合には、昼休みや、夜間 ZOOM 等で打ち合わせや会議を設定するといったことも度々あった。)

3. 授業相互参観について

3.1 公開授業一覧

今年度も多くの教員がお互いに授業を参観しあった。以下は、小学校教育コースで公開授業を実施した科目と担当教員および授業日である。

整理番号	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	合評会
1	佐藤 美子	12月4日	火	3	初等理科教育法	理科室	授業後すぐ
2	福本 義久	11月17日	金	5	教育課程総論	4-412	授業後すぐ
3	浅田 昇平	11月22日	水	1	教育制度論	5-210	授業後すぐ
4	今井 真理	11月7日	火	4	図画工作	701	授業後すぐ
5	木村 雅則	12月1日	金	4	生徒指導論	5-210	授業後すぐ

6	坂井 啓祐	11月7日	火	1	教職演習Ⅱ	5-302	授業後すぐ
7	坂本 暁美	11月14日	火	4	初等音楽科教育法	8-210	授業後すぐ
8	杉中 康平	いつでも			全担当科目	各教室	授業後すぐ
9	千葉 一夫	12月4日	月	4	教科総合演習Ⅱ（理科）	5-302	授業後すぐ
10	土口 千恵子	12月4日	月	3	教職研究Ⅱ	4-414	授業後すぐ
11	永田 麻詠	12月14日	木	3	初等国語科教育法	4-209	授業後すぐ
12	早川 透	12月5日	火	2	発達障害の理解と指導	4-314	授業後すぐ
13	船所 武志	12月13日	水	1	初等国語科教育法	4-306	授業後すぐ
14	松岡 隆	11月8日	水	4	中等数学科教育法Ⅱ	4-209	授業後すぐ
15	山田 綾	11月8日	水	3	教育方法・技術	4-407	5限終了後
16	和田 良彦	12月1日	金	2	教職論	4-314	授業後すぐ
17	堂上 雅三	12月25日	月	1	教職演習Ⅱ	5-302	授業後すぐ
18	西岡 智	11月13日	月	3	教職研究Ⅰ	701	授業後すぐ
19	原田 三朗	11月22日	水	2	教科内容論（算数）	5-302	授業後すぐ
20	丸山 聡	12月4日	月	3	教職研究Ⅱ	4-406	授業後すぐ
21	生駒 英晃	11月8日	水	3	幾何学Ⅱ	4-263	授業後すぐ
22	小柴 和香	11月13日	月	3	初等英語科教育法	5-301	授業後すぐ
23	鈴木 浩太	11月8日	水	1	発達障害と教育方法	4-407	授業後すぐ
24	長澤 洋信	11月13日	月	5	教職実践演習	4-316	授業後すぐ
25	西口 卓磨	11月22日	水	1	教科内容論（社会）	5-302	授業後すぐ
26	森田 英俊	11月13日	月	4	確率・統計学Ⅰ	4-207	授業後すぐ

3.2 相互授業参観報告書

今年度の相互授業参観の中から4名の報告書を以下に示す。今年度は下記に加えて、他学部や他学科の授業を相互に参観し合ったり、参観されたりすることで、学部や学科を超えた相互授業参観が実施された。

(1) 報告者：生駒 英晃

参観した授業科目名	中等数学科教育法Ⅱ
授業担当教員名	松岡 隆 先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和5年11月8日（水）	教室：4-209
ピタゴラス数の性質について、最初の授業を参観いたしました。最初の20分間ほど復習の小テストを実施し、その後資料に基づいてピタゴラス数の規則性を見つけました。ピタゴラス数は3：4：5の直角三角形をはじめとして、中学生にも大変馴染み深く、また面白い規則性がたくさんあります。それらの規則性を証明する上で、初等整数論の基礎に触れることができ、また論証力を養うこともできます。気づいた点とし	

ては、まず、小テストの $x^2+3x=a$ は a が奇数のときに整数解を持たないことの証明では、左辺を因数分解することを重視していましたが、この問題を解く目的では、因数分解を重視するよりも、単純に x の偶奇で和の偶奇を判断した方が簡単であり、また一般性もあつと感じました。例えば、左辺を x^2+3x+4 と変えれば因数分解できませんが、全く同じ議論が通用しますし、 $x^4+x^3+x^2+x+2$ といった4次式で考えることも可能になります。ピタゴラス数の性質については、学生の興味を十分に惹きつけることは出来ていましたが、証明方法が、学生のレベルと比較して難度が高く、議論についていけない学生が多くいました。また、ノートを持ってきている学生が少なく、授業記録を残している学生がほとんどいませんでした。せめてノートに残し、後でもう一度復習して分からない点を確認することが必要かと感じました。ありがとうございました。

(2) 報告者：ピアース ダニエル ロイ

参観した授業科目名	初等英語科教育法
授業担当教員名	小柴 和香 先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和5年11月13日（月）	教室：5-301
<p>参観した授業は8回目の「高学年への指導」でした。授業冒頭に、学生同士の2分間ずつの「Teacher Talk」を録音させ、提出させていた。毎回行っているタスクのようで、学生への個別フィードバックが毎回行っているそうでした。また、学生が録画した模擬授業へのフィードバックもあり、授業内容や授業外活動も念入りに準備されていました。</p> <p>授業そのものの内容は、「Teacher Talk」の具体的な実践方法と、歌などの自作教材と教科書使用の結びつきが中心になった。両方も充実した内容であったが、特に評価すべき点として、「How's the weather today?」などの定番の挨拶を、違う国で経験したことなどに結び付けて、「形だけの反復」でよく終わるような活動を、児童生徒の興味関心を引くだけでなく、「施行させる」ような、意味のあるやりとりをする工夫であった。また、実践モデルを学生に見せることにとどまらず、その背景にある教育原理に触れながら丁寧に説明をなされていた。</p> <p>授業は講義中心に進めていたが、適度に実践活動を混じりながら、学生も思考する有意義な授業であった。</p>	

(3) 報告者：矢倉 瞳

参観した授業科目名	初等音楽科教育法
授業担当教員名	坂本 暁美 先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和5年11月22日（水）	教室：8-210
<p>模擬授業を実施方法に関して大変参考になった。具体的には以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めの挨拶から討議会まで学生がすべて運営している点が、学生の主体性を引き出すという点で参考になった。 ・90分の中で、模擬授業を行うグループが1班、30分という点は、学生が時間を気に 	

<p>することなく模擬授業、検討会を行うことができ、模擬授業での学びが十分に確保 されていて良いと感じた。</p>
<p>・模擬授業の振り返り、評価シートは、複数の項目が点数で示されており、授業する側、 受ける側のポートフォリオ的なものになっており、この点も自身の授業にも活かして いきたいと感じた。</p>
<p>・自身の所属コース以外の教育学部の学生の授業を見ることが少ないため、非常に新鮮 であった。</p>

(4) 報告者：松岡 隆

参観した授業科目名	確率・統計学 I
授業担当教員名	森田 英俊 先生
参観方法：対面	合評会：授業後すぐ
令和5年11月13日（月）	教室：4-207
<p>読めば細部まで分かるよう丁寧に仕上げられた配布プリントが用意され、それを基に 要点をおさえた分かりやすい説明が行われていた。また、すべての受講生が基本概念を 理解することのできるような課題も準備されており、受講生全員の理解を図ろうとする 授業者の真摯な努力が伺えた。しかしながら、教室内で絶え間なく私語が続き携帯の不 必要な使用も見られる雑然とした雰囲気の中で授業が行われており、授業者の説明が多 くの学生に届いていないように思われた。本授業の対象者である数学教育プログラムの 2年生については、自分自身の授業でも同様の傾向が見られ、その対応に苦慮してい るところである。</p> <p>そこで、私語等を少なくする工夫が望まれるが、本授業において少しは効果があるか もしれないと思われる対策は次のとおりである。授業中に行われる課題が、定義式に具 体例の数値を当てはめて計算するものであったが、これは学生全員に概念を理解させる ために有効な方法であると思うが、その一方、課題自体が単純過ぎ、ほとんどの学生が 短時間で解答を終えていた。そのため、解答後に時間が余ってしまい、私語や携帯をい じる行為が余計に生じたのではないかと感じる。そこで、解答を終えた学生には、授業 者が説明していた期待値や分散の性質を、学生自身に証明させる課題を与えることなど の対策が考えられる。それにより、授業で取り扱う内容のより深い概念的理解にもつな がるのではと考える。</p>	

今回は、4名の報告書を挙げるにとどめるが、全体として、今年度も教員同士による相互
 授業参観と合評会が実施され、研鑽を積むことができた。

現時点の課題として、各授業における効果的な ICT 活用が挙げられる。パソコンの必携
 化、各教室の環境整備、IBU.net・Zoom・Google Classroomなどの活用により、プリント類
 の配布物や課題の提出物のペーパーレス化が大幅に促進された。一方で、学生のプレゼンテ
 ーションスキルや協働的な学びを促進するための ICT 活用における、教員間の情報共有が不
 足していると考える。今後は、パソコン必携化に伴うFD及び教育改善に取り組む必要があ
 る。

4. 学科独自の取り組み

小学校教育コース独自の取り組みとして、プログラム選択と「教育基礎演習 I・II」の取
 り組みの2点を挙げる。

4.1 プログラム選択

小学校教育コースでは、小学校教諭免許の取得を基本としながら、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」を問い続けるために、「特別支援教育プログラム」「幼稚園プログラム」「英語教育プログラム」「数学教育プログラム」の4プログラムが設定されている。各プログラムにおいていわゆる「お試し科目」が1年次に開講され、自分がどのプログラムを選択することで「いい先生」をめざし問い続けるのかについて学生が考え、年度末に今年度の1年生の各プログラム選択者が決定した。

プログラム選択の特徴としては、「プログラムで学ぶ=各プログラムでの教員免許取得」ではないこと、プログラムを選択しないという選択も尊重することが挙げられる。

各プログラムでの学修により、各種教員免許取得をめざすことは基本であるが、かりに教員免許取得を希望しなくても、各プログラムで学びたいという学生の思いを尊重している。そのため、今年度も2年生の夏学期に、プログラムを選択しなおすという意志があれば自由に行うことができる機会を設け、4名の2年生がプログラムを選びなおしている。ただし、4年間で各種教員免許の取得もめざしている学生に対しては、プログラムの選びなおしについて慎重に行うよう注意喚起を行っている。

また初等教育を深く学びたい者や、進路変更によって教職以外の将来を考える者が「プログラムを何も選択しない」という選択も尊重している。プログラムを選択しないことにより、プログラム科目が開講されている時間に初等教育に関する科目や、教員採用試験対策科目を受講することができる。また、教職以外の進路を希望する学生に対しては、「子ども理解領域」として「子ども支援ボランティア論」「インクルーシブ教育の理論と方法」などといった選択科目を設定し、小学校教育コースでの学修が、学生一人ひとりにとって充実したものとなるよう、カリキュラム上の工夫を行っている。

4.2 「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組み

教育基礎演習は、教育学部独自の必修科目である。学修内容は、大学のディプロマ・ポリシーに基づき、1回生の「大学基礎演習」で培った知識・技能を基に設定した。さらに、大学卒業後のキャリアデザインを見据え、3回生からの専門分野研究への橋渡しを意図した。特に、インターンシップや介護等体験といった学外実習に取り組む学年で、教育および福祉現場での学びと大学での学修を関連付け、学びを深めることを目指した。

<令和5年度「教育基礎演習」の到達目標>

教職に向けた意識を高めること、2回生時のインターンシップや学校ボランティア活動、3回生からの専門分野研究や教育実習に向けて、技能を修得することを目的とする。

- ① 2回生1年間の学びの見通しをもち、それを大学在学中及び卒業後のキャリアデザインとつなげて考え、教職への意識を高めていくとともに、具体的な行動目標を設定する中で実践していくことができる。
- ② 体験や講話、文献講読、意見交流等を通して、教育に対する自分の「問い」をもち、探究するとともに、それを表現することができる。(レポートを書く力、プレゼンテーションする力、討議する力等の向上)
- ③ 教育実践現場において、周りの人たちや子どもたちと適切に接すること、責任をもった行動をとることなど、一社会人としての社会性を身に付け、自分が関わっている教

育現場に参画する基礎を身に付けることができる。また、具体的実践について振り返り、次の目標を設定し、実践していくことができる。

<教育基礎演習の内容作成にあたって考えたこと>

- ・大学ディプロマ・ポリシーと内容に関連付けること。
- ・大学基礎演習での学び（他者の意見と自分の意見を分けること・関連付けること、発表の仕方、発表スライドの作り方、など）を生かすこと。
- ・大学での学修と実習先での学びを往還させ、実習先で主体的に学べるようにすること。
- ・実習等での学びを言葉や文字に現して表現し、他者と意見を交わし合うこと。
- ・グループで役割を分担し、主体的・対話的に探究活動に取り組み、学びを深めること。
- ・3年生以降の大学生活への発展を意図して、その基盤を培うこと。

「教育基礎演習Ⅰ」の内容

介護等体験やインターンシップ等の学外実習と連動させて進めた。福祉・教育現場での体験を学生同士が報告し合い、問いを立ち上げ、探究する形で展開した。現代の教育現場の課題を知り、関心と意識をもって学外実習に取り組むことで、多くのことを学ぶ機会とすること、また、実習先の職員、利用者、子どもたちから多くを学ぶ為に必要となる資質・能力を高めることを目指した。この取り組みに関して、人文社会学部人間福祉学科の笠原幸子教授と(株)山勝ライブラリ代表取締役社長 山下勝巳氏による講演「介護の現場で実習をするために知っておくべき現場の状況と心構え」を行った。また、学生同士の交流と学生の自治的な活動を促進し、より豊かな大学生活を創造できるように、運動会やリクレーションの機会を設け実践した。インターンシップについては、活動の場が個別であるため、互いの取組の様子や悩み、困りごと等を大学基礎演習の場で交流し合った。夏セメの終わりには、学んできたことを話すという表現方法（1分間スピーチ）で、経験したことを言葉や表情・しぐさ等を使って友達に伝えた。

	日時	内容	授業形態
1	4/6	オリエンテーション：担任自己紹介・履修登録、クラス組織づくり	全体
2	4/13	学級メンバー自己紹介・学級組織づくり、交流活動	クラス
3	4/20	講演：「介護の現場で実習をするために知っておくべき現場の状況と心構え」	全体
4	4/27	春の運動会（クラス準備）	クラス
5	5/11	春の運動会（全体）	全体
6	5/18	小論文作成のいろは	全体
7	5/25	小論文を書いてみよう	クラス
8	6/1	インターンシップ経験の交流	全体
9	6/8	「インターンシップの発見と悩み」に基づいたPPTづくりの解説	課題
10	6/15	「インターンシップの発見と悩み」に基づいたPPTづくり	課題
11	6/22	「インターンシップの発見と悩み」のPPT交流会	クラス
12	6/29	学級イベント	クラス
13	7/6	1分間スピーチ <インターンで学んだこと>	クラス

14	7/13	1分間スピーチ <クラス代表による発表>	全体
15	7/20	夏セメの振り返り	全体

「教育基礎演習Ⅱ」の内容

「教育基礎演習Ⅱ」では、3回生および4回生の先輩や卒業生（教員、企業人など）から、将来のキャリア教育につながる講話や話題を提供してもらった。これは、職業に対する視野を広げ、多様な選択肢の中から自分のキャリアデザインを考える基盤を培うためであり、同時に現代の教育現場の課題や、それに根差した社会の課題についての探求を進めることを目的としている。そして、そこで学んだことを1分間スピーチという形で、友達に伝えた。1分間スピーチは夏セメでも経験しているので、よりよい伝え方を考え、取り組ませた。冬セメ後半では、5セメスターからのゼミ活動の意義を伝え、自分の学びを拡張できるようなゼミを選択できるように、各教員からのゼミ紹介を通じて研究活動の意義や実際について考える機会をつくった。冬セメの終わりには、2年間に渡る大学基礎演習のまとめとして、小論文を作成した。

	日時	内容	授業形態
1	9/21	オリエンテーション：履修指導、ゼミ指導、大学生活他	全体
2	9/28	個人面談	全体
3	10/5	ようこそ先輩①－先輩の新任教諭のお話	全体
4	10/12	ようこそ先輩②－教師以外の道を選んだ先輩のお話	全体
5	10/19	様々な教育活動①－地域連携に取り組んでいる先輩のお話	全体
6	10/26	様々な教育活動②－「子どもの森 中之島」のお話	全体
7	11/9	様々な教育活動③－「漢字ドリルや計算ドリル」のお話	全体
8	11/16	1分間スピーチ	クラス
9	11/30	ゼミ説明・ゼミ紹介①	全体
10	12/7	ゼミ紹介②	全体
11	12/14	ゼミ紹介③	全体
12	12/21	学級活動－レクレーション活動	クラス
13	12/28	小論文を書こう1（ガイダンス）	課題
14	1/4	小論文を書こう2（執筆と提出）	課題
15	1/11	2回生のまとめと3回生に向けて	全体

<成果と課題>

(1) 成果

学生は初めての校外実習（介護体験やインターンシップなど）に臨む際、不安と緊張を抱えることが多い。学生同士の交流時、他の学生も同様の感情を持っていることを知るだけで、安心感を得ることができ、実習に向けた意欲が高まる様子が見られた。さらに、互いに体験を報告し合う中で、学びや困りごとを共有し、自分たちで問題解決の方法を考えたり、教師に相談したりして課題を解決しようとする姿が見られた。

学外実習を通じて具体的な「問い」を立て、「探究」する課題を設定した結果、学生は実習現場での児童の様子、教師の姿、児童同士、および児童と教師との関わり合いをしっかりと

と観察するようになったと感じられる。この観察から、自分が教師として実際に教育現場に立つことを想定した「問い」を立て、関連する文献を探求し、学んだ内容を体験と関連付けて報告することが可能となった。このような学びは、その後のインターンシップや今後の教育実習においても大いに活かされると考えられる。

このような実習と大学の学修の連動は、学生の不安を解消し、意欲を高め、意欲を高めるだけでなく、学びを深める効果がある。さらに、実習先の児童の学びと成長にも良い影響を与えると期待される。

また、夏セメ、冬セメいずれにも、1分間スピーチを行う場をつくったが、伝えたいことを自分の言葉で相手意識をもってしっかりと伝える場を経験することで、面接や自分のことを伝えなければならない場面での力を培っていくことになった。

(2) 課題

2回生という時期は、学外実習を経験する一方で、教員を目指すか他の職種を目指すかを考え始める重要な時期である。教員を目指す学生のキャリア支援はおおよそ実施できたが、教員以外の職を検討し始めた学生にも意義ある内容を提供することが必要である。自分のこれからのキャリアデザインを描くことを目的に行う講話の内容について、多様な学生のキャリア支援につながるものを考慮する必要がある。これは、今後の課題とする。

【資料1】R5年度小学校教育コース卒業生:教員就職者数

教職教育推進センター

校種	教科	雇用形態	人数	正規教諭	人数
【公立】小学校		正規教諭	52名	小学校	52名
		常勤講師	14名	小中いきいき連携	1名
【国立】小学校		正規教諭	0名	中学校	2名
		常勤講師	1名	高等学校	0名
【私立】小学校		正規教諭	0名	特別支援学校	2名
		常勤講師	1名		
【公立】小中いきいき連携	数学	正規教諭	1名	常勤講師	人数
		常勤講師	0名	小学校	16名
【公立】中学校	数学	正規教諭	2名	小中いきいき連携	0名
		常勤講師	4名	中学校	5名
	英語	正規教諭	0名	高等学校	1名
		常勤講師	1名	特別支援学校	6名
【公立】高等学校	英語	正規教諭	0名		
		常勤講師	1名	雇用形態	合計人数
【公立】特別支援学校		正規教諭	2名	正規教諭	57名
		常勤講師	6名	常勤講師	28名
				教員合計数	85名
				教小全体者数	114名
				教員への就職率	74.6%

(附記) 本報告書は、FD委員がとりまとめた。なお、「2. 大学基礎演習ⅠⅡの取り組み」は杉中康平先生、「4.2 「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組み」は原田三朗先生にデータや草稿を提供いただいた。また、資料1の表は、教職教育推進センターから提供いただいたものである。ここに附記し、御礼申し上げます。

(文責 坂本 暁美)

教育学部 教育学科 英語教育・小学校コース

1. はじめに

本コースは、中学校・高等学校の英語教員免許状（基本免許状）を主とし、小学校の教員免許状（併修免許状）も取得できることを特色として設置されている。しかしながら、本コースへ入学してくる学生は、卒業後、英語を得意とする小学校教員になることを目指すものも半数近くいる。

2020年からの小学校5、6年生で英語教科化スタートを反映し、中学校・高等学校の英語科教員免許状所持者に採用試験時の加点を行っているため併修免許状として、本学小学校コースの学生で英語プログラムを選び中学校・高等学校の英語科教員免許状を取得しようとする学生が増加している。また、大阪府・大阪市を始めとして、小学校の英語指導と中学校の英語指導の両方が指導できる教員を求める傾向が強くなり、本コースからは「小中いきいき」等の採用試験合格を目指す学生が増えつつある。

また入学時には、ほとんどの学生が教員志望だが様々な座学や実習を通じて自身の適性などを深く知り「最終的に一般企業への就職を目指す」ようになる学生もいる。

このように中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の3つのグループの学生に対しての教育を担っている。1・2回生において英語基礎力やグループ協働の力を培い、3・4回生ではゼミ生どうしの英小コミュニティを活性化している。この取り組みによって、学生の英語力や意欲にばらつきがみられるものの、全体には自ら学び合う学習環境が創成されつつある。

2. 講義、および講義の系統性について

2-1. 大学基礎演習について

概要：本学の建学の精神の理解を基本に、大学における学修と大学生活の意義と目的全般にわたり初歩的な自己課題を自覚するとともに、それを支える基礎的知識・技能・態度を修得することで、四天王寺大学及び所属する学部学科への所属感を確かなものとし、以降の学生生活への見通しを持つ。

到達目標

- ①本学に所属し、学ぶことの意義を理解し、以降の学生生活に対する自己課題を自覚できる。
- ②「大学生」としての学修に必要な基本的知識・技能・態度を修得できる。
- ③「教える」とは何かを理解し、自らの目的意識として具体化できる。
- ④教員や友人との適切な人間関係を築くことができる。

R4年度から全面登学となったが、コロナ下で培ったリモート環境のノウハウを教員間で継続的に共有しあいながらアイデアを出し合い、授業開講前からLINEオープンチャットを

開設して、細かく学生とのコミュニケーションをとり、教員やクラスメイトのサポートが入りやすい環境を作った。

授業においては、グループディスカッションとプレゼンテーションを多用する形態にして学生同士、学生教員間のコミュニケーションが密に行われる体制を作った。さらに、例年同様ウェブ学習システムであるリアリーイングリッシュを課題として利用し、学生が授業外においても常に英語の学習をしなければならない環境を作った。同時に PROG テスト結果をもとに個人面談を行い各々が抱えている問題や将来への展望などを聞き取り教員間で情報を共有した。また学習ポートフォリオの入力作業なども行った。また、例年通り、ハロースクール（1年生全員が行う四天王寺東中学校での授業観察）を実施し、教職へ意識づけをすることができた。

なお、授業時間を用いて、本学海外提携校である SLCC とカモーンソン・カレッジ(5月)、浙江工商大学(6月)との交流を行った。前者とは本コース1年生による英語でのグループプレゼンテーション及び質疑応答ののち、小グループに分かれてのディスカッション。後者とは日本語で、同内容の活動を行ったが、浙江工商大学の学生にも発表いただいた。本コース側が発表した主なテーマは、藤井寺、大阪、京都、奈良の訪れるべき場所等と和文化についてであった。中国の学生からも同様に中国の地域や文化に関わる内容のプレゼンがあった。

以上のような実践は常に教員同士でディスカッションを行いながら計画立案され、FSDの観点からは担当教員二人が話し合いながら授業を行うことにより教員それぞれの強みを活かし、相互に学び合う環境となっている。

2-2. 教育基礎演習について

概要：自らの教育に関する考えを自覚的に捉えるために、言葉にして発表すること。その際自分本位にならないために、他の学生の意見をよく聞くことに努める。その上で、よい教員になるためには、今の時点で何をしなければならないかを自覚するとともに、その準備を開始する、もしくはいつでも開始できる態勢を整える。

到達目標

良い教員になるためにしなければならないことを自覚し、教員採用試験についてその概要を理解することにより、よい教員になる意識を形成することができる。

R4年度より、本科目は、教員養成課程学生の「21世紀型スキル」の醸成を目指し、担当教員2人が意見交換を行い指導の方針を定めている。グループワークを中心とし、教師・学生間また、学生同士が円滑にコミュニケーションをとれるよう、Google Forms やLINE オープンチャットを活用した。

授業実践においては、英語科教員にとって必要な基礎英語力の育成を図るとともに、教

育全般に必要な知識・技能の育成を中心に進めた。夏学期には、毎回「英語文法クイズ」を帯活動として行い、アクティブラーニングや PDCA、逆向き設計などの教育学的概念・理論を紹介してから、現代の教育問題を取り上げるディスカッション・グループプレゼンテーションを（日本語で）行った。冬学期は、それまでに蓄えた理論・概念の知識を活かしながら、教育問題をテーマに英語によるディベートを複数回行うことで、教育全般についての知見を深めた。さらに授業実践において必要な英語の抑揚・連結等、発音面の指導を目標に、グループで口頭のみでの演劇をする「Reader's Theatre」という活動を行って英語力の育成を図った。

本実践は、R4 年度に学内共同研究助成を受け、1 年を通して、「教員にとって必要な資質・能力」を学生に意識させながら、毎回の授業の振り返り活動を行った。R4 年度に成果を「教員 21 世紀型スキルの自己効力感尺度」（柏木他、2021）を用いた量的分析と、学期末の「振り返りレポート」についての質的分析を行った。R4 年度の分析データを活かし、R5 年度の実践では、特に学生が弱いと感じている「21 世紀型スキル」の項目を中心に指導をより一層徹底した。また、R5 年度の夏学期に、SLCC の留学生を授業に受け入れ、本コースと一緒にさまざまな言語を分析する 1 授業時間の活動を取り入れることで、本コースの学生の専門内容である「外国語（英語）」を教える際に必要なメタ言語知識に対する気づきを促す試みを行った。R6 年度にも継続して行う予定である。

2-3. 中等英語科教育法の系統性

英小における中等英語科教育法は、一定のシラバスが練られているものの、その指導内容は相互に系統的に整理されてきたとは言い難く、指導内容の重複や、脱落が懸念されていた。また、4 つの講義の積み重ねによって、新学習指導要領を具現化する教師としての英語力や授業力がどのように段階的に培われるか、視覚化されていなかったことが課題であった。そこで、令和 4 年度には、それぞれ専門性の高い専任教員が主に担当し、また、担当講師と指導内容の系統表共有、講義内容の交流をオンラインで行い、系統性のある指導へと近づけた。主には、以下の内容である。その効果として、学生が中学校 1 年生から 3 年生、および高校 2 年生までの教科書の系統性を理解し、それぞれの発達段階に合致した指導を組むことができるようになった。また、重複指導となっていた、フォニックス指導や、学習指導案の書き方指導も段階的に整理でき、その余剰時間では、教えるための英語スピーキング力や文法力、ICT を用いた指導についてもモジュール学習の導入が可能となった。また模擬授業についての「評価ルーブリック」の検討が進んだ。令和 4 年度の 3 回生は、この系統表で学んできており、教育実習先でも比較的英語授業への準備を自立的に進めている。必修選択科目の「英語学特論」等では、タブレットによる英語指導、SDGs 等、社会の課題解決に関わる英語指導についても発展的に取り組んでいきたい。

2-4. 教育実習指導について

2-3. で述べた中等英語科教育法の系統性と並行し、教科教育法Ⅲ（2 回生冬学期）には、少人数指導を実現し 2 クラス分割によって、一人一つ単独模擬授業、及び授業レコーディングによる省察を実現することができた。この時期には、集中的に、現場中堅の教員を招聘し、今まさに学校現場で実施されている授業や、実習受け入れ側の視点を学ぶと共に、教師としての遣り甲斐についても話を聞いた。英語教科教育法Ⅲとの直結で、3 回生前期の「教育実習指導」を、本学の専任教員と現場の中学校英語教員によるティームティーチングを実施した。学部生には身近に感じにくい「パフォーマンス評価」についても、中学校のパフォーマンステスト作成法を学んだ。教育実習を目前にした学生の集中力は高く、実習中に差し掛かった学生は熱心に指導案を持ち寄り、質問し合う姿が見られた。授業評価アンケートにおいても「自分の実践力の伸びを感じた」講義として高い評価を得た。令和 4 年度に引き続き、今年度も、英小だけでなく、教小の英語プログラムにおける、「教育実習指導」と指導法の共有を行い、年 2 回程度の小中英語教育についての合同学習会を開催した。

3. 授業相互参観について

コースとして互いの授業は常に開かれた状態でありできるだけ相互に参観することを合意している。令和 5 年度も相互参観を行い、成果を共有し合うことができた。例として、いくつかの科目につき、以下に報告の概要を示す。

冬学期「英語科教育法Ⅰ」（担当：柏木賀津子）では意欲の高い学生が履修しており、タスクベースの中学校英語指導をアクティブラーニングで実施しており、2 名の参観があった。学生の勉学の様子について共有出来た。

「初等英語科教育法」（担当：樫本洋子）では、読み聞かせのデモンストレーションを含む実践的指導と生徒の発達段階やレベルに応じた教材選択の基本的な考え方の説明など、学生の教育実践のサポートとなる授業が展開されていた。

「大学基礎演習Ⅱ」（担当：岡崎英樹・中田貴眞）では、学生による英語プレゼンテーションと質疑応答の様子から、日頃からの取り組みの成果が垣間見られた。1 年次に培った英語コミュニケーションの素地を 2 年次の「教育基礎演習」で、より発展的なアカデミックプレゼンテーション・ディスカッションに橋渡しするための協議の機会となった。

4. コース独自の取り組みについて

例年、中高英語教育コースの学生には中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の 3 つのグループの存在を前提として、(1) 英語力の向上、(2) 授業の質改善へ取り組み、(3) 教員採用試験対策（授業外）、(4) 海外教育実習（ベトナム、およびカナダ）における 1 か月に留学指導を充実させた。以下例年通りできたものを (A)、変更あるいは実施できなかったものを (B)、逆に取り組みの質や量が増加したものを (C) として報告する。

4-1. 英語力の向上

- ① (C) 在学生オリエンテーション(対面・オンライン)で英語の学習法、また最新の SLA 理論をふまえた英語学習・英検対策のピア・ラーニング形式のワークショップを行い、学生の学習方略とモチベーションの向上の機会とした。
- ② (C) 資格試験受験の奨励と指導：英検などの資格試験受験を折に触れて奨励し、英語面接対策指導を行った。面接指導を受けた学生のほとんどが英検 2 級に合格した。令和 4 年度は英検準 1 級の合格者も輩出できた。木曜日 1 限目には、1～3 月に IELTS 試験対策および即興 Speaking の自主勉強会の指導を行った。
- ③ (A) iTalk 訪問の奨励；i-Talk 主催のオンライン・対面交流イベント・WS への参加奨励。藤井寺市との連携による英語村ボランティア活動への参加奨励。
- ④ (C) 令和 3 年度より英語論文提出を卒業研究として 4 年生に義務付けた、令和 5 年度には、APA 形式のフォーマット、研究の進め方、評価基準等も具体的に明示し 2 年目になるため多くの学生が体系的に卒論に取り組めた。アカデミックライティングの指導を行い、英語論文の構成を含め、学位論文としての質向上に資した。
- ⑤ (A) 冬学期 1 月のゼミの 15 回目の授業を合同で実施し、各ゼミの代表が自身の卒業研究について英語で発表し、学生どうしの活発な意見交流が見られた。
- ⑥ (C) TOEIC の受験に加え、留学を目指す学生に向けて、IELTS 指導を一部の講義に取り入れており、平日の朝の帯学習で IELTS に取り組む学生が見られるようになった。

4-2. 授業の質向上に向けた取り組み

- ① (A) 全学的に年 2 回行われる授業評価「学生アンケート」を参考に授業改善に努めた他、授業改善について意見交換を行った。
- ② (A) 教職関連授業あるいはゼミ等で、その一部あるいは全部を英語で行い、学生への英語のインプットの機会を増やすと共に、英語による授業の実践例を共有した。
- ③ (A) Google Forms や Google Classroom をほぼすべての授業で導入し、学生の反応をリアルタイムで把握する、期限を決めてレポートをテキスト形式で入力させるなどの取り組みを行った。また Padlet や Quizlet など SNS 交流ツールを講義に積極的に取り入れている。
- ④ (C) ゼミの授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを行った。

4-3. 教員採用試験対策に向けた取り組み

- ① (A) 3回生対象各種セミナー・面接対策：5～6月、月2～3回程度設定
教員側で設定した日時が、学生のスケジュールと合わない側面はあったが、模擬授業や英語面接指導では、数名が参加し、それぞれ合格等の成果をおさめた。
- ② (A) 4回生対象和文英訳・英語エッセイ・英語面接およびディスカッション
対策：4月～9月、週1～2回
- ③ (C) 3回生および4回生対象各種エントリーシート添削について、随時行った。
- ④ (C) 3回生を中心に、近隣自治体の採用試験についての分析を行い、コース教員による英語口頭面接や、英語ディスカッションの指導を希望によって実施し、英語力をつけるストラテジーの相談タイムを設け、数名が参加した。

4-4. 卒業論文の取組

- ① (C) 教職課程において、コースの学生は普段から実践力・英語力を身につけることで多忙な状況に置かれているため、ゆっくりと「研究」そのものについて考える機会が少ない。そのため、R4年度に各ゼミ担当者が共通で使える「卒業論文規定」及び「卒業論文執筆ガイド」が必要であるとコース内で検討した。R4年度に以下のバイリンガル資料を学生向けに作成し、コース共通で使用している。R5年度に資料の中身の微修正を行い、継続して共通資料として活用している。
 - (1) 卒業論文の進め方：「質問紙調査」、「事例研究（授業研究・会話分析・教室観察・開発型・アクションリサーチ）」、「文献研究」などの大まかな研究手法の紹介から、具体的な卒論研究の進め方（問題提起→文献収集→「問」を立てること→研究計画→分析→執筆）の詳細な説明を載せたガイド。
 - (2) 卒業論文の進め方 (English version)：英語コースの特徴を意識した、上記1)の英語版。
 - (3) リーディングメモ (Reading memo)：参考文献から得られた知識をまとめるための構造化したメモ用紙。
 - (4) Thesis template：卒業論文執筆の書き込み可能なテンプレートファイル。

以上の資料は、通常のゼミ内容と並行に使える目的で作成された。将来教員になる学生が「授業実践力」や「教員に必要な資質・能力」を意識しながらも、研究の基礎を学び、卒業研究が実現できるための参考資料として作られた。さらに、以下の資料がコース共通資料として共有されている：

- (5) 卒業研究評価ルーブリック：卒業研究のプロセスから論文執筆までの評価に使用できるルーブリック

(6) 卒業研究評価表：「卒業研究」の評価の為の、コース共通で利用できる評価表

コースとして、今後も一層レベルの高い卒業研究の成果を上げるため、以上の(1)～(4)は、初年度(R4年度)の実践を経て、多少の加筆修正が行われたが、今後も適宜、改定を検討する予定である。また、(5)と(6)の資料についても、継続的にコース内協議を経て、修正版の使用検討をする予定である。

4-5. 学生の学び合いや発信、および自立した学習に向けた取り組み

- ① (C) 英小のコミュニティや上回生と下回生の交流が活性化され、英小コミュニティスペースの活用が進み、4号館の英小の学習室で学び合いや議論ができるようになった、またゼミ代表が集まって連絡を取れるようにした。学生主体のスポーツ大会が開催された。EiBUD ホームページを立ち上げ、異回生の学生の交流や採用試験の勉強会が出来る組織作りを進めている。

4-6. 海外および国内研修

- ① (C) グローバル教育研修への参加があった。(9月 オーストラリア、2月 カナダ)。当コースから5名が参加した。帰国後は、オープンキャンパス、プレエントリー、英語関連講義で、留学での学びをプレゼンしたり、和アンバサダーとして、学外からの海外者のアテンドなどを行ったりし、活発な活躍が見られた。
- ② (C) 英小コース独自の講義「海外実習プロジェクト」(カナダ、ビクトリア大学、およびカモーンソンカレッジ等)を2月実施した。この講義では、オンラインで、フィンランドの小学生25名への英語授業を実施したり、あべのハルカスキャンパスを拠点とした、神戸方面の「言語景観」のフィールドトリップを実施したりした。

2月(1か月)のカナダ教育実習には、学生2名が参加し、現地モンテッソーリ教育校で、中学校1年生50名に対して、CLILアプローチに基づく「漫画・アニメの秘密」の授業を英語で実施した。また、モンテッソーリの教育やカナダの学校教育について直接現地の公立教員から学ぶ機会を得た。現地公立小・中学校の視察を行い、カナダの公教育の良さに学んだ。

また、ベトナム教育実習には、英小からの参加は無かったが、教員らが教育学部全体から応募してきた学生らへの英語指導やストーリーテリング指導を行い、ベトナム国での授業実践を指導した。

- ③ (C) 個別にも留学を目指し準備する学生が見られるようになった。、カナダ、イギリス、アフリカ等へ短期留学を実現していた。
- ④ (C) iTalk 主催の国際交流プログラムに積極的に参加した。また、iTalk 主催の「和グローバルコンペ」には、英小から2チームが参加し、1チームがグランプリ

りを獲得した。また、学内主催の「プレゼンコンペ」にも1チームが参加し本選に出場した。学外のフィールドワークにも自主的に取り組み、英語をもちいたグループでの取り組みが盛んとなっている。

4-7. 地域連携・貢献

(C) 藤井寺市でらっこイングリッシュ（6月・2月）にボランティア参加

地域連携課の要請を受け、当コースの学生が積極的にボランティア参加。当初6月の1回の開催予定であったが、保護者や市生涯学習課・教育委員会から高評価で急遽12月にも追加実施、同市ALTと並んで本学の3年生によるブースを担当した。

5. まとめ

本年度は、グローバル社会に貢献する英語教員の21世紀型スキル、人間関係の構築力、英小コミュニティのお互いの尊敬と多様な価値観を認め合う、学び方を進めてきた。これらの取組に加え、カナダ・オーストラリア等に留学した学生ものべ、15名近くに上っており、国際社会における多文化共生社会を実感し、不確実性時代を生き抜く際の豊かな人間性の大事さを実感する学生も多くみられる。

1・2回生の大学基礎演習・教育基礎演習での、グループの協働や人間関係創り、講義などでの実践的フィールドワーク、現職教員の招聘による、最先端の小中、および高校の授業の体験、英語科教育法（I～IV）の具体内容の共有と系統性、地域貢献や海外実習等とおしたて、学生はその視野を拡げ、達成したいゴールを明確にしてきた。また、令和6年に向けて、教小コースの「英語プログラム」選択学生と、英小コースの学生の合同勉強会組織（EiBUD）が活性化し、4年間英語教育を学びつづける基盤が創成されつつある。今後は、この学びが、令和6年度入学の1回生との交流にも広がり、自己のキャリア形成へと繋がりを、実を結び、教職への確かな道筋になるように導きたいと考えている。

教育学部 教育学科 幼児教育保育コース

1. はじめに

本コースは、平成 31 年度学部改組に伴い新設されたコースであり、令和 5 年度末で開設後 5 年が経過し、昨年度完成年度を迎えたが、今年度入学者より「領域」に関する科目が設置されたことを受け、カリキュラムが変更された。新カリキュラムにおいても、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得に向けた養成を主とし、小学校教諭一種免許状の取得が可能である。コースの基本方針として、この 3 種の資格・免許取得を推奨し、コース運営を行っている。

入学定員 60 名に対し、令和 5 年度末の在籍学生数は、1 年次生 58 名、2 年次生 67 名、3 年次生 63 名であり、8 名のコース教員で運営を行っている。コース教員の専門分野は、幼児教育学、保育学、教育社会学、発達心理学、健康・スポーツ科学、児童福祉学、音楽教育学など多岐にわたり、それぞれの専門性を活かしながら保育者養成に従事している。

本コースは、以下の 3 つのディプロマポリシーを設定し、学生指導にあたっている。

1) 保育者としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもに応えることができる専門的知識および実践力、指導力を身につけ、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2) 保育者としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および保育者としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3) 変化する社会、保育施設等で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2. 大学基礎演習について

大学基礎演習は 4 年間の学びを豊かなものとし、大学全体やコースのディプロマポリシーを実質化する上で、極めて重要な科目である。本コースでは、60 数名の学生に対し、3 名の教員が担当者となり、1 クラス 20 数名による少人数授業を可能とし、授業内容によってクラス別／コース全体を使い分け、授業を展開した。

夏学期の大学基礎演習Ⅰ及び冬学期の大学基礎演習Ⅱの到達目標は以下のとおりである。

<大学基礎演習Ⅰ 到達目標>

- ① 大学での 4 年間の学びを理解し、自分自身の目標と見通しをもって学習をするための心構えをもつ。
- ② 大学で学ぶ上で必要なスキルと知識を習得する。
- ③ 幼児教育の現状と教員の仕事について理解する。

<大学基礎演習Ⅱ 到達目標>

- ①論理的に考えて発表したり、意見交流したりする中で柔軟に考える力を習得する。
- ②基本的な学びのルールを知る。
- ③将来の展望を持つ。

これらの到達目標を掲げた上で実施した、具体的な授業内容は以下のとおりである。

<大学基礎演習Ⅰ 授業内容>

- 第1回目：オリエンテーション・大学での4年間の生活を意識しよう
- 第2回目：大学での学びと生活 (1) クラス交流、履修登録の確認、IBU ネットの使い方
- 第3回目：大学での学びと生活 (2) PCをマスターしよう
- 第4回目：大学での学びと生活 (3) キャンパスツアー 大学を活用しよう
- 第5回目：大学での学びと生活 (4) 先輩から大学生活の話をお聞きしよう お困りごと相談会
- 第6回目：大学での学びと生活 (5) 高校と大学の違いを考えよう
- 第7回目：大学での学びと生活 (6) 担任との個別面談 大学生活をみつめよう
- 第8回目：大学での学びと生活 (7) 大学での学びを考える ―教職教育推進センターから―
- 第9回目：大学生としてのマナー講習 ―先輩と講師によるレクチャー―
- 第10回目：読み方 (1) 文献に触れる
- 第11回目：読み方 (2) 文献の読み方
- 第12回目：読み方 (3) 文献を使って交流しよう
- 第13回目：レポートの書き方 (1) レポートのルール
- 第14回目：レポートの書き方 (2) レポートの表現の実践
- 第15回目：どんな教員・保育士をめざすのかを考えよう

<大学基礎演習Ⅱ 授業内容>

- 第1回目：冬学期オリエンテーション
- 第2回目：キャリアデザイン (1) いい保育者について考えよう
- 第3回目：キャリアデザイン (2) いい保育者になるための学びとは
- 第4回目：キャリアデザイン (3) 先輩の話や模擬保育から保育者を意識する
- 第5回目：ハローナーサリー事前学習 (1) オリエンテーションと学びたい内容をとらえる
- 第6回目：ハローナーサリー事前学習 (2) 園の先生から現場の視点を学ぼう
- 第7回目：ハローナーサリー (1) こどもたちと出会おう
- 第8回目：ハローナーサリー (2) こどもたちを観察しよう
- 第9回目：ハローナーサリー事後指導：ハローナーサリーの学びの整理
- 第10回目：多様な教育の取り組みを聴く 幼稚園の園長先生をお招きして
- 第11回目：「読み」の交流 (1) ―専門文献の読みのレジュメ交流
- 第12回目：「読み」の交流 (2) ―専門文献の「読み」を深める
- 第13回目：「読み」の交流 (3) ―「対話型論証」を読み解き、自分の見解をつくる
- 第14回目：教育・保育という仕事について考えよう
- 第15回目：1年間をふりかえりとこれからの大学生活・実習などについて考える

令和5年度の夏学期はゴールデンウィーク明けに新型コロナウイルス感染症が第5類へと移行されたことから、授業運営に関してもコロナ以前の状況に徐々に戻りつつあった。大学基礎演習においても同様であり、グループワークや学生の活動を制限することなく実施することができた。授業内外における担当教員の細やかで丁寧な対応により、当初掲げていた到達目標は概ね達成できたものとする。特に、コースのディプロマポリシーのポイントの1つとなっている「他者と協働する」ことの具体的な取り組みについて進めていった。本コースの先輩による講話や交流、模擬保育の見学といったコース内の学生の縦の関係づくりなどを行った。この取り組みを進める際に教育専門演習（2年次配当）担当者と連携し、学生指導に当たった。これらの教育活動により、各回の学生のリフレクションでは学びが深化している様子が明らかとなり大変有意義な機会となったことが窺われる。

3. 授業相互参観について

令和5年度冬学期に実施した授業相互参観について、コース教員が設定した公開授業一覧を以下に示す。授業相互参観終了後には合評会を開催し、参加教員相互による授業運営の方法について協議を行った。今後も授業相互参観の機会のみならず、よりよい授業運営に向けて、コース教員間で情報共有を密に行っていきたい。

番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室
1	教幼	小磯 久美子	11月24日	金	5	保育内容理論と方法「環境」	4-207
2	教幼	吉田 康成	11月9日	木	3	運動基礎 II	サブアリーナ
3	教幼	田辺 昌吾	11月22日	水	2	保育方法論	6-354
4	教幼	鳥越 ゆい子	11月8日	水	1	保育内容総論	6-252
5	教幼	丹羽 智美	11月29日	水	1	子ども家庭支援の心理学	2-305
6	教幼	門谷 真希	11月28日	火	2	保育実践演習	小体育館
7	教幼	吉田 祐一郎	11月8日	水	3	社会的養護 I	2-209
8	教幼	矢倉 瞳	12月13日	水	2	教科内容論（音楽）	8-201

4. コース独自の取り組みについて

(1) ハローナーサリーについて

幼児教育保育コースでは「いい先生（保育者）」になることを目指し、4年間の教育活動を進めている。免許・資格取得に向けて定められる実習とあわせて在学期間の早期から子どもに関わる機会の提供に取り組んでいる。その取り組みの1つがハローナーサリーである。ハローナーサリーでは大学基礎演習Ⅱ（1年次冬学期配当）の授業時間を利用し、大学に隣接する幼保連携型認定こども園の四天王寺悲田院こども園にクラス別で訪問している。訪

問前には事前学習では教員による指導とあわせ、以前にハローナーサリーに参加した4年生よりハローナーサリーの参加の意味についての経験談を聴く機会を設けた。併せてこども園の主任教諭を招聘し、園の概要などを中心に参加者に講話していただき、その後にこども園に訪問した。

新型コロナウイルス感染症の流行以前は、園内において園児との関わりも行っていたため、今年度は従来通りの形での参加となった。また、訪問後には事後指導としてハローナーサリーでの学びを整理する機会を設定した。学生からは、講義では学ぶことのできない現場での経験から、4年間の大学生活に向けた自身の意欲を持つことができたなどの感想が寄せられているなど、本取り組みの成果が確認されている。

(2) 科目「インターンシップ」「保育インターンシップ」の授業運営

「インターンシップ」「保育インターンシップ」は新カリキュラムにおいて新設されたコース専門科目であり、2年次(3・4セメスター)配当の科目である。コースの全教員が「インターンシップ」(夏学期開講)または「保育インターンシップ」(冬学期開講)の担当者となり、週1回、保育所等の保育現場でインターンシップを行うとともに、定期的にインターンシップの振り返りを行う授業である。

カリキュラムに組み込まれてから昨年度まで保育現場、教育現場においてインターンシップを行うことが困難な状況であったが、令和5年度は前年度までは実施することができなかった当初予定されていた授業内容の実施が可能となった。まず、履修者それぞれが、自分たちは「インターンシップ」の授業で、どのような内容を学びたいのかについて主体的に考え、受講者間で議論した。その上で、希望する施設を選択した。その後、自ら希望園(所)に依頼し、学びたい内容について説明する機会をいただき、インターンシップの受け入れに関する可否を尋ねた。承諾いただいた園(所)には、5月中旬から7月上旬まで、毎週金曜日に(8~9週間)終日インターンシップとして保育に参加させていただいた。

数回に1度は全体で集まり、学びを共有した。その際、自身の目標を見直すなど、インターンシップをより有意義なものにするためにはどうすればよいかについて考え、各自取り組んだ。質問や疑問についても協働して調べたり、教員からアドバイスをもらったりすることを通して考える機会となった。

インターンシップ終了後にプレゼンテーション形式で報告するとともに、他者の報告に対して自分の経験を照らし合わせて、質問や感想を述べた。学生のアクティブラーニングを促すことができ、またコースの全教員が担当者であったことから教員間の協働も促されることとなった。本授業では可能な限り学生が主体的に自身のインターンシップに関して企画し、実行するようにした。授業内容だけでなく授業の運営に関しても学生の主体性が発揮される場となった。次年度以降にも今年度の授業運営の経験を生かしていきたいが、冬学期において「保育インターンシップ」の履修を希望した学生がおらず、履修指導やカリキュラムの在り方については検討する必要があると考える。

(3) 教育基礎演習における園児を招聘しての保育計画

冬学期の「教育基礎演習」では、3園のこども園・保育園・幼稚園より5歳児の園児を本

学に招き、2年生による保育実践を行った。直接園児と触れ合う機会を設けたことで、より教育保育の現場や子どもについて知りたいという学生のニーズに応えられると共に、2年生は実施に際してグループで役割分担を行い、協働する経験を重ね学生同士の協調性が高まった。専門的知識・技術を学ぶだけでなく、個人の考えを他者と共有し対話を重ねる機会となった。また、1年生は2年生の保育参観を行った。学生のニーズを踏まえた授業改善を行うことで満足度の向上が望めたものと考えられる。

(4) 教育実習、保育実習に係る情報共有

本コースでは、年4回の実習が実施される(4セメ2月「保育実習Ⅰ(保育所)」、5セメ8月「保育実習Ⅰ(施設)」、6セメ9月「教育実習(幼稚園)」、6セメ2月「保育実習ⅡまたはⅢ」)。令和5年度は新型コロナウイルス感染症の影響が少なく、従来形で実習を行うことが可能となった。コロナ禍において培われたコース教員間での情報共有を迅速にかつ密に行う工夫(コース会議、メール等において情報を共有すること、Teamsを活用すること)は、今年度の実習においても大変有効であった。実習指導担当教員が中心となり、きめ細かな情報共有を行うことで、日程変更等はあったものの、全般的に無事実習を終えることができおり、個々の学生理解も深まったように思われる。また、実習先の保育現場とも密な連携を取ることで、現場と協働した実習が実現できている。

5. その他(今後について)

教育学部では令和6年度に向けて改組が計画されている。幼児教育保育コースにおいてもこれまでのカリキュラムを基本としながらも改組に向けた準備を進めている。

本コースの教育研究上の目的にある、子どもに応えることができる豊かな人間性と幼児教育・保育に関する専門的知識及び実践力、指導力を持ち、生涯にわたり学び続ける優れた保育者の育成を進めるためにも、更なる質の高い教育活動を進めることが求められている。

このことから、学生の学修内容・到達状況も踏まえた学内外での教育活動を充実させることが重要である。そのためにもコース教員が一丸となり教育活動を進めることができる体制を構築していきたい。その上でこれらの教育活動の実施により入学者の確保、個々の在学生に対するきめ細やかな指導の充実、就職を見据えた出口保障を確実に実現いくことができるよう、FD活動の活発化に向けた取り組みや、関係する各部署との有機的な連携を図りたい。

教育学部 教育学科 保健教育コース

1. はじめに

教育学部教育学科保健教育コースは、児童生徒の健全な発育発達と心身の健康の保持増進に関する専門的な知識・技能および教育現場に求められる実践力・指導力を有し、高い人格と倫理観、豊かな教養を備え、時代の要請に応える優れた養護教諭の養成教育を目的としている。本コースでは、養護教諭養成を主軸とした教育プログラムを展開しており、併せて、小学校教諭1種免許状が取得できる。

学生にとっては4年間を通じて、多忙な学習スケジュールとなるが、大学での学びの質をより向上させるため、後述する保健教育コース独自の教育活動も実践しながら、充実した魅力ある「養護教諭・小学校教諭養成課程」の構築に努めている。また、定期的にコース会議を行い、講義の進行状況、情報通信技術（Information and Communication Technology：ICT）教材を用いた講義方法の有効性、学生による授業評価、教員の教育・研究活動状況等について討議を重ね、教員の資質の維持向上も図っている。

昨今、多様な健康課題と複雑な家庭・社会環境を背景に持つ児童生徒が増加し、児童生徒の健康管理に加え、心身のケアを担う養護教諭の職務及び保健室の果たす役割が、以前にも増して、重要視されている。コース教員は、定期的に国内外の学術集会に参加し、「チーム学校」の一翼を担う養護教諭養成に関する最新情報を収集するとともに、時代のニーズに応じた教育プログラムの導入と実践、省察と改善に努めている。

2. カリキュラムの概要

1年次は、教育実践理解期にあたり、教育者として必要なコミュニケーション能力や表現力及び幅広い教養を身につけ、教職への関心を深め、意欲の向上を図る。主な専門科目として、「養護概説」、「学校保健」、「解剖生理学」、「学校看護学」、「栄養学」等を開講し、養護教諭の職務遂行に必要な知識と技術を習得する。

2年次は、基礎的教育実践力養成期にあたり、「学校救急処置」、「公衆衛生学」などの専門科目を通じて医科学的知識の更なる充実を図り、「精神保健」、「健康相談」、「小学校専門科目・教科教育法」を通じて、子どもの学習能力・心身の発育発達と小児期・学童期・思春期特有の心身症及び心のケアについて学びを深める。また「臨床看護学演習」では、医療機関における機能と役割を理解し、医療・看護の最新の知識を習得するとともに、学校と医療機関との連携を理解し、生命と健康の尊さを学ぶ。本演習には、医療機関での実習が含まれ、令和4年度臨床実習対象医療機関は、四天王寺病院、藤井寺市民病院、城山病院、東住吉森本病院であった。

3年次は、発展的教育実践力養成期にあたり、「微生物学」、「薬理学」、「保健統計学」などを受講し、学校における保健指導や健康教育に必要な知識と技術を養う。「養護実習」では、教育現場での養護教諭の職務と役割、保健室経営および児童生徒の健康課題、保健組織のあり方等を理解するとともに、健康診断や健康相談、保健教育について学習し、養護教諭としての総合的な教育力・使命感・責任感を身につける。さらに、「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、養護教諭が行う調査・研究方法の基礎を学び、自ら研究課題を見つけ、意義を見出し、

積極的に研究心を高めることにより、次年度の卒業研究に繋げる。

4年次は、研究・研修期にあたり、「教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」で、大学生活の集大成として、卒業研究に取り組み、自らが立てた仮説を検証するため、収集したデータを多角的に分析し、成果をまとめ、結論を見出し、卒業研究としてまとめる。「教職実践演習（養護教諭）」では、大学4年間で学んだ知識と理論および養護実習等で修得した教科指導力や保健指導力並びに健康相談や救急処置法の技能と方法を統合し、使命感や責任感に裏打ちされた学識と技能、実践的な指導力を有する養護教諭としての資質の構築とその確認を行う。

3. 大学基礎演習

1年次に開講する大学基礎演習Ⅰ・Ⅱの目標と主な内容は下記の通りである。

(1) 目標

<大学基礎演習Ⅰ>

- ① 本学に所属し、学ぶことの意義を理解するとともに、今後の学生生活に対する自己課題を自覚する。
- ② 大学生として、また教育学科保健教育コースに所属する学生として、教職を目指すための学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。
- ③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。
- ④ 社会に生きる人間として、教員や友人との信頼関係を築く。

<大学基礎演習Ⅱ>

- ① 本学・本学科に所属して自ら学ぶ意義と課題を把握する。
- ② 社会人および教員の準備段階として位置づけ、大学生および教育学科保健教育コース所属の学生としての学びに必要な基礎的知識・技能・態度を身につける。
- ③ 自分の将来を社会との関係で考え、教職への、社会人への問題意識を持つ。
- ④ 自分の考えを発表し、お互いに討論する中で教員や友人との信頼関係をつくる。

(2) 演習の概要と指導上の工夫

①ICTの積極的活用

IBUnet の使用方法全般の解説と、「課題管理」を使って、レポート提出および課題への取り組み等ができるように指導した。また、「授業資料」にアップロードされた電子媒体の演習資料のダウンロードの方法、提示された URL へのアクセス、オンデマンド教材の利用方法等についても解説した。加えて、「クラスフォーラム」や「Q&A」から質問やディスカッションをする方法についても説明をし、IBUnet の積極的な利用が専門知識習得の一助になることも併せて指導した。

②図書館活用法

図書館の利用については、図書館課課員による図書館ツアーと図書・文献検索オリエンテーションを行った。本演習では、OPAC を用いて、本学蔵書の中から興味関心のある本を検索し、実際に数冊借りて読むという実践を行った。また、各授業でのレポート・論文作成に

必要な論文・資料収集を円滑に行うため、CiNii、Medical Online、EBSCO host、医学中央雑誌等、学術雑誌検索法についても習得してもらった。一連の図書館活用法を学んだ後、コース内でビブリオバトルを行った。

③学外実習

大学基礎演習Ⅱ受講生が、四天王寺小学校にて教育現場での初めての实習となるハロースクールに参加した。受講生は、少人数のグループに分かれ、半日見学実習を行った。また、本コース卒業生が、同小学校に養護教諭として勤務しており、先輩から養護教諭の職務の実際と私立学校における保健室運営の特徴等についても学びを深めることができた。

④課題発表

今年度の大学基礎演習では、「自己紹介」、「夢に向かって（希望自治体の教員採用試験内容の説明等、現時点での進路に関する発表）」、「課題図書『子ども百景』からの学び」について、発表してもらった。発表の際、使用したスライドは独創的且つ完成度の高いものであった。また、回を重ねるごとに、学生は人前で話すことに慣れ、さらに聴衆をひきつける発表技法についても探求した上で発表に臨んでいた。

⑤キャリア教育：教員採用試験合格体験記

今年度の本コース教員採用試験現役合格者数は、養護教諭1名（大阪府1名）、小学校教諭（大阪市1名）であり、「教員採用試験現役合格体験記」と題した講演会を実施した。教員採用試験に向けての対策だけでなく、本学で4年間をどのように過ごしたかについて詳細に語ってもらった。また、現役合格を果たした2名は、養護実習、教育実習（初等教育）、加えて、学校ボランティア活動にも積極的に参加しており、保健室と養護教諭の職務、養護教諭免許を有する小学校教諭の役割、学級経営、養護教諭と担任教員との関係、児童生徒の健康事情や取り巻く社会・家庭環境等、多くを学んでいた。1年生は、先輩の体験談を聞くことで、養護教諭、小学校教諭になるという目標が明確化され、学習意欲が更に高まったと思われた。

4. 授業相互参観について

令和5年度冬学期に実施した公開授業の実施日時、担当者と担当科目は下記の通りであった。授業参観終了後、合評会を実施した。

<岡本啓子>

日時：令和5年12月1日（金）2限 6-212教室

科目：養護概説（教育学部教育学科保健教育コース専門科目）

内容：本授業では、養護教諭の機能についての特徴と目的、専門性と役割について概説した。また、最近の子どもの心身の特徴に対応できる養護教諭像を認識し、健康診断および保健調査の方法、解析、指導について学び、保健室を拠点にした健康管理と子どもの疾病予防および保健指導に必要な学力と技術を習得することができるよう、グループ活動を取り入れた

授業を展開した。受講生全員が積極的に討論に参加し、学習態度は良好で、本授業での学習目標は達成されたと評価する。

<久保正二>

日時：令和5年11月16日（木）3限 6号館353教室

科目：疾病と治療Ⅱ（看護学部看護学科専門科目）

内容：臓器移植（心臓、肺、肝臓、腎臓、膵臓、小腸）、脳死、生命倫理について解説するとともに、国内外における臓器移植の現状と課題、臓器移植後の妊娠出産に関する事例についても紹介した。また、講義担当者（久保正二）が作成した臓器移植ガイドラインについても説明を加えた。授業の最後に確認テスト（小テスト）を行い、授業の理解度を確認した。テストのスコア分析より、受講生が本授業内容を概ね理解していると判断され、学習目標は達成された。

<仲谷和記>

日時：令和5年12月11日（月）1限 6号館302教室

科目：教育基礎演習Ⅱ（教育学部教育学科保健教育コース専門科目）

内容：本演習では、『学生のレポート・論文作成トレーニング 改訂版: スキルを学ぶ21のワーク』（桑田てるみ著、2015）をテキストとし、次年度から始まる「卒業研究」も視野に入れ、前回の演習に引き続き、「論文作成基礎知識」について解説をした。各自、熱心に課題に取り組み、また、必要に応じて、グループ・ディスカッションに参加するなど、養護教諭・健康科学・保健教育領域の研究に取り組む意欲も向上したように感じられた。提出された課題を評価し、本演習の教育目的が達成されたことを確認した。

<松本珠希>

日時：令和5年12月6日（水）4限 6号館304教室

科目：公衆衛生学（教育学部教育学科保健教育コース専門科目）

内容：本授業では、「地域保健活動と学校保健との関連を探求する」ことを目的に、「地域保健研究発表」を実践した。具体的には、受講生全員が、調査対象地域を選び、その地域の保健活動の特徴、各地域保健活動が学校保健に果たす役割、市町村民の安全を守る地域の取り組み、地域創生、各地域の抱える課題等を調べ、パワーポイントで作成したスライドを用いて7分間で発表をした。発表後は、質疑応答を重ね、ループリックをもとに自己・他者評価を行った。加えて、評価表をもとに、自己の発表を振り返るとともに、地域保健研究から、養護教諭が実践する学校保健活動・教育についても考察してもらった。受講生は、積極的に討論に参加するなど、学習態度は良好で、本授業で取り上げた領域に関する知識の理解と習得がなされたと評価する。

5. コース独自の取り組みについて

(1) 「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」

①目的

保健教育コースの「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」（専門ゼミ）では、下記に示す4領域のいずれかを選択し、2年間に亘り、各領域の専門知識を習得するとともに、調査研究能力を養うことを目的としている。

- a) 学校保健看護学研究（担当：岡本啓子）：多様性が尊重される中、安全・安楽に生活を送るための支援が必要とされています。多様な健康ニーズを抱える子どもに対応できる養護教諭の専門性について考えます。本演習では、「疾病・障害がある子どもの支援」「発達障害がある子どもの支援」「チーム学校による支援」「学校における医療的ケア」「学校における危機管理」など、一緒に考察していきます。
- b) 小児保健研究（担当：久保正二）：小児疾患には遺伝子異常に基づく疾患や先天性疾患が含まれ、様々な治療が必要となり、時には障害を抱えることもあります。その際には家庭、学校、医療機関や地域の人々と連携して疾患の治療とともに成長を見守る必要があります。小児疾患について様々な観点から学習していきます。
- c) 健康科学・社会医学研究（担当：仲谷和記）：我が国の青少年を取り巻く社会環境、生活環境などの変化に伴い、家庭や学校、地域社会における健康課題は多様化、深刻化していると言われています。本演習では、そういった健康課題を様々な角度から学習していきます。
- d) 公衆衛生学・Women's Health 研究（担当：松本珠希）：女性活躍推進法が制定され、日本でも「女性の活躍」が謳われて久しいです。女性の人生の選択肢は広がりましたが、それに伴い、女性の心身症（心のからくりが関与して起きる体の病）もまた多様化、複雑化した感は否めません。本演習では、女性の長い一生の各ライフステージ（小児期・思春期・性成熟期・更年期・老年期）における「心と身体の相関」に関連する諸問題を、bio-psycho-social（生物学・心理学・社会的）な観点から多面的に考察します。

② 主な内容

- a) 各専門ゼミの卒業研究作成マニュアルを作成し、そのマニュアルを基に、卒業研究への心構え、卒業論文の作成方法、年間調査研究計画の立て方、教員採用試験及び就職活動との両立の仕方、過去の卒業研究の事例等の内容を含めたオリエンテーションを行う。
- b) 各研究領域の学術論文（原著論文・総説論文・症例研究報告）を読み、研究内容を理解するだけでなく、方法論、結果の解釈の仕方を学び、また、ゼミ内で討論を重ねることにより、各研究領域への理解を深める。
- c) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、各種研究方法（質問紙調査、インタビュー調査、フィールド調査、行動観察、実験、実践研究、資料分析、文献研究、教材研究・教材制作）の実際について学ぶ。
- d) 文献検索ツールの使用、図書館利用のコツ、公的資料の使い方等、文献収集方法について学ぶ。
- e) 収集したデータの分析及び解釈の仕方、統計処理、図表の作成等の演習を行う。

- f) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、卒業論文の構成（要約・諸言・方法・結果・考察・結論・謝辞・引用文献）を学ぶ。論文作成開始後は、文章の点検及び推敲の仕方についても、各専門ゼミで指導する。
- g) 定期的に研究発表（卒業研究構想発表と現況報告）を行い、4年次の最後のゼミにて、卒業研究発表会を行う。
- h) 学術研究の実際を学ぶため、学会や研究会等に積極的に参加する。

③ 卒業研究発表会：4年間の学びの集大成

12月4・11・18・25日2限開講の教育専門演習Ⅱ・教育専門研究Ⅱを活用し、「卒業研究発表会：4年間の学びの集大成」を開催した。4年次生31名が各卒業研究を7分間で発表をした。3年次生と教員はルーブリックを用いて評価をし、各回の優秀賞を選出した。どの演題も、心身の健康とその関連要素について、養護教諭の観点のみならず、多角的に調査研究および考察しており、非常に興味深く、心に響く内容であった。令和2年度に入学した4年生は、Covid-19の影響を受け、多くの制約もあったが、本発表会を通して、4年間の学びの集大成としての調査・研究成果を、ともに学ぶ仲間、3年次生、コース教員間で共有することができ、有意義な時間を過ごすことができた。

(2) 卒業生と在学生在を繋ぐ絆プロジェクト：現職養護教諭から学ぶ

大野紗華先生（四天王寺小学校養護教諭：令和4年3月卒）、齋藤（安本）祥子先生（大阪府教育センター附属高等学校養護教諭：平成24年3月卒）を招いて講演会を開催し、健康診断、健康相談、応急処置、学校保健活動等の実践から、学校における保健室の機能と養護教諭の役割の実際を学び、理解を深め、意識向上への動機づけとした。また、養護教諭になるための心構えや勉強方法等、大学4年間の過ごし方等についても探究することができた。

(3) 養護教諭教員採用試験対策講座

3年生を対象に、希望受験地をもとに、都道府県別のグループを編成し、受験地の出題傾向を考慮しながら、教員採用試験対策講座を実施した。筆答試験対策の主な内容は、「学校保健の構造・学校保健計画」、「からだのしくみと働き」、「学校環境衛生」、「学校給食」、「健康診断」、「健康観察・健康相談」、「こころの健康」「学校安全・応急手当（救急処置）」、「感染症・疾病予防対策」、「保健室の役割・養護教諭の職務」、「保健教育・学習指導要領」、「事例・対応」、「法規・法令」、「答申・時事問題」等であった。本講座では、過去に出題された問題や実践問題を活用し、詳細な解説を加えることで、各領域の知識の定着を図った。二次・三次試験対策では、出題が予想される問題について解説と実技訓練指導を行い、併せて、模擬（集団）保健指導と授業、面接指導を行った。加えて、最近の学校保健の動向、コロナ禍における養護教諭の職務と保健室の役割、児童生徒の心身のケア等について討論をする機会も設け、学生たちの意見交換を通して思考力と判断力の育成も図った。

本年度の養護教諭教員採用試験現役合格者は1名（大阪府）であった。伝統ある養護教諭養成機関として、有能な養護教諭を育て教育現場に確実に送ることこそ、本コースの使命と

もいえる。今後は、養護教諭としての現場即戦力を養うためにも、救急処置に関する実例や判例についての学習を強化し、学校看護技術や保健指導などの実践力をさらに積む時間も確保するなど、より一層の教育プログラムの改善と発展を図りたいと考える。

(4) 高大連携事業

① 高大連携校 4 校における定期健康診断の補助実習

本実習は、学内演習（学校看護学や臨床看護学演習など）、臨床実習、養護実習を経験した 4 年次生を対象に、高大連携事業と教職実践演習（養護教諭）の一環として行われるものであり、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学ぶことにより、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることを目的としている。令和 5 年度は、大阪府立高校 4 校（富田林高等学校、懐風館高等学校、藤井寺高等学校、長吉高等学校）にて実施した。本実習参加学生は、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学び、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることができた。

② 高大連携事業（大学授業体験出張講義）

平成 25 年度より、大阪府立河南高等学校の e（エスペランサ）コースで高大連携事業の一環として、教育学部を目指す生徒を対象に授業を行っている。本授業（担当者：松本珠希）では、我が国における養護教諭（保健室の先生）の歴史、諸外国の養護教諭、養護教諭の存在と役割、保健室の機能、子ども達を取り巻く現代的健康課題など、多岐に亘り、詳しく解説した。保健室は、けがをしたり気分が悪くなったりした時に処置をしてもらうところだが、心身の健康について学ぶ学習室でもあり、最新健康情報の発信基地でもある。朝食欠食や夜更かし、運動不足、喫煙や過剰な飲酒等、不健康な生活習慣が心身の健康にどのような悪影響を及ぼすのか解説するとともに、児童生徒の心に響く健康教育（保健の授業づくり）についても紹介した。

(5) 学外研修

① 日本養護教諭養成大学協議会への参加

令和 5 年度日本養護教諭養成大学協議会は、以下のプログラムに沿って、Zoom によるオンライン形式で開催され、岡本啓子が代表評議員として参加し、総会の議決にも関わった。

日時：令和 5 年 9 月 8 日（金） 12 時 30 分～16 時 30 分

<プログラム>

1. 総会：12 時 40 分～13 時 40 分

2. 講演①：13 時 50 分～15 時 05 分

文部科学省初等中等教育局 健康教育・食育課健康教育調査官 松崎 美枝 氏

テーマ：「文部科学省からの最新情報」

講演② 15 時 15 分～16 時 30 分

文部科学省総合教育政策局教育人材政策課 教員免許・研修企画室長 樫原 哲哉 氏

テーマ：「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方について

経営学部 経営学科

1. はじめに

経営学科では、大学4年間の学びを支え、就職活動に求められる基礎学力の向上からキャリア形成までを視野に入れ、卒業時点において有意な人材として社会からの評価を得ることができる能力・知識・スキルが習得できることを目標として科目を配置している。本学科の授業科目は、経営学・法学の基本を学科共通科目として開講し、基本となる共通科目から専攻ごとの専門科目へと無理なく学び、特色を活かしてそれぞれが目標とする分野の専門知識を学年の進行に応じて深められるように科目を配置している。

平成28(2016)年度に専攻を分離した後、令和2(2020)年度にカリキュラムを見直し、令和5(2023)年度に完成年度を迎えた。公共経営専攻は、専門的知識を効果的に修得して、将来、倫理観を備えた公務員となって社会貢献することが期待できる人材を養成し、毎年、安定して公務員を輩出している。また、企業経営専攻は、希望進路に必要な専門知識を習得し、キャリア目標に必要な資格試験に挑戦・合格するための学びに加えて、キャリアに直結するインターンシップを体験できる機会を設け、さらに模擬就活まで体系的なキャリア支援を徹底している。

その結果、公共経営専攻において、令和元年度から令和5年度までに118名(国家公務員5名、地方公務員91名、公安職22名)の公務員試験の合格者を輩出することができた。公務員試験に対応する指導として、後述するように、出願のエントリー手続き前の面談から最終面接に至るまで、個別対応で寄り添う支援をする一方、学生も、長期間、受験を続けてきた成果である。企業経営専攻では、授業の特色に応じてアクティブラーニングを積極的に導入するなど、多様なアプローチで学生の学びを支援する体制を整え、成功経験を重ねながら能力開発が促進できるように、「学科独自の取り組み」の機会を多様に設けている。

また、学科の特徴のひとつである特待生制度(奨学金制度)も定着し、上位で入学した不本意入学生の退学予防とモチベーションの維持として機能し、公務員や組織のリーダーとして活躍できる人材、および、起業家などの輩出に寄与していると考えられる。

さらに、学生には、多様な挑戦の機会を設け、段階的にできることを増やすことによって、学生のやる気を引き出し、成功体験を積む機会を提供する環境づくりとして、経営学科が令和5年度に取り組んできた特色ある授業科目および取り組みは以下のとおりである。

2. 大学基礎演習について

大学基礎演習Ⅰでは、「大学生としての基本を学ぶ」、大学基礎演習Ⅱは「大学生として学内外での学びを深める」をテーマに、学科専任教員の全身体制でクラス別授業、全体授業を効果的に行っている。授業の実施にあたって、学生に関する情報は学部会議やメール等を活用して教員間で共有しながら進めている。公共経営専攻、企業経営専攻の両専攻の学生が、進路に対する視野を広げ、積極的にコミュニケーションできる環境づくりに努めた。

大学基礎演習Ⅰは、全体での対面による履修指導を実施し、ノートPC必携化に対応したPCの操作説明等も取り入れて万全を期した。令和5年度は『大学生学びのハンドブック』(世界思想社編集部編)をテキストとして使用し、「テキスト編」のシリーズとして文章の書き

方、レポートの書き方、ノートの取り方など、初年次に大学での学びのリテラシーの向上をはかった。さらに、同テキスト「学生生活編」として「個人面談」、「キャンパスツアー」により担任教員、クラス学生との関係性の構築に注力するとともに、マルチ商法等の被害防止、卒煙プログラム、コミュニケーションゲームなどを取り入れ、学生一人ひとりの大学での学びや学生生活の意義等を紹介し、考え、実践できるよう配慮した。また、キャリア関連科目との連携強化を意図した「キャリア編」も継続して、低年次インターンシップにつなげながら、個々のキャリア意識の向上を図った。

大学基礎演習Ⅱでも「個人面談」を実施し、クラス別授業と全体授業を織り交ぜて「テキスト編」を継続し、大学での学びが深められるよう体系的な学習を行った。また、経営学科が毎年、恒例で実施しているビジネスプランコンテストへのアイデア発想、ビジネスプランづくり、各クラスでのプレゼンテーションの経験により、各自のノート PC を駆使し、特徴ある PPT を作成し、ICT スキル向上の機会とした。また、「キャリア編」では資格検定試験紹介として「検定試験体験」をしたり、多様なインターンシップを紹介する特別講座を設けたり、4年生の公務員合格・就職内定体験談を聞く機会を設けるなど、多彩なメニューを企画・実施している。

なお、大学基礎演習の振り返りアンケートでは、1年間の大学での学びについての総括の結果、「ビジネスプランのプレゼンテーション」「先輩による就職活動体験談」「キャンパスツアー」が、例年同様、学生間の相互理解、キャリア意識向上、今後の就職活動への興味・関心につながったようである。このふりかえりには、学科内で情報共有することにより、今後の大学生生活の満足度を高める改善につなげ、次年度も個別クラスと合同授業を併用する。

3. 授業相互参観について

令和5（2023）年度は、以下のとおり、概要にあげた内容で授業参観を実施した。

学科選抜科目	概要	参観日時・場所	合評会日時・場所
① 公務員特別演習Ⅱ（浅野）	グループワーク2 （スポーツ振興）	11月21日（火）1限 6-354 教室	授業終了後、同教室にて
② アントレプレナー論（天野）	アイデアから、ビジネスプランの作成	11月10日（水） 5限 2-209 教室	授業実施後、実施教室にて
③ 経営学基礎Ⅱ（伊藤）	ブランドに関するワークとその応用・実践知識	11月20日（月） 3限 2-205 室	授業終了後、同教室にて
④ 商取引法（霍）	企業の取引活動と商法について解説・検討	11月19日（金） 1限 4-206 教室	実施後、同教室にて行う
⑤ フランス語Ⅱ（加藤）	条件法現在、現在分詞	12月15日（金） 1限 4-416 教室	実施後、実施教室にて
⑥ FPⅡ（木村）	相続・事業継承の基礎知識	11月24日（金） 5限、4-262 教室	実施後、教室内にて行う

⑦ 憲法 I (高)	法の下での平等・家族の中の 人権問題	11月10日(金) 1限 5-302 教室	実施後、実施教室 にて
⑧ 民法IV・契約法 (後藤)	民法の契約法に関する授業・復 習問題演習とその解説	11月10日(金) 1限 5-210 教室	実施後、当該教室 内で
⑨ マーケティング II (隅田)	企業によるマーケティング 戦略の概要と応用	12月20日(水) 5限・4-414 教室	実施後、実施教室 にて
⑩ キャリア演習 III (富田)	マナーと人間関係	11月17日(金) 4限 4-314 教室	実施後、実施教室 にて
⑪ 商業簿記 II (原田)	本支店会計の B/S および P/L の作成	12月7日(水) 1限 6-354 教室	実施後、実施教室 にて
⑫ キャリア演習 III (東野)	ビジネスコミュニケーションを学ぶ	11月30日(火) 2限 2-205 教室	実施後、実施教室 にて
⑬ マクロ経済学 (福田)	IS-LM 分析	11月8日(水) 1限 4-214 教室	実施後、実施教室 にて

上記のとおり、授業参観を行った。経営学科の場合、教員一人が担当する授業や学生数が多いため、それぞれが担当している授業の合間に授業参観することは厳しい状況である。今後、教員を補充するなどして、時間を確保できるようにしていきたい。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 特待生制度（経営学部総合奨学金制度）について

両専攻において、学生の学習意欲を高め、将来の目標が達成できる経験を増やすために各専攻、成績優秀者 1 学年 12 名（4 学年計 96 名）を特待生とする経営学部総合奨学金制度を設けている。1 年次の特待生は一般入試前期日程（チャレンジ試験を含む）の成績により決定するが、対象となる上位者は第一希望大学の合格により本学の入学を辞退するため、令和 5 年度（2023 年度）も対象者の人数は定数に満たない。

2 年次以上については、公共経営専攻は成績評価 GPA に加えて公務員試験の模試の成績等を評価し、企業経営専攻は GPA に加えて各種資格検定の合格実績や、学部で取り組む地域連携活動などの学内外で行っている各種取り組みなどを評価している。特待生に選抜されると、学業はもちろんのこと、それ以外の活動等にも積極的に参画しようとする姿勢が見受けられる。特待生に選ばれた学生は、経営学科学生の模範として学科を牽引する役割であることの自覚をもって、他者を巻き込み課題解決に向かって協働しながら成長してくれることを期待している。

(2) キャリア演習 I・II

就職力をはじめとする下記に掲げる 4 つを目的とし、外部教育機関と連携して、「キャリ

ア演習Ⅰ」「キャリア演習Ⅱ」を令和 5（2023）年度も 2 年生の必修科目として実施した。

- i. 企業経営専攻では就職試験で多くの企業が利用する SPI 試験、公共経営専攻では公務員試験の教養試験への早期対策および早い段階から就職に対する認識を学生に促すこと。
- ii. 大学の講義をより円滑に履修するための基礎学力の向上。
- iii. 2 年次学生の講義出欠状況・講義中の態度の把握、専門演習ゼミ選択時に備えた学生状況全般についての把握。
- iv. 教員（担任）と学生の円滑な関係の構築、face to face による学生指導の機会の確保。

① 公共経営専攻

東京アカデミーと連携し、一般教養(数的処理・社会科学・人文科学・自然科学)の講義を行っている。これは 1 年次の公務員講座の内容と、3 年次の実践的な講座の内容を架橋するもので、公務員を目指す上で重要なものである。キャリア演習Ⅱでは、2019 年度から 2 クラス（担当者 2 名）に分け、一般教養に関する学習をサポートする体制を強化している。

② 企業経営専攻

2 年次に「キャリア演習Ⅰ」（夏学期：言語分野）、「キャリア演習Ⅱ」（冬学期：非言語分野）の講義を行っており、初回授業にプレテスト、最終授業にファイナルテストを実施している。2023 年度の「キャリア演習Ⅰ」のプレテストの平均点は 49.5 点、ファイナルテストの平均点は 74.9 点となり、平均点が 25.4 点アップした。「キャリア演習Ⅱ」においてもプレテストの平均点は 42.2 点、ファイナルテストの平均点は 60.0 点で 17.8 点アップし、学修の成果が認められた。

効果的に学修を進めるために、2022 年度より講義実践上の配慮（小テストの実施、解答テクニック指導、視覚情報教材の工夫）をさらにきめ細やに行ったが、「キャリア演習Ⅱ」（非言語分野）では学生の理解度に二極化が進んでいることに鑑み、今後、クラス分けや授業前の事前指導などを念頭に学生のフォロー体制を強化する予定である。

(3) キャリア演習Ⅲ

企業経営専攻 3 年次で全員が体験する「インターンシップⅠ」に向けて、事前学習として 2 年次にビジネスマナーの習得に加え、日常生活の中で約束事を守ること、自己管理すること等を徹底指導している。また、3 年次の 6 月に授業内容の習得状況を確認するため、ビジネス実務マナー検定試験の全員受験を課して合格を目指し、授業で受験対策も行っている。

2023 年度は、毎回の授業内での目標の設定と振り返りをさせ、フィードバックも行った。授業実施後の感想では、例年どおり「この授業を受けて、目標を立てることの重要性を理解できた」「書くことを通して表現力向上に役立った」という前向きな意見や、「知らなかったことや勘違いしていたマナーを正しく知ることができてよかった」という意見が多かった。また授業として、パブリックスピーチ、グループワーク、グループディスカッションを多く取り入れたが、「最初は嫌だったが、慣れるとコツがつかめて良かった」と学生の成長を確認することができた。

(4) オールインターンシップ

本取り組みは、「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」と続く

必修科目で構成しており、3年生全員が実際に就業体験をするキャリア科目の授業である。授業では、事前学習（各種提出書類を書くための実践的指導を含む）を行い、3年生夏季休暇中に就業体験を行う。3科目を受講することで仕事理解と将来の就職活動に向けてのキャリア形成推進となる重要な位置づけとなっている。5日間から10日間インターンシップについて、2023年度も職場で新型コロナウイルス感染が発生したため延期した企業があったことに加え、実施時間を確保するために複数の企業、団体でインターンシップに参加した学生もおり、夏季休暇中から10月末日までの期間となった。

当初就職に意欲的でなかった学生も、この経験をとおして、自己理解や企業理解を深め、就職をより身近に意識し、仕事について主体的に学ぶ機会となり、例年、多くの学生にとって就業体験の経験が将来の職業選択に向けて大きな役割を果たしている。

(5) キャリア演習Ⅳ（模擬就活）

本授業は、「キャリア演習Ⅰ」、「キャリア演習Ⅱ」「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」の集大成として、2021年度より導入したプログラムである。例年3月から本格的にスタートする就職活動に向けて、企業へのアプローチから選考までのプロセスを体験する。本プログラムに、SPI試験受験や合同企業説明会を組み込み、模擬体験するグループディスカッションや面接では面接官に企業の人事担当者を起用している。学生はステップごとに、教員、企業面接官からフィードバックを受け、学生自身の課題を確認するとともに、気づいていない不安もクリアできた。事前事後で意識変化の確認アンケート（5件法）では、すべての項目で授業開始前に比べて数値が上昇した。中でも「私はグループディスカッションに自信を持って臨める」、「私はグループ面接、個人面接に自信を持って臨める」、「私は、就職活動は具体的に何をすべきかを理解している」、「私は前向きに就職活動にのぞめている」などの5段階評価が全体的平均が0.83上昇し、満足度も4.69と高い評価点を示した。2021年度は、コロナ禍のため、全面遠隔対応としたが、2022年度から本年度も前半2日間を対面とし、後半2日間は遠隔を効果的に導入した。

(6) 公務員受験関連科目

公共経営専攻に所属している学生が多様な公務員をめざすことができる支援を行うとともに、企業経営専攻においてもキャリアの選択の一つとして地方公務員や公安職をめざすことができるための支援として、東京アカデミーとの連携授業を導入している。2023年度は新型コロナウイルス感染症の5類移行もあり、完全対面授業に戻すことができた。また例年通りに東京アカデミーのスタッフ・講師と本学教員の間で、定期的に授業の問題点などを共有しており、次年度はさらに充実した授業を実施することができるよう準備している。

① 公務員基礎演習

公安職・市役所等をめざす企業経営専攻の学生を対象として実施する東京アカデミーとの連携授業であり、公務員をめざす学生の基礎力を養成している。公共経営専攻においては、多様な公務員志望の学生の基本的知識を習得する場としている。

② 行政職特別演習

公共経営専攻の2年次では、行政職を志望する学生を対象とし、東京アカデミーとの連携

授業として行政職特別演習（専門科目主要7科目）を開講している。国家公務員や地方上級の合格に必要な、3年次の公務員プログラムに続く専門科目の基礎を2年次の行政職特別演習として段階的に学ぶ、専攻の専門教育科目としての位置づけとし、卒業単位として認定している。本授業は本学教員が担当する経済学、憲法、民法等の専門科目とも連動させて、公務員試験の合格につながるように定期試験は本番を見据えた問題を出題している。共通教育科目で開講されている科目も活用しながら、3年次講座へつなげるなど、専門科目を伴う国家公務員や地方上級の志望者を手厚くバックアップする体制をめざしている。

③ 公務員試験に直結する特色ある授業科目

公務員試験で必要となる知識・スキルの習得を目指し、論作文、グループワーク、自治体研究、エントリーシートに関する講義及び演習課題を実施し、添削・フィードバックをする「公務員特別演習」や、近年公務員試験においても利用が増加しているSPI及びSCOA試験への対策授業として「ライセンスセミナー公務員」を設けている。また3年次には「公共経営論」などの授業を通じて公務員の仕事への理解を深めてから、市役所でのインターンシップにつなげている。

④ IBU 公務員プログラム

1) 1年生講座

2023年度も5月から公務員試験の入門講座を本年度は完全体面授業で実施した。本講座は新入生の公務員試験学習のスタートとして、授業と相乗効果を促す体制を取っている。

2) 3年生講座

教養科目は全員受講を課しており、専門科目は国家公務員や国税専門官、県庁などをめざす学生が受講している。コロナ禍を経験した影響もあり、本年度は出席率が芳しくなかった。来年度は出席を促す体制をとる予定としている。専門科目を受講している学生が必ずしも専門科目を必要とする官庁を受験するとは限らないが、将来、志が広がることを想定し、また就職した後の昇任試験においても役立つこともあり積極的に支援している。なお、来年度より、専門科目の講座の曜日・時限をさらに工夫し、学生の出席率が上昇するよう、運営面での改善を図ることとしている。

3) 公務員受験のための模擬試験

本年度は昨年度に引き続き授業期間外に模擬試験日を設けることにより、計画的に対面で実施することができた。

4) 令和5年度卒業生の公務員試験合格実績

令和5年度の結果は下記のとおり、のべ28名（実数17名）であった。

大阪府警(1名)、奈良県警(1名)、大阪府庁(2名)、枚方市(1名)、松原市(1名)、高石市(2名)、宇陀市(1名)、大東市(1名)、忠岡町(1名)、尼崎市(1名)、有田市(1名)、甲賀市(1名)、東近江市(1名)、葛城市(1名)、御所市(1名)、河南町(2名)、熊取町(1名)、高野町(1名)、下市町(1名)、香美町(1名)、上北山村(1名)、大阪府学校事務(1名)、豊能町学校事務(1名)、富田林市消防(1名)、生駒市消防(1名)。

(7) 必修化している資格取得支援

① 簿記能力検定3級1年生全員受験（必須）のための支援

例年どおり、新入生は、7月実施の全経簿記能力検定試験3級を全員受験（受験料は大学負担）した。これは、大学入学前に資格試験等に挑戦したことがない学生たちに、成功体験をして自信をつける機会を与えるために設けている。2023年度は対面授業となったが、コロナ禍の影響と考えられるが、授業や検定試験を欠席する学生が多く、全経簿記能力検定試験3級合格者は1年生簿記検定については、本年度173名受験し、合格したのは76名（合格率44%）であった。しかし、本年度は団体受験優秀賞を受け、企業経営専攻、公共経営専攻から各1名ずつを表彰していただいた。この全経簿記能力検定試験3級に合格したことで自信を持ち、それ以降に実施した全経簿記能力検定2級商業簿記は17名合格し、2級工業簿記も15名が合格した。可否に関わらず、さらに上級をめざす学生が散見される。

② ビジネス実務マナー検定全員受験のための支援

3年生夏学期オールインターンシップの就業体験の実施に向けた「インターンシップI」の授業の一環として、授業内容の習得状況を確認するとともに、学生がビジネスマナーや社会人に必要な行動力、判断力、表現力を磨く為の知識習得を支援するために、平成30(2018)年度より、受験料を大学負担として3年生全員に受験を課している。

2023年度のビジネス実務マナー検定3級受験結果は、121人受験し、65名合格（合格率53.7%、前年合格率：3級64.1%）であり、10.4ポイント下降した。なお、2級は、今回2名が受験（合格率：100%）した。残念ながら受験の合格率は下降したものの、「ビジネス実務マナー検定」で使用しているテキストに関するアンケートでは、学修した内容がインターンシップや就職活動に大いに役に立っているという結果が出ている。アンケートの結果を精査し、受験に向けての支援を強化していく。

③ 成功体験を積み将来のキャリアを考える「ライセンスセミナー」

本学部では、将来のキャリア形成に役立つ資格取得を支援する科目として、ライセンスセミナー科目を設けている。単に知識の習得レベルを確認するだけでなく、合格することによって成功体験を積み、目標にチャレンジして達成する喜びを経験し、将来のキャリアにつながる資格を取得する機会としている。

(8) 企業との連携授業：「実学マネジメント論Ⅰ・Ⅱ」

「実学マネジメント論」は、社会人のリアルを学ぶ本学部の特色ある授業のひとつである。本科目は、「働くとは」「仕事とは」「社会人になるために必要なことは」などをテーマに、経営者から若手まで多様な講師の講義を通して様々な業界・職業について理解を深め、将来のキャリアを考え、職業適性を発見することを目的としている。

本年度は、一部の配慮申請学生を除き、対面授業で実施した。前半は、本学の教職員の独自依頼による、大手企業を中心に、人材派遣、不動産、外食、消防署、JA、旅行代理店、税務署、警備、建材、百貨店の10社・団体、後半は近畿経済産業局・経済産業省の講師派遣プラットフォームを活用、本学のインターンシップで連携している大阪労働協会の選定により素材、福祉用具、産業ロボットの優良中小企業3社による講義を実施した。インターンシップや採用に繋げることも狙っており、学生からの授業感想は前向きな意見が多く、「知らなかった業界に興味湧いた」「仕事の厳しさと楽しさが理解できた」「知識よりも情熱やポテンシャルが重要であるとわかった」など、好評であり、実際に求人

応募した学生も少なくない。

(9) 海外インターンシップ

平成 29 (2017) 年度よりオーストラリアで実施してきたインターンシップは 2020 年度、2021 年度はコロナにより中止を余儀なくされ、2022 年度に再開したものの、費用の高騰により、参加者が 2 名に留まった。そこで、参加費の負担が少なくて済む実習先を検討し、本年度、大学で新たに協定を締結した、ベトナム・ダナン市の FPT 大学のプログラムで 2024 年 3 月に実施した。参加者 1 名 (公共経営専攻) であったが、他大学も参加する合同研修の後、合計 4 週間のプログラムに参加した。参加学生は、大学の日本語教員アシスタントに配属され、学生の満足度は高かったが、従来と異なるインターンシップ内容であり、一定の語学力が要求されることや、期間が 1 カ月で固定されていることなどから、来年度は夏休みなどに参加しやすく、経営学科らしい実習として実施すべく、現在、検討準備している。

(10) 低学年インターンシップ支援

2023 年度から始まった柏原羽曳野藤井寺消防組合の 2day インターンシップを本年度は 1day に変更して実施した。また、2022 年度より始まった藤井寺市観光課による 1 day インターンシップは、藤井寺市のインターンシップ実習内で組み込まれることになり、2023 年 3 月の時点で中止となった。また、低学年インターンシップとして、3 年生のインターンシップでコーディネートを依頼している一般財団法人大阪労働協会の企業イベントサポートなどを低学年学生に紹介し、低学年から企業と出会うインターンシップに積極的に参加するように呼び掛けている。

(11) ビジネスプランコンテストと起業支援

平成 26 (2014) 年度から経営学科独自の取り組みとして、「IBU ビジネスプランコンテスト」を行っている。「出でよ！未来の起業家たち」をテーマに、新商品、新サービス、アプリケーション、公共サービスについての学生のビジネスプランを公募し、創造性を競うもので、恒例としている。授業で学んできた関連科目の知識を実際に活用し、事業計画にまとめることで、起業家精神を涵養し、学生起業家、経営者、マーケターを育成、輩出することを狙いとしている。

10 回目となる本年度も、大学基礎演習での全員参加はじめ、関連科目等で学部を越えて全学年を対象にプランを公募したところ、グループや個人から約 100 プランの応募があった。書類選考を通過した 14 プランについて、1 月 23 日に対面でコンテストを実施した。学部教員全員と関連科目非常勤教員 2 名が審査員となり、アイデアの独創性、学生らしさや社会性、市場性、発表完成度、プレゼンテーションスキルの観点から審査を行い、優勝、特別賞、準優勝、入選作品を選定した。コンテストで入賞した、キッチンカーのプロジェクト学生は、卒業後もキッチンカーでビジネスを展開しているほか、飲食関係での起業支援も行っている。創業を目指す学生、プロジェクトを行いたい学生やチームに関西ベンチャー学会所属の教員・非常勤講師・事業化コーディネーターが、先輩起業家やメンター紹介などの支援に加え、家業継承希望の学生についても、円滑な企業継承と発展を支援している。

(12) 学生プロジェクト活動

学生主体の下記の地域連携活動のサポートを経営学部設置当初より継続的に行っている。

① 地域連携研究会 Glanz

経営学科1期生(2008年)の有志学生たちから始まった地域との協働による研究会(Glanz)活動を学部横断的に発展させて組織化した学生主体の地域貢献活動を経営学科の教員で支援している。毎週水曜の授業前の昼休み時間に行っていた定例打合せはコロナ禍となり、実施を見送ってきたが、授業のSAとなる学生を中心に再開することを検討している。

② 「こよみ手帳」の制作

地域情報誌として、商店街の紹介やお得情報カレンダー、世界文化遺産の古墳などの情報発信として、毎年発行している「こよみ手帳」は第12号を発行することができた。2023年度は、コロナの影響が緩和され従来のような情報収集が再開できた。羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等多くの方々からのご協力をいただき、例年どおり地域(羽曳野市・藤井寺市の市役所や商工会、商店街等)へ配布を行った。「こよみ手帳」の発行について、藤井寺市長をはじめ、多くの方々から、継続的な発行を応援していただいている。

③ 地域イベント・まちづくりボランティア支援

地域連携関連授業の履修生や、すでに履修した有志学生が中心となって、羽曳野市・藤井寺市などを中心に、様々なまちづくり・まちおこし活動にボランティアスタッフとして参画している。

本年度は、これまでコロナ禍により延期・中止となっていたイベントも再開され、延べ100名以上のボランティア学生・卒業生・教員が、津堂城山古墳・ハレマチビヨリ、(5/14)、道明寺歴史まつり(5/5)、道明寺天満宮宮子屋(7/22、9/23)、世界遺産登録3周年記念イベント・シュラホール(5/17)、シノリクフェスタ(10/22)、藤井寺ハロウィン「デラハロ」(10/28)、羽曳野市古墳DEるるる(11/12)、藤井寺市民まつり(11/23)、マルシェ de たいし(11/26)、辛國神社ほしまつり、藤井寺魅力発掘フェスタ(3/26)の企画から参加した。これらの活動から、地域に関心を持ち、愛する心を涵養するとともに、将来の地域を牽引する若手リーダーの育成、輩出を狙いとするものである。

④ 地域へのSNSを通じた情報発信

学生が地域との交流や関わりを深め、収集した地域の情報を発信するため、本学卒業生の勤務するメディア企業とも連携しながら、地域ブログ「オオサカジン・街ブラ企画藤井寺」、Facebook ページ「IBU 地域連携ニュース」、Instagram 「#fujiiidelize」などで、学生による投稿、シェアを行なった。アカウントは、地域連携アカウントibu-chiikiと経営学部公式アカウントibu-keieiを併用しており、2024年4月現在のフォロワー数は331である。

⑤ 企業・地域との産官学連携

産学連携企業である、松原市に本社を置く米穀製販大手・食品メーカーである幸南食糧株式会社と2022年度締結した連携協定に基づき、地域の名物やお土産となる新商品「羽曳野かすおでん」の共同開発の継続販売や、羽曳野市の大蔵印刷株式会社と、同社の運営する「河内こんだハニワの里 大蔵屋」と連携したり、イオンモール藤井寺の実施する地域連携企画「古墳にコーフンツアー」との連携を行った。

(13) 公務員自主勉強会

対面での指導に完全に戻すことができたため、より学生に寄り添う指導が可能になった。

1年生は、例年通り多様な進路の4年生の合格体験談を対面で直接聞く機会を設けることができ、将来の公務員試験へのモチベーションを高めることができた。

2年生は、恒例としていた警察や自治体の方々を招待しての1年生向公務員説明会が、コロナ禍により2020年度より開催できていないが、実際に公務員の方と触れ合い、学習のモチベーションを高め、先輩と後輩とのタテの人間関係作りという点からも有意義な本イベントの再開をめざしている。

3年生は、随時、一般知能に関する質問への対応をするとともに、課題管理を行うなど、ゼミ前の時間等を使い自主勉強会を開催している。3年終了時の春休み期間においても毎週火曜日に全体の勉強会をイングと連携してゼミ担当教員全員でサポートしている。3年の定期試験が終わる春から始まる公務員試験に関する対策および出願・エントリーシート等の指導に加え、各ゼミ担当教員による一般知能等に関する少人数での個別勉強会も開催している。この時期から、東京アカデミーと連携した面談も実施し、進路相談なども行っている。恒例となった4年生の合格体験談を聞く機会も設け、公務員試験に向けてモチベーションを高めることができた。加えて本年度も市長とのタウンミーティングにおいて3年生2名が司会を務めるとともに2年生の希望者が参加するなど、市政に直接かかわる機会を得た。

4年生は、担当教員と東京アカデミーが連携して、随時、個別の勉強会、出願先の相談・日程把握、面接練習、集団討論の練習など、学生一人ひとりに寄り添う手厚い指導を行っている。学生の長期休暇期間にも、毎週1回、全体での勉強会を開くことによって、一人でも多く、希望の進路に進むことができるようサポートしている。

以上

看護学部 看護学科

1. はじめに

看護学部では、①豊かな教養と高い倫理観を醸成すること、②自ら考え、課題を発見し、解決の方法を見出し、行動できる主体性と創造性を涵養すること、③看護の本質を熟考し続け、どんな状況であっても最善の看護を提供できる実践力を身に着けること、これらをディプロマ・ポリシーに挙げている。そして、これらの卒業時に修得すべき力を学生が4年間でバランスよく修得できるようにカリキュラムをデザインし、教育活動にあたっている。看護学部は、2023年3月に、完成年次を迎え、2024年3月に2期生を社会に輩出したばかりの若い学部である。完成年次までの間には、本邦における保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正がなされ、それに対応するように2022年4月以降入学生のカリキュラムを変更した。そのため2023年度は、1・2年次生が新カリキュラム、3・4年次生が旧カリキュラムとして運営し、ディプロマ・ポリシーに沿った成果を積み上げ、変化する社会のニーズに応じた看護人材養成の使命を果たすべく教育を展開してきた。また、教育の質向上には、教員の学習機会の保障や研究支援も重要であるため、学部全体で相互に支援し合える環境を整備してきた。さらに、開設時よりカリキュラム・ポリシーに挙げている教育方法として、学生の主体性を引き出し、学生自ら進んで調べて考えるという学ぶ力を身につけることを重視するアクティブ・ラーニングを実践している。なかでも、看護実践でのあらゆる状況、患者の状態を学習者の学習準備に合わせて再現した環境での体験型学習であるシミュレーション教育を活用している。そして、社会の人々の健康と生活を守るために尽力されている保健医療福祉の専門機関、施設、サービス事業所などの本学の実習施設の協力のもと、対象者と学生の安全を保障し、コロナウイルス感染症に留意しながらも本格的な実習教育が従来に近い形で運営できるようになってきた。

これらの一年を踏まえた看護学部のFD・SD活動について、特に、教員の教育力・研究力向上のサポート、シミュレーション教育の推進、看護実践開発研究センターにおける活動を中心に報告する。

2. 授業相互参観について

全学の取り組みである冬学期の授業参観では、学部教員の多くが実習科目を担当し、臨地での教育活動にあたっているため、2023 年度夏学期に、学部独自で以下の通りの相互授業参観の実施科目の公開授業を設定した。

日時	時限	領域	科目名	担当
6月2日	1時限目	母性・助産看護学	母性生活支援技術演習	外村晴美
6月5日	1～2時限目	老年看護学	療養生活支援技術演習Ⅱ	山崎尚美・杉本多加子
6月5日	3時限目	在宅看護学	在宅療養生活支援論	乗越千枝
6月12日	4時限目	公衆衛生看護学	地域生活支援論Ⅰ	上野昌江
6月19日	4時限目	公衆衛生看護学	地域生活支援論Ⅰ	上野昌江
6月27日	2時限目	基礎看護学	看護概論	中山由美
7月3日	3時限目	国際・災害看護学	グローバルヘルスと国際看護	亀井 縁
7月3日	3～4時限目	小児看護学	成育療養生活支援技術演習	藤澤盛樹
7月4日	3～4時限目	成人看護学	療養生活支援技術演習Ⅰ	吉川有葵
7月4日	5時限目	母性・助産看護学	助産概論	戸田千枝
7月10日	3～4時限目	小児看護学	成育療養生活支援技術演習	藤澤盛樹
7月24日	1～2時限目	老年看護学	療養生活支援技術演習Ⅱ	山崎尚美 外部講師(摂食嚥下障害 看護認定看護師)

授業科目の内容や教育手法のブラッシュアップのヒントを公開授業担当教員・参観教員が共に得ることを目的に実施した。各公開授業に、延べ23名が参観し、学科フォーム入力に協力のあった16名の意見・感想を公開授業担当教員にフィードバックした。参加者の多くが「参考になる」、「担当科目の授業に活用のヒントが得られた」などの意見で占められていた。夏学期に相互授業参観を実施できたことで、科目担当者とは担当者以外の教員間で相互に学びが得られた。課題という点においては、開催時期が夏学期後半で限定的になったため、8週科目の授業期間に合わず、公開授業を設定できなかったという点や、今後のカリキュラム開発や授業デザイン構成に備え若手教員に2回参観を推奨したが、コース実習、統合実習などとの重複もあり、参観が難しかったという点である。教育手法の学習のために、気軽に参観できる環境を残しつつ、開催回数、時期の検討を推し進めていく。

2023 年度、冬学期の全学の相互授業参観の実施科目の公開授業を以下の通り設定した。

日時	時限	公開授業科目名	担当教員
11 月 22 日	4 時間目	療養生活支援論	山崎尚美
11 月 20 日	1 時間目	災害看護支援論	亀井縁
11 月 8 日	1 時間目	助産管理論	戸田千枝
11 月 21 日	4 時間目	フィジカルアセスメント筋・骨格系	中山由美
11 月 13 日	3 時間目	在宅療養生活支援技術演習	乗越千枝
11 月 17 日	2 時間目	成育生活支援論	藤澤盛樹
12 月 5 日	3~4 時間目	フィジカルアセスメント	今井秀人
11 月 7 日	4 時間目	在宅療養生活支援技術演習	金本純子
11 月 7 日	4 時間目	在宅療養生活支援技術演習	矢野真理
11 月 25 日	3 時間目	養護概説	波田野希美

延べ参加人数が 3 名の意見・感想を公開授業担当教員にフィードバックした。開催時期は、領域別実習中であり、多くの教員が、実習指導の合間に臨地から学内へ戻り、授業を担当している状況であるため、本学部の授業参観として充実させていくことは困難であった。したがって、夏学期に学部独自で開催でき、相互に学び会えたことは、一定の成果があったと考えられた。

3. 学科独自の取り組みについて

1) 教員の教育力・研究力向上のサポート

(1) 科研費獲得支援研修

科研費申請に関する情報を整理し、科研費の採択に効果的な申請書類のまとめ方を共有することを目的に、科研費公募前の 2023 年 6 月 30 日（金）5 限に実施した。看護学部教員 24 名が参加し、朝野忠明氏（地域連携・研究推進課）より、科研費に関する研究助成制度や申請手続き方法などの活用するための基本的な知識、ならびに、本学独自の科研費獲得支援について講演いただいた。また、吉川有葵准教授（看護学部・大学院看護学研究科）より、若手研究・基盤研究（C）申請書の書き方のヒントとなる内容について、ご自身の経験や研究計画を基に講演いただいた。さらに、山崎尚美教授（看護学部・大学院看護学研究科）より、基盤研究（B）申請書の書き方のヒントに関し、特に大規模研究に関する研究助成の獲得手法や研究の進め方について講演いただいた。

教育研究職として、初めて着任した教員も多く、科研費の応募資格を取得したばかりの背

景をもつ参加者には、科研費に関する基本的な情報提供や実際の活用法、申請の工夫事項を身近に感じてもらえていた。アンケート結果から研修内容、時間、研修内容などに関しては、好評であった。出席者のうち 76.9%が申請の意向を示され、実際に、申請資格のある教員 16 名が 2023 年度申請につながった。

(2) トピックス研修『発達障害をもつ（可能性のある）学生への実習指導の在り方』

学部教員のニーズから、発達障害に関する理解を深め、発達障害をもつ（可能性のある）学生への具体的なかかわり方を共有し、実習指導への手がかりを探求することを目的に 2023 年 9 月 21 日（木）2 限に開催し、学部教員 23 名が参加した。講師には、教育学部の協力を得て、特別支援教育の現場で長年活躍されていた早川透教授（教育学部教育学科）をお願いし、学部教員のニーズに合わせて、講演いただいた。

研修時間、内容、教育への活用可能性など、参加者の満足度は、好評であり、当該学生への教育の工夫やかかわり方の個別性を共有でき、学生との信頼関係構築へのかかわり方の強化をこれまで以上に図ろうといった展望が示された。一方で、具体的で画一的な支援方法を知りたいという意見、学部全体での対応や親への連絡基準など形式的で均質な対応をしたいという要望もくみ取れた。発達障害をもつ（可能性のある）学生に対し、個別的な対応が必須であると改めて認識するとともに、教員の個別対応をサポートする仕組みや共有できる風土の醸成が重要であることが課題となった。

2) シミュレーション教育の推進

(1) 教員間の情報交換会の企画・運営

- ・シミュレーション教育に関する教員間の情報交換会

開催日時：2023 年 9 月 28 日 13:30-14:30

場所：9 号館 2 階デブリーフィングルーム

参加人数：15 名

内容：①話題提供「老年看護学領域でのシミュレーション演習の紹介」（吉本講師）

②テーマ別グループワーク「シナリオ作成・授業計画」「環境・設営」

「学生をやる気にさせる工夫」

結果：研究内容については参加者全員から有益であったとの回答が得られた。「学生目線で体験したい」「シミュレータの基本的な操作方法や実際の授業での運営方法について知りたい」等の意見が得られた。

(2) 各種勉強会の企画・運営

- ・シミュレーション教育に関する勉強会

開催日時：2023年9月28日13:00-13:30

場所：9号館2階デブリーフィングルーム

参加人数：15名

内容：シミュレーション教育のススメ（吉川准教授）

結果：「シナリオ作成における検討事項やプロセスを知りたい」「シナリオの評価方法について知りたい」等の具体的な意見が得られた。

- ・本学所有のシミュレータの紹介と使用方法に関する説明会を企画し開催した（説明会動画の配信も併用）。

- ① SINARIO・ふりかえ朗・フィジコ（京都科学）説明会
- ② イチローⅡ、ラング（京都科学）説明会
- ③ SimCapture、SimMan3G、ナーシングアン（Laerdal社）説明会

- ・日本看護シミュレーションラーニング学会（JaNSSL）シミュレーション教育指導者養成ベーシックコース受講

開催日時：2024年3月22日9:30-17:30

場所：9号館2階デブリーフィングルーム、実習室2、シミュレーションセンター1

参加人数：専任教員21名、岡谷理事（JaNSSL）、冷水先生（東京医科大学）

JaNSSLファシリテータ約10名（オンライン）

内容：日本看護シミュレーションラーニング学会（JaNSSL）シミュレーション教育指導者養成ベーシックコース

(3) VRに関する環境の整備

360度カメラを使用し、危険予知トレーニングのコンテンツをサンプルとして制作した。

(4) 各種シミュレータの保守点検等対応

各領域が保有しているシミュレータの使用状況、メンテナンス時期等について状況を確認して集約し、不具合について対応を行った。

(5) シミュレーション教育に関する各種セミナーの案内

- ① 第8回全国シミュレーションスペシャリストセミナー
- ② 看護教育における・医学ICTを活用したシミュレーション演習
- ③ シミュレーション教育の基本を学ぼう！
- ④ いつもの演習実習でシミュレータをうまく使いたいと思っている人のためのセミナー

(6) 実習施設の看護部職員に対するシミュレーションセンターの見学会

2024年3月7日、実習施設の看護部職員11名を対象に看護棟シミュレーションセンターの見学会を実施した。

3) 看護実践開発研究センタープログラム実施

看護実践開発センターは、地域における教育の提供や研究の実施を通して、看護ケアの質の向上と医療提供体制の構築、また、研究実施を通して看護ケアの質の向上を図り、それらをもって人々の健康維持・向上に寄与することを目的としている。本センターの機能としては、「教育機能」、「研究機能」、「専門職支援機能」の3つの機能を有し、Ⅰ. 専門職の人材育成、Ⅱ. キャリア開発支援、Ⅲ. 研究実施と促進である。

看護学部が有する看護実践開発研究センターでは、看護実践開発研究センタープログラムが始まり今年で5年目となる。2023年度は、2022年度研修プログラムの収益金165万円の中から60万円を研究助成金とした。学部教員および大学院生を対象とした研究助成金の規定等を含む組織化を図り、研究助成者の決定・助成を行った。60万円の助成金額に対し、申請要件を満たした大学院生2名に158,674円を助成した。該当大学院生からは、研究の終了と報告書の提出がなされた。

(1) 看護実践開発研究センタープログラム実施について

現場の看護職および大学院修了者の実践能力・研究能力向上のために次のようなプログラムを実施した。

病院防災に関する教育プログラム、臨床で働く看護職のための看護研究基本セミナー、看護職・介護職のための認知症ケアの教育プログラム【A. 基礎編】は応募者が定員に満たなかったため非開講となった。看護職・介護職のための認知症ケアの教育プログラム【B. ケア実践編】16人、看護職・介護職のための認知症ケアの教育プログラム【C. 管理編】19人の参加となり、あべのハルカスサテライトキャンパスにて開講した。

四天王寺大学看護実践開発研究センターは、大学院修了者の実践能力・研究能力を育成し、また、現職で活躍する看護職の現任教育を行い、キャリア開発を支援する場である。さらに、地域との連携を行いながら人々の健康や病気からの回復を促すための人材育成や研究能力向上のための支援を今後も行っていく。

(2) 臨地実習指導者講習会の企画・開催

2023年8月26日に臨地指導者研修会を開催し、完成年度を迎え新体制となったため、①本学の教育のあり方を周知すること、②臨地実習指導を効果的に行うこと、③指

導者および教員の教育力向上をめざした研修会開催すること、④効果的かつ効率的な「実習指導のあり方」を検討することを目的とした。

第一部には、実習施設から13施設18名、大学から教員23名、諮問委員4名の計45名の参加があった。本学の臨地実習の目的・概要・スケジュールについて説明を行った。討論は6グループに分かれ、①現在の学生の特長（実習場面から見た本学の学生の特長）、②実習指導者と教員の連携のあり方、③本学の臨地実習の現状と課題、について実施した。

第二部では、学生への理解を深めるための成育環境に着目した幅広い知識の習得、ならびに、学内外の方々も対象に現代の子どもたちを取り巻く環境や子育て支援の実態を理解することを目的とした講演会を開催した。村上靖彦教授（大阪大学大学院人間科学研究科）をお招きし「地域の子育て支援から見たヤングケアラー」についてご講話いただいた。その後のアンケートでは、「ヤングケアラーの実態を知ることができた。」「その方たち支援する居場所が必要だ。」などの意見が寄せられた。学内外の64名の参加があった。

今後の臨地実習指導者講習会に関する要望としては、①例年の実習懇談会と同一時期の2～3月に対面での開催を希望する意見、②実習施設と大学との共同によるシミュレーション教育を希望する意見、③臨地実習指導者に対する研修会の実施を求める意見が明らかとなった。実習の現状としては、実習施設や臨地実習指導者ともに試行錯誤の教育指導を行っていることが明らかとなった。したがって、看護実践開発研究センターは、臨地実習指導者を対象とした教育プログラムの開講を検討する必要性が確認できた。なお、臨地実習指導者講習会でのアンケート結果をまとめるにあたり、若手教員育成目的で研究公募を行い、アンケート結果とグループワークでの討議内容の分析結果を投稿し、四天王寺大学紀要第74号（2024年9月）に掲載予定である。

4. 評価と課題

- 1) 授業参観を夏学期に実施できたことで、相互参観が可能になり、学部教員間で学び合うことができた。但し、夏学期に実施しても、8週科目や実習科目の開講状況から公開も参観も難しい科目や領域が存在するため、開催時期については、さらに検討が必要である。
- 2) 研究支援については、科研費の申請につながる一歩となっているため、今後は、採択率向上や研究継続の支援についても検討を重ねる。学部の繁忙状況からは、教員の教育機会を確保することが簡単ではないが、学生の力を強化することに熱い思いをもって教育にあっている看護学部教員集団の風土を維持・向上できるように引き続き教育力向上となる企画・運営を充実させていきたい。シミュレーション教育推進に関しては、学部教員がシミュレーション教育指導者（ベーシック）の認定（JaNSSL）を取得したため、シミュレーション教育のバリエーションの広がりや質の向上に期待がもてる。さらに、領域・学年を横断した

新たなシミュレーション教育への発展に取り組みたい。

3)看護実践開発研究センターの活動については、地域の保健、医療、福祉、介護のニーズを把握しながら、大学院修了者の実践能力・研究能力の育成や、現職で活躍する看護職の現任教育への参画によって、キャリア開発支援を継続していきたい。また、臨地実習指導者育成にもセンターとして貢献していく必要がある。

短期大学部 保育科

1. はじめに

2023年度は、全ての授業を対面で実施することができるようになり、当学科でかねてより進めてきた「保育実践演習」の実施を中心に、科目間連携、教員間連携を進めながら、「質の高い保育者の育成」を目指す教育・研究活動を進める状況となった。保育者としての専門性の向上のため、より地域の専門家を招請して行う活動を増やして、さらに保育実践力を育むように試みた。以下、今年度の保育科の教育活動に関するFD活動の結果として報告する。

2. 「保育実践演習」について

(1) 概要とシラバス

「保育実践演習」は、短期大学部保育科の初年次教育の授業にあたる「保育実践演習Ⅰ」を含む、「保育実践演習Ⅱ」「保育実践演習Ⅲ」「保育実践演習Ⅳ」と2年間に渡って続く授業である。異学年集団での学びあいも含み、保育科の核となる授業でもある。この授業は毎年の授業アンケートや学生のワークシートを参考に教員間で毎年評価を行い、次年度の計画及びシラバスを作成している。今年度の「保育実践演習」の概要及びシラバスは以下のとおりである。

受講者数	1年生（保育実践演習ⅠおよびⅡ受講者）	61名
	2年生（保育実践演習ⅢおよびⅣ受講者）	74名
担当教員	保育科専任教員12名	
基礎グループ	A～Hの8グループ（1グループあたり1、2年生合わせて約15名）	
使用教室	講堂701教室（メイン教室）、講堂702教室及び703教室 音楽棟 多目的室2部屋及びリズム室、図工室、サブアリーナ、小体育館	
シラバス	表1及び表2参照	

表1 令和5年度夏学期「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」シラバス

令和5年度夏学期「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」授業計画				
日程	回	1年：保育実践演習Ⅰ	回	2年：保育実践演習Ⅲ
4月10日	①	オリエンテーション「今学期のテーマとねらい」 グループ内で自己紹介	①	オリエンテーション「今学期のテーマとねらい」 名札を付けてグループ内で自己紹介
4月15日	②	PROGテスト 「実習オリエンテーション」教職教育推進センター（岡田さん）	—	
4月17日	③	保育の学びに出会う「先輩の実習体験から学ぶ」	②	保育の学びを語る「自分の実習体験を語る」
4月24日	④	春の運動会	③	春の運動会
5月1日	⑤	幼稚園長講演「幼稚園の仕事」 幼稚園半日体験直前オリエンテーション	④	幼稚園長講演「幼稚園の仕事」 運動会振り返り
5月8日	⑥	休講（5.29（月）1限へ）	⑤	就活講演「社会人になるにあたって」（キャリアセンター）
5月15日	⑦	保育に出会う「幼稚園半日体験」①班 白鳩羽曳野幼稚園・四天王寺慈徳院こども園	⑥	休講（5.29（火）1限へ）
5月22日	⑧	保育に出会う「幼稚園半日体験」②班 白鳩羽曳野幼稚園・四天王寺慈徳院こども園	⑦	模擬保育の準備
5月29日	⑨	模擬保育への参加（1・2限） 幼稚園半日体験の振り返り	⑧	模擬保育の実践（1・2限） 模擬保育の総括的振り返り
6月5日	⑩	休講（6.12（月）1限へ）	⑨	幼稚園実習
6月12日	⑪	キッズシアター「かみふうせん」観劇（1、2限）	⑩	幼稚園実習
6月19日	⑫	先輩出前保育のビデオを見る（冒頭のみ） 人形劇・ペープサートの基本	⑪	出前保育の復習 1年生に伝える内容を考える
6月26日	⑬	2年生の出前保育から学ぶ 2年生のアドバイスから学ぶ	⑫	1年生へ出前保育を見せる 1年生にアドバイスをする
7月3日	⑭	2年生からダンスを教わる	⑬	1時間目：出前保育のダンスを作る（実習期間の補講） 2時間目：1年生にダンスを教える
7月10日	⑮	出前保育役割分担決定 基本練習	⑭	保育所長講演「保育所の仕事」
7月24日	⑯	まとめ	⑮	まとめ

表2 令和5年度冬学期「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」シラバス

		2年:保育・教職実践演習(幼稚園)	2年:保育実践演習Ⅳ	1年:保育実践演習Ⅱ
1	9月26日	オリエンテーション 子育て支援体験の説明	保育探究演習報告会準備①	オリエンテーション
2	10月3日	子育て支援体験の準備①	卒業生講演	卒業生講演
3	10月10日	子育て支援体験の準備②	1年生の出前保育練習を指導する	出前保育練習①
4	10月17日	子育て支援体験①班(②班は休講)		幼稚園実習
5	10月24日	子育て支援体験②班(①班は休講)		幼稚園実習
6	10月31日	子育て支援体験振り返り	保育探究演習報告会準備②	出前保育練習②
7	11月14日	保育探究演習報告会リハーサル	保育探究演習報告会	1時間目:出前保育練習③(補講) 2時間目:保育探究演習報告会に参加
8	11月21日	「連れ去り防止講習会」(予定)近隣保育施設招待		出前保育練習④
9	11月28日	1年生出前保育リハーサルに参加	運動会の準備①	1時間目:出前保育リハーサル 2時間目:出前保育最終練習
10	12月5日	運動会準備②	運動会準備③	出前保育に出る
11	12月12日	運動会準備④	運動会準備⑤	出前保育の振り返り
12	12月19日	運動会リハーサル	冬の運動会	冬の運動会
13	12月26日	講演「社会人になるにあたって」 運動会の振り返り	前半:1年生への施設実習の話を考える 後半:1年生に施設実習の体験を語る	前半:講演「障害者施設の仕事」 後半:2年生から施設実習の話聞く
14	1月9日	休講	休講	児童養護施設長講演
15	1月16日	卒園式リハーサル	保育科卒園式を開催する	保育科卒園式に参加する
定期試験	1月23日	まとめ	まとめ	まとめ

(2)地域の幼稚園・保育所などとの連携

今年度の夏学期の幼稚園見学活動を5月15日(月)と5月22日(月)の両日(午前・午後)に、四天王寺悲田院こども園と白鳩羽曳野幼稚園の2か所において実施できた。冬学期には、地域の幼稚園・保育所での出前保育活動及び、地域子育て支援センターでの子育て支援体験活動も行うことができた。

① 出前保育(1年冬学期:12/5)

- ・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園
- ・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院こども園
- ・学校法人志紀学園 志紀学園幼稚園
- ・社会福祉法人羽曳野市社会福祉協議会 ベビーハウス社協

コロナの状況を鑑み、出前保育に出向くのは、昨年度と同様、演技を行う1チームのみとした。園側の配慮もあり、参加する幼児も年長クラスを中心に少人数に絞っていただいたため、交流する機会を設けることができなかった。

② 子育て支援体験(2年冬学期:10/17,10/24)

- ・羽衣子育て支援センター(高石市)10/24
- ・柏原市つどいの広場「ほっとステーション」(柏原市)10/17,10/24
- ・富田林市第1幼児教育センター(富田林市)10/24
- ・富田林市第2幼児教育センター(富田林市)10/17,10/24
- ・南海愛児園子育て支援センター(高石市)10/17,10/24

- ・ひかり保育園（藤井寺市）10/17
- ・藤井寺カンガルー教室（藤井寺市）10/17, 10/24
- ・東羽衣子育て支援センター（高石市）10/17

事前にそれぞれの子育て支援先での参加する上での配慮すべき事項などを全員で共有した。また、事後の反省会での発表は2年生のみでの開催とした。

(3) 外部講師による講演

今年度は以下の方々に外部講師としてご講演をいただいた。

- ① 幼稚園園長の講演（1年夏学期）（5/1）
 - ・吉田 あき 先生 大阪市立天下茶屋幼稚園 園長
- ② 保育所所長の講演（2年夏学期）（7/10）
 - ・黒澤 泰子 先生 社会福祉法人 そうび会 ふじみ保育園 主任保育士
- ③ 卒業生の講演（1年・2年冬学期）（10/3）
 - ・藤本 穂果 先生 社会福祉法人夢の樹 幼保連携型こども園ろばのこ保育園 保育士
 - ・後藤 さつき 先生 社会福祉法人西本本願寺常照園 保育教諭
- ④ 社会人になるにあたっての講演（2年冬学期）（12/26）
 - ・小里 樹実氏 四天王寺大学キャリアセンタースタッフ（本学保育科卒業生）
- ⑤ 児童養護施設に関する講演（1年冬学期）
 - ・中條 薫先生 社会福祉法人 児童養護施設 羽曳野荘 理事長・施設長
- ⑥ 障害者施設に関する講演（1年冬学期）
 - ・吉村 育美先生 児童発達支援センター「しょうとく園」発達支援管理責任者他3名
- ⑦ 保育科卒園式への学外来賓者（1・2年冬学期）
 - ・松本 千幸先生 社会福祉法人福文会 松の実保育園 園長 及び 本学非常勤講師
 - ・伊藤 美幸先生 本学非常勤講師（英語Ⅰ・Ⅱ）

(4) 科目間連携と実施時期

当学科では、「保育実践演習」と他の数科目間で科目間連携を行い、成果をあげていた。今年度を実施できたものを以下に記す。

- ① 「保育実践演習Ⅳ」と「保育・教職実践演習（幼稚園）」（2年冬学期）

文部科学省指定科目「保育・教職実践演習（幼稚園）」と当科独自の科目である「保育実践演習Ⅳ」を連携させている。教育効果を上げることをねらって、両科目を時間割上連続して開講している。そのため、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業内容として必要な、個人の教職に関する知識や技術についての課題の克服（出前保育での1年生へのアドバイス、行事経験を通しての役割分担等）、地域の保育現場及び子育て支援現場での実践的な活動を含み、2年間の学びのまとめとなる授業内容で構成している。
- ② 「保育実践演習Ⅳ」と「保育内容・表現（総合）」（2年冬学期）

昨年度同様、「保育内容・表現（総合）」（2年生対象授業）と連携し、「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」の中で『保育科卒園式』を実施した。『保育科卒園式』は、保育施設における卒園式を「表現の場」と捉え自分たちの卒園式を自分たち自身で作ること、そこで保育者、子どもたち双方の表現を学ぶことを目的に2014年から取り組んでいる活動である。

昨年度はコロナ感染予防のため、1年生全員はオンラインでの参加であったが、今年度は1年生も対面で参加し「保育実践演習」の授業内で行うことができた。今後も卒園式を「保育実践演習」と「保育内容・表現（総合）」の科目間連携を以って、保育科全員参加のもと実施する予定である。

③ その他

従来から行っている科目間連携として、1年生の出前保育の練習の期間は、「保育実践演習Ⅱ」と「小児体育Ⅱ」及び「音楽Ⅳ」と連携し、学生の表現力がよりいっそう習得できるように授業内容を配慮している。

3. 授業相互参観について

本年度の各教員の授業相互参観のための公開授業担当科目は以下のとおりである。

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり(○)	合評会(実施時期)
1	保育	原 祐子	11月13日	月	1・2	表現・総合	サブアリーナ		授業終了後
2	保育	奥野 孝昭	12月12日	火	4	小児体育Ⅱ	小体育館		授業終了後
3	保育	東 隆史	11月29日	水	2	プログラミング	4-158		授業終了後
4	保育	伊達 由実	11月13日	月	1・2	表現・総合	サブアリーナ		授業終了後
5	保育	韓 在熙	12月15日	金	3	教育原理	2-311		授業終了後
6	保育	梅野 和人	11月17日	金	1	子育て支援	6-211		授業終了後
7	保育	奥 千恵子	11月17日	金	2	音楽理論	6-251		授業終了後
8	保育	吉田 郁	11月13日	月	1・2	表現・総合	サブアリーナ		授業終了後
9	保育	明石 英子	11月8日	水	1	保育内容 人間関係	6-352		授業終了後
10	保育	内本 久美	11月13日	月	1・2	表現・総合	サブアリーナ		授業終了後
11	保育	斎藤 奈都美	11月17日	金	2	音楽理論	8-201		授業終了後
12	保育	岸和田かおり	11月13日	月	1	乳児保育Ⅱ	6-352		授業終了後

4. 学科独自の取組について

(1) 公立受験対策勉強会の実施と「社会福祉特別講義Ⅰ」への保育科学生の受講

公立受験希望者への指導は、当初はオンライン(ZOOM)やメールでの指導を行うとともに、受講希望者に対面での面接や実技等の試験対策指導を行った。保育科教員全員が其々の専門性を生かし、受験内容に応じて個人指導を行った。また、公立希望者同士の学び合いの場として、集団討議・グループワークなどの集団で行った。そのことにより、自分の良さに気付き、他学生の姿に触れ、学びが深まったように思われる。

数学分野については、教育学部の原田三朗先生の「算数」の授業15回を実質的に公立受験対策の指導に充てていただいた。

その結果、今年度は、大阪市5名、松原市1名、岩出市1名の3つの地域で、実質7名の合格者を出すことができた。

さらに、今年度も1年生への公立受験対策として、人間福祉学科健康福祉専攻が東京アカデミーと協働して開講している夏学期の集中講義「社会福祉特別講義Ⅰ」(石田晋司先生担当)を引き続き保育科の1年次生も受講できる形にさせていただき、合同開講にさせていただく

こととした。1年次から将来の保育者としての自分の姿を意識することで、卒業までの学びに向き合う姿勢が大きく変わったと思われる。

(2) 高大連携事業の実施

奈良県立桜井高校普通科保育コースとの高大連携授業は、6月、11月の2回実施した。

6月は「保育における子ども理解」と題して授業を実施した。保育科1、2年生の桜井高校卒業生4名が参加し、高校生と共にゲームを楽しんだあと、教員からゲーム遊びとつながりながら、子どもとのコミュニケーションや理解のあり方、また保育とは何か、保育者になるために必要な事などについても話した。授業後半には、卒業生から話をすることとし、1年生は短大での学び、2年生は実習経験などを踏まえ、自身の専門的な学びについて話し、保育の魅力の後輩たちに伝えた。卒業生と交流することで、より興味・関心をもてた様子が窺えた。

11月は「児童文化」についての授業を行った。児童文化には3つの特徴があり、それを経験することで子どもの望ましい発達が促され、豊かな文化を創造する担い手作りとなることを目指していることを話した。その中の「大人が作って子どもに与える文化」では手袋シアターやペープサートを紹介し、秋の自然物としてのどんぐりを使った保育を知らせた。どんぐりを使ったじゃんけんゲームや数遊びを生徒同士で楽しみ、「社会性の育み」「数の対応」などを遊びの中で身に付けられるようにした保育の在り方を実感することが出来たと思われる。その後、「子どもが創造する文化」として、どんぐりストラップを自分たちなりに工夫して制作することにより、日本の文化を継承しながらも新しい文化を創造する大切さを伝えた。以上、保育の楽しさが伝わり進路選択の一助になっていれば幸いである。

桜井高校の卒業生が高大連携事業の連携授業に参加した意義は大きく、桜井高校からも高い評価を得ることができたと考える。

今後も保育科で学んだ学生が母校でその学びを活かし、またそれが高校生にとっても有意義かつ保育科への志が高まるような高大連携授業を、対象高校を拡大し行っていく予定である。

(3) ルーブリック評価導入への具体的検討（造形）

「図画工作ⅠⅡ」「保育内容・表現」ともに対面で授業を行った。正確で、公平な成績評価が、学生の学習意欲を増すと考えて、授業の單元ごとにどこに観点を置いて評価するのかを明確に伝えて、作り始めることを大切にした。授業の課題作品は昨年同様に自身で写真を取りIBU netの学習成果可視化「造形ポートフォリオ」にコメント、日時とともにアップした。そして、ほぼ100%の学生が活用することができた。

授業の回数とともに積み重なってたまっていく作品の写真を見ることで教員も学生もその学びを可視化でき、評価が適正であると納得できたように思う。

伝える評価の観点をより分かりやすく伝えられるように今後も努力したい。

(4) 2年生「保育探究演習」授業と「学びの発表会」の実施

2年生（3セメスター）開講の「保育探究演習」は、卒業必修科目として、学生が6つの

保育テーマ（「多文化保育」「野外活動」「音楽アンサンブル」「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」）から1つを選択し、そのテーマに基づいて保育を自らの興味や関心に沿って深めることを目的とし、また、学生が主体的・協働的に学ぶことを通して質の高い保育の専門性を育むことを目標として2020年に設定した保育科独自の科目である。

「保育探究演習」の授業方法の特徴をまとめると、①学外での学びを取り入れ、より実践的に保育を学ぶことができるようにすること、②15回の開講を時間割上設定しているが、その時間割にこだわらず柔軟に開講時間を設定することで、学外での学びの成果が高まるようにすること、③学生の自主的な学びが行われるよう、外部講師の講演を取り入れたり、少人数グループでより実践的に深く学ぶ内容を予習したり、学外の学びの現場においても保育者などの具体的な話を聞きながら学ぶことができるにすること、④夏学期の「保育探究演習」のテーマごとに学んだ内容を報告する発表会を「保育実践演習」（Ⅱ・Ⅳ）授業において開催し、2年生全員で学びを共有するとともに、1年生にその学びの成果と自主的に学ぶことの楽しさや保育・幼児教育のよさを伝えることができるようにすることである。

（5）韓国新丘大学学生との異文化交流における学び

本学とMOUを締結している韓国新丘大学の保育科学生との異文化交流を通しての学びである。まず、2023年8月2日から8月5日（3泊4日）まで韓国新丘大学学生（5名）が本学を来訪し、保育科学生との交流会、大学施設の見学、四天王寺悲田院こども園及び子育て支援セターふるいちを訪問し、子どもたちとの触れ合い活動を行った。また、本学学生たちは、日本の保育文化を伝えようと、韓国語に翻訳したパネルメッセージの歌を披露したり、食文化体験として日本のたこやきを一緒に作る等、言葉の壁を乗り越えて心を通えるような多様な活動を企画して迎えた。

一方、本年度の保育探究演習（多文化保育）の受講生（8名）は、多文化保育に関する基礎的知識を学習した上、9月15日から9月17日（2泊3日）まで韓国新丘大学での学生交流や韓国の幼稚園及び保育所を見学する等、韓国保育文化の体験活動を行った。特に、9月16日は日韓の学生たちが主体的に計画した韓国文化体験のフィールドワークを行った。本活動の準備・進行・まとめの学習過程においては主題的・協働的な学習方法を用いて行っている。

日韓の学生たちにとって、お互いの言語での挨拶や自己紹介、両国の保育文化の手遊びや歌、お互いの伝統文化の紹介、さらには保育における共通課題について質問し合いながら両国の保育情報を得る等、多くの学びと感動のある交流となった。言葉の違いを超えて、お互いが学び合い、笑顔があふれる楽しい活動であったが、特に、活動終了後の参加学生の感想には、

「この多文化保育の授業を通して、日本と韓国のお互いの文化を理解しその違いを尊重したり、認め合うことの大切さやおもしろさを感じることができました。このような様々な経験や学んだことを忘れず、多様化が進む現代社会や保育現場でも役立てていきたいです。」「多文化保育の授業を通して、海外の保育方法や、日本で取り込まれている多文化保育を学ぶことができました。授業で聴いたこと以外に実際に見て学んだこともたくさんあるので、現場に出たときに活かしていけるように頑張りたいと思います。」「多文化の授業を通して異文化

について考えることができ、保育現場に出たときのかかわり方がたくさん知れたので勉強になりました。」等、学生自らの多文化体験を通してお互いを配慮・尊重することの大切さや文化の多様性について気付いた内容が多く書かれていた。このような経験は、将来の保育現場において、多様な文化を背景にもつ子どもや保護者とのかかわりにおいて生かせる保育者の専門性としての学びとなっていると考える。

最後に、日本においても多文化社会が進む中、本活動を通して、将来保育者としての「気づき」や役割について考えることができ、現場で活かせる学びとなっていると考える。

また、「保育探究演習」授業で学んだことを「学びの発表会」を通してみんなと共有することで、学生が自らの学びを振り返り、その意義や重要性、さらなる課題を再確認することは、文部科学省が提示している教職実践演習の内容とも合致していると考える。

6. まとめにかえて

新型コロナウイルス感染症が第5類感染症の位置付けとなり、学内における全ての授業を対面で実施することができるようになったとは言っても、想定外に次々と生じてくる問題に対し、「コロナのせい」という合言葉で片付けてしまいながら1年が過ぎた。

何より、対面授業経験の少ない中学高校生活を過ごしてきた学生に向き合ってみると、「保育実践演習」の授業で「慈愛に満ちた保育者」の資質として必要な能力を得ることをねらいとしているのに、コロナ以前とは同様には進められないということを痛感した。

この授業では、従来、保育者の大切な姿として学生個々の知識・技術習得を通しての専門性、協働的な学びを通しての社会性や豊かな人間性を培うよう育みたいと願っていた。しかし、先ず現状の学生の様子や様々な課題に対して、その変化を受容することが必要で、コロナ禍を過ごした学生に寄り添い尊重し、一人一人丁寧に向き合い、新たな教育の方策を模索する機会にしていくことが急務であると全教員が体感し、共有した。

今後、保育者を希望する学生の減少もあり、ますます越えねばならないハードルが高くなると予想されるが、保育現場や地域と連携した学修活動を通して学生の自主的・主体的な学びになるにはどうしたら良いか、諦めず粘り強く探究を続けたい。

短期大学部 ライフデザイン学科

1. はじめに

2022 年度に学科名がライフデザイン学科に改まって1年が過ぎた。それに伴い8つのフィールドも「ビジネス・ICT」「医療事務」「フード」「ファッション」「インテリア」「トータルビューティ」「ブライダル」「グローバルカルチャー」に変わり、在学生や高校生のニーズに合う内容に変わりつつある。また多くの授業が資格とリンクしているのは従来通りである。今年は「ファッション」フィールド担当者に新しい専任教員が着任し、地域連携活動にも例年以上に力が注がれている

もう一つの社会的な出来事として、新型コロナウイルス感染症が2023年5月8日から5類感染症に移行し、2020年から続いた感染症対策が終了することになった。本学における授業もほとんどが従来の対面授業に戻った。ライフデザイン学科は、元々実習・演習系の授業が多く、メイクアップ実習のようなマスクを外さないとできないような演習もあり、授業をする上で大きな足枷となっていたが、5月以降は神経質になることなく授業を受けられるようになった。学生も徐々にマスクなしの生活に戻りつつある。

2025年度に改まる事から入学定員数の減少がある。2024年4月にライフデザイン学科に入学した新入生の数は、定員100人に対して75人である。短大全体でみても定員220人に対して119人であり、充足率は54%である。少子化で学生数が減少する中、大学志向、短大離れの傾向に歯止めがかからず、この先も増加に転じる見込みはない。そのため2025年度から、短期大学部全体の定員が80人、ライフデザイン学科の定員は40人となる。少ない学生数に対して、今後さらにきめ細やかな指導をしていく必要がある。

2. 初年次教育科目（ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ）について

2022年4月に学科名がライフデザイン学科に変更されたのに合わせて、初年次教育科目の内容についても見直しが行われた。ライフデザイン・ゼミナールⅠでは、ライフデザイン学科の2年間の学びや、ライフプランという概念を理解するための内容となっている。最初の数回は簡単なゲームなども織り交ぜて友達づくりをし、大学生活に馴染んでいくための内容となっている。残りの授業では、各フィールドでの過去の学習例や、人の一生がどのように描けるかといったライフプランを理解するための内容となっている。授業評価アンケートの結果を見ると、「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」という問いに対して、「そう思う」または「ある程度そう思う」と肯定的に回答した人数は65人（80%）だった。また「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」という問いに対しては70人（86%）が肯定的に回答しており、意欲的に授業に参加していたことが窺われる。具体的な学生コメントを見ても、「グループワークが多くて皆と仲良くなるきっかけができて良かった」「ライフデザイン学科の特徴を知ることができた」など、好意的な回答が寄せられた。

ライフデザイン・ゼミナールⅡでは、自己理解を深め、ライフプランとキャリアプランをどのように描くかについて学ぶ。そうすることによって、3月から始まる就職活動を円滑に進めることができるように配慮している。具体的には、履歴書や応募書類の作成、採用面

接試験対策、企業研究の仕方、就職活動時に必要なビジネスマナーなどである。授業評価アンケートの結果を見ると、「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」という問いに対して 67 人 (88%) が肯定的に回答しており、「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」という問いに対しては 70 人 (92%) が肯定的に回答している。学生コメントを見ると「就職活動について学ぶことができて良かった」「ためになる授業だった」「面接練習など、いろいろな練習ができた」等、就職活動に向けて心の準備ができつつあるようである。問題は、2 月以降に積極的に就職活動を行い、授業の成果をどれだけ活かすことができるかであろう。

3. 授業相互参観について

ライフデザイン学科では、必ず参観しなければならない授業を 1 つ選んで相互授業参観を行っている。今年は 11 月 29 日 (水) 1 限目の「アパレル衛生論」で行った。授業終了後合評会を行ない「話の構成がよくできている」などの好評価があった一方、「淡々と話しをせずにメリハリをつけ工夫した方がよい」「座席指定をした方がよい」などのコメントも寄せられた。

今年はその他にも情報処理特別演習に参観者が 1 人いた (12 月 11 日 (月) 4 限)。「MOS 受験に向けて、学生は各自で問題解答を行い、必要箇所で教員が指導をするなど、一人一人へのサポートが充実していた」等のコメントがあった。

更にショップディスプレイ演習の授業に非常勤講師の参観もあった (11 月 27 日 (月))。「雑誌を多く準備してあり、学生にとっては実際に手に取って見る機会が少ないようで、視野を広げるチャンスになる。また、“いいな”と思うものをピックアップしていくと共通点が見つかり、ショップのイメージとして使うことができるというアドバイスが分かりやすかった」等のコメントが寄せられた。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 資格取得について

ライフデザイン学科では授業と資格がリンクしており、様々な資格にチャレンジすることができる。表 1 に認定称号取得者数、表 2 に 2023 年度の学生の資格取得状況を示す。2022 年度は受験者数が延べ 225 人、合格者数が 171 人 (合格率 76%)。2023 年度は受験者数が 184 人、合格者数が 142 人 (合格率 77%) であり、合格率はほぼ同じだが、受験者数が減少している。学科の魅力をアピールするためにも受験者数を増やす努力が必要である。

表 1. 認定称号

認定称号	人数
上級秘書士	1
ビジネス実務士	15
食空間コーディネーター3 級	15

表 2. 資格取得

検 定	級	合格者数	受験者数	欠席者数
秘書技能検定	2 級	10	15	2
	3 級	2	2	0
ビジネス文書技能検定	3 級	13	15	2
サービス接客検定	準 1 級	6	6	0
	2 級	6	6	0
医療秘書技能検定	3 級	15	27	0
ドクターズクランク		2	2	0
MOS (WORD)		3	3	0
MOS (EXCEL)		5	5	1
MOS (PowerPoint)		9	10	0
色彩検定	2 級	7	11	1
	3 級	21	23	1
色彩技能パーソナルカラー検定	モジュール 1	4	4	1
食生活アドバイザー検定	3 級	6	6	0
日本メイクアップ知識検定	ベーシック	3	8	2
日本メイクアップ技術検定	2 級	3	3	0
	3 級	8	8	1
ファッション販売能力検定	2 級	0	0	1
	3 級	3	4	0
ファッションビジネス能力検定	3 級	1	1	0
アソシエイトブライダルコーディネーター		6	6	0
建築CAD検定	3 級	0	1	0

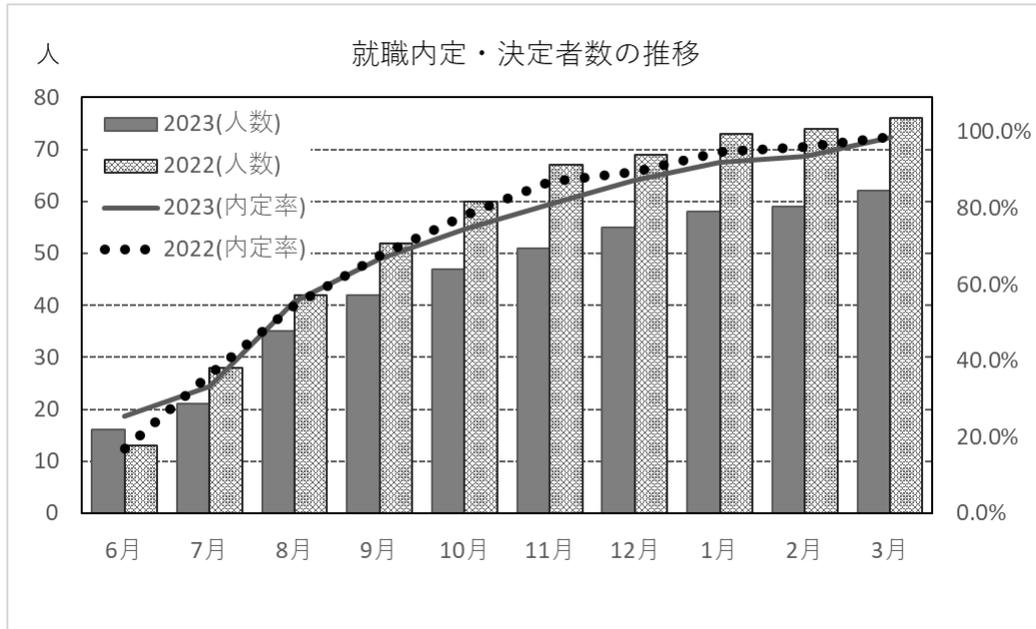
(2) 就職支援について

2024年3月の卒業生数は77人、そのうち63人が就職を希望し、62人が就職を決定している(4月6日現在)。就職率は98.4%である。なお文部科学省と厚生労働省が令和6年3月15日に発表した資料によると、2月1日現在の短期大学生の就職内定率は85.7%であり(前年同期比1.1ポイント低下)、ライフデザイン学科の同時期の内定率は93.7%なので、それより高い。昨年に比べると卒業生数が少ない分内定者数も少ない。内定率は9月までは去年と同程度の推移をしているが、9月以降はやや下回っている。

なお卒業生77人のうち、進学者数は4人(大学編入2人, 専門学校2人)であった。

2022年度は卒業生数93人に対して就職希望者数は77人(82.7%)、2023年度は卒業生数77人に対して就職希望者数は63人(81.8%)であり、就職希望の割合が若干減少している。本学科では「自分のライフプランを描けるようになる」ことを目標としているので、企業就職することが人生のすべてではないにしても、「自分の目標をみつけられるようになる」ための指導が今後一層求められる。

図3. 就職内定（決定）者数の推移



※ 3月の値は、2023年については4月6日現在の暫定値であり、2022年については5月末日の最終確定値である。

(3) ライフデザイン学科における地域連携活動

① ライフデザイン実践演習について

2023年5月に四天王寺大学が日本ライトハウス盲導犬訓練所と連携協力協定を締結したのを受けて、ライフデザイン実践演習ではプレボランティアデイを企画・実施することとなった。この催しは、盲導犬訓練所を支える種々のボランティアスタッフに交流の場を提供することを目的としており、2024年3月3日に本学東キャンパスにて実施された。ライフデザイン学科の学生はチャリティーグッズ等の制作・販売、盲導犬に関する〇×クイズ大会の運営を行った。学生が学修した8フィールドの知識・技能を活用して、企画力や課題発見力、実行力などの社会人基礎力を実践的に育成する機会となった。なお、プレボランティアデイは、日本ライトハウス盲導犬訓練所のスタッフの方々、他学部の学生ボランティアや教職員など、多くの人々の協力を得て実施されたものである。

② イタリア野菜パッケージ用シールデザイン

JA大阪市が進めるイタリア野菜のブランド化・普及に向けた取り組みへの協力として、大阪市内で生産されているイタリア野菜の出荷時のパッケージに貼付するシールのデザインを行った。5月18日にJA大阪市の担当者からイタリア野菜ブランド化戦略についての説明を受け、7月末にデザイン案を提出し、9月にシールが完成した。10月8日付の日本農業新聞に「イタリア野菜PR 学生がラベル製作 JA大阪市」として掲載された。11月の出荷分からパッケージに貼付されている。学生は商品販売戦略を具体的に学ぶだけでなく、そこに関わる多くの人の思いを知り、自らがそこに加わることの責任と喜びを実感した。

③ 公民館子ども料理教室

8月4日に羽曳野市立陵南の森公民館「夏休み子ども企画・料理教室」を開催した。学生は教室開催に向けて「小学生が作る夏のお菓子」をテーマにメニューを検討し、試作を通して子どもへの指導方法も考えながらレシピをまとめた。当日は材料の分配や調理器具の準備・片付けなど教室運営全般に関わり、調理においては学生2人が3人ずつの小学生の指導を担当するグループワークとして実施した。本学科で学んだ製菓の知識や技術を活用するだけでなく、予算や作業時間、公民館調理実習室の使用可能な調理器具、安全面など、多くの条件をクリアするための実践的な学びは、ジェネリックスキルを育成する有意義な機会となった。

④ 児童養護施設 高鷲学園の児童たちを対象にしたランチョンマットの制作とワークショップの企画

本活動は児童養護施設「高鷲学園」の児童たちを対象とした企画であり、人文社会学部と共同で行うプロジェクトの一環である。各イベントは本学のポタジェで収穫される「サツマイモ」を軸に計画された。本学科学生は、サツマイモの皮を使用した生地染色、ランチョンマットの縫製、そして制作したランチョンマットにステンシルをするワークショップを企画した。4月28日に高鷲学園の代表者から学生に向けて施設や入所児童たちについて説明を受けた後、学生はどのような内容のワークショップであれば、安全に、かつ児童たちが楽しく活動できるかを議論し制作物を決めた。まずは、ミシンを使用してランチョンマットを縫製し、7月1日に生地染色を行った。そして8月25日に児童たちを本学へ招き、ステンシルをしてオリジナルのランチョンマットを完成させるワークショップを開催した。

⑤ 10大学連携 繊維製品の廃材を活用したアップサイクル作品のファッションショーおよび百貨店販売

本活動は、関西でファッションを学ぶ10大学の学生と大学教員が繊維製品を扱う企業と協働しながら実施をした。その目的は、繊維製品によるゼロ・エミッションの実現に向けた情報発信である。アパレルメーカーや繊維業者などから提供された製品の廃材や古着を活用し、衣服やインテリア小物を制作した。この取り組みで制作した衣服は、8月23日京都文化博物館にて開催されたファッションショーにて、学生自らがモデルとなり、ランウェイで発表した。

また、8月29日～9月4日には「私たちのSDGs 2023～繊維製品の循環をめざして～part.2」(於：なんばマルイ)が開催され、ファッションショーにて発表された衣服やインテリア小物を販売した。さらに二日間に渡りトークショーが開催され、トーア紡マテリアル(株)のプレゼンテーションの司会・進行を本学科学生が務めた。なお、本イベントは、「京都新聞」「繊維ニュース」などに広く掲載された。

⑥ 古墳・弥生時代の衣装制作の試みと古墳関連イベントにおける衣装発表

基礎的な縫製の知識だけでなく、地域に根ざした文化を知ることが目的に、弥生・古墳時代における庶民の衣服「貫頭衣」を制作した。写真資料などから同時代の生活や

文化を想像し、異なる9つのデザインでコーディネートが完成した。これらの衣装は、8月27日にLICはびきのにて開催された「第5回 埴輪づくりコンテスト 828 グランプリ」の表彰式にて、教育学部の学生による「古墳音頭」を披露する際に着用された。

第4章 本学における仏教教育について

I 基礎教育科目「和の精神」について

1. カリキュラム上の位置づけとその課題

本学における「基礎教育科目」は、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神を実践的に学ぶ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（1年次）、仏教の学識の基礎の修得と宗教的情操の体得をめざす「仏教概説」（1年次）を柱とし、これに人間存在のかけがえのなさを考える「現代社会と人権」を加えた、4科目6単位が必修科目となっている。なお、平成30年度の入学生以前の旧カリキュラムでは、基礎教育科目は「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」「仏教概説」「現代社会と人権」の4科目6単位が必修であった。とりわけ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（計2単位）は、大学・短大の1年次の全学生1,200名以上が礼服（オフィシャルスーツ）を着用し、学長を始めとして全教員とともに大講堂に会し、読経・瞑想・聞法（講話）・写経（後期のみ）・聖歌斉唱といった実践的な授業を行っている。これは規模的にも内容的にも、本学における特色ある科目の一つである。各学科専攻で行う専門的な学修を果実とすれば、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」のめざす人格の涵養はその根底といえる。

平成24年度から仏教文化研究所が設立され、学長のもと、主任研究員を中心に、数名の研究員が本学の仏教教育の方針や内容を策定し、宗教委員会の議を経て、企画立案・実施・点検を行う体制が整い、令和5年度で10年目を迎えた。下記に示す「和の精神 授業規律」「講話内容」「アンケート」等はその体制のもとですべて整えられたものである。

もともと、本科目は1,000名を超える超大人数授業であるため、実施する上での課題（資料の提示方法、音響、空調、出席・成績管理、個別指導のあり方など）も少なくない。そのため運営・管理には教育職員・事務職員の全学的な協力が必要であり、とりわけ授業実践の「道場」である大講堂内では各学科専攻の教育職員の積極的な取り組みが不可欠となっている。

2. 大講堂内における指導体制

平成25年度の後期から、これまで明確とはいえなかった大講堂内における教員の指導の役割を検討し、下記のとおり明確化して、毎学期の宗教委員会・合同研修会などで周知徹底を図り、現在に至っている。

(1) 総責任者 学長

学長は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容・運営の全体の監督、教育内容・方法および運営の総責任者である。教育内容・方法および運営については、学長が仏教文化研究所に指導方針案の策定を指示し、宗教委員会の検討を経て決定するものとする。

(2) 全体担当 仏教文化研究所研究員

仏教文化研究所研究員は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容の進行・運営について、所定の指導方針に沿って主導的な立場で従事し、出席や授業態度にもとづいて最終的な成績評価

を行う。

(3) 学科担当 (1) (2) 以外の全教員

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業は、全教員の指導によって行うものである。各学科担当の教員は、学科専攻学生に身近な教員として、主に堂内における私語・中座など授業態度の改善や静謐な環境の保持の面において、所定の方針および学科の取り決めに従い、注意喚起や個別指導に当たる。

(4) 宗教委員

宗教委員は宗教委員会に学科専攻の状況を伝えるとともに、委員会での決定事項を学科専攻に伝え、学科長とともに学科専攻での指導の在り方を取り決める。

令和5年度の授業実施については、コロナ禍の中にあつて、1,000人を超える学生を大講堂に一堂に集めることに感染症予防の観点から大きな懸念があつたため、「和の精神Ⅰ」は、学部単位で対面授業とオンデマンド授業を隔週で併用して実施した。

3. 「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業中における授業規律について

仏教文化研究所において平成24年度に「『仏教』の授業規律」を策定し(平成24年度末・令和元年度末に一部改定)、平成25年度からは、毎年『履修要覧』に掲載している(下記参照)。以後、各学科専攻のオリエンテーションで学科ごとに指導の姿勢を示してもらふよう要請し、かつ学期初めに「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の冒頭に改めて教務部副部長(礼拝担当)より「和の精神 授業規律」を示し、学生に規律の自主的な遵守を求めてきた。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」は自他を尊重し、思慮深く、安定した人格を養うことが主眼であり、強制によって規律を守らせるのが本意ではなく、授業の主旨として、学生が主体的に自覚して上記の規律の遵守を心がけることの重要性を強調している。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業規律 (令和2年2月26日一部改訂実施)

礼儀を正して静穏な環境で自らを省み、自他を尊重し、思慮深い安定した人格を養うことが「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の目的です。主旨を自覚し、下記の規律を遵守してください。

1. 単位の認定は、全授業回数のうち3分の2以上の出席を必要条件とする。
写経の場合、写経用紙の提出も必要条件とする。なお、以下の2・3・4の項目に違反する場合は出席を認めない。
2. 出席時の服装は、指定された服装を端正に着用する。
 - ・Aタイプ・オフィシャル・スーツ (ジャケット・ジャケット用スカート)、白色ブラウス、黒色の革の短靴。
 - ・Bタイプ・オフィシャル・スーツ (ジャケット・ジャケット用スラックス)、白色

ブラウス、黒色の革の短靴。

- ・ Cタイプ・オフィシャル・スーツ（スーツ用ジャケット・スーツ用スラックス）、本学指定ネクタイ、白色カッターシャツ、黒色の革の短靴。

※Aタイプ・Bタイプで夏服時に襟なしシャツ着用の場合、オフィシャル・スーツのジャケットを着用すること。

※黒色の革の短靴：くるぶしにかからないもの、スニーカー不可、就職活動やインターンシップで着用するようなカジュアルでないもの。

3. 入堂時には『聖典聖歌集』を所持していることを示す。
4. 授業は午前 10 時 55 分開始である。開始前には入堂し着座しておく。
 - ・ 遅刻は駅で発行する電車の延着証明書があり、やむを得ない遅刻と判断される場合にのみ入堂を認める。
 - ※原則として、電車以外の延着は認めていません。
 - ・ 延着証明書は 1 人 1 枚を必要とする。複数人で 1 枚しかない場合は、入堂を認めない。
5. 授業中は姿勢を正し、静寂を守り、実践に集中する。
6. 授業中の私語・通信機器等の使用は禁止する。
 - ・ 注意されたら、すぐに改める。
 - ・ 再三の注意にかかわらず改めない者については、授業妨害と見なし、改善が認められない場合は、欠席扱いとし、保護者にも教務部より状況を伝える。
7. 授業中の中座は原則として禁止する。
 - ・ やむを得ず手洗い等を利用する者は、学生証を階段前の教員に提出する。
8. 心身の疾患など、やむを得ない中座の理由の有る者は、診断書などの証明書をもって学生支援センターに授業配慮申請を行うか、教務部教務課（礼拝担当）に申し出る。座席変更などの配慮も行う。
9. 私語・通信機器等の使用・中座等について、改善の意思がない場合は、「授業妨害」「建学の精神に反する行為」と見なし、その学期の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の履修登録を抹消する。

4. 和の精神Ⅰ・Ⅱにおける改善

平成 24 年度から、これまで 2 年間にわたって履修した「仏教Ⅰ～Ⅳ」が 1 年次の「仏教Ⅰ・Ⅱ」のみとなり、時間的には短縮化された。しかし、そのことによって教育内容が希薄とならないよう、これまでと同様に、その点に留意した授業計画を組んで「和の精神Ⅰ・Ⅱ」に継承している。「和の精神Ⅰ・Ⅱ」各科目の留意点、講話一覧は以下の通りである。

① 「和の精神Ⅰ」（夏学期）

「和の精神Ⅰ」では、基本的にはこれまでの通り、「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」を基本として、授業を実施した。ただし、今年度はコロナ禍への対応として、先述のように、

学部ごとに隔週で対面・遠隔の併用方式で授業を実施しており、対面授業の際には読経・聖歌斉唱に関して学生は心の中で唱える形で行っており、聖歌の斉唱指導は実施しなかった。

講話については、第2回目の授業での学長による「本学の『建学の精神』及び全体的な仏教精神に関する講話」を受けて、研究員による一貫性のある講話を基調に据えながら、将来のキャリアと「和の精神」とのつながりを説く内容など講話の充実を図っている。また、例年は初回の授業から、本山四天王寺において開催される「授戒会」のオリエンテーションも行い、参加に向けての心構え等も指導している。なお、今年度の授戒会も、コロナ禍にあることから、学科ごとに割り当てられた大学内の各会場にて、大講堂で行われる様子をモニターで視聴しながら実施する遠隔方式での分散実施となった。

「和の精神Ⅰ」で行われた講話は次の通りである（敬称略。なお、☆は仏教文化研究所構成メンバーである）。

<夏学期実施 和の精神Ⅰ>

No	日程	対面	担当者	講 話／聖 歌
1	4/6	1	藤谷 厚生☆ 奥羽充規☆	受講ころえー授業規律に関して/礼拝説明 授戒オリエンテーション 聖歌<聖徳太子讃仰歌、四恩の歌、精進>
2	4/13	2	須原 祥二(学長) 藤谷 厚生☆	『和の精神』で学ぶこと 『ウパーヤ』について 聖歌<聖徳太子讃仰歌>
3	4/20	1	杉中 康平☆ 伊達 由実	『和の精神』を学ぶ意義 「学修ポートフォリオの目標設定について」 「大学生活の心得」 聖歌<精進>
4	4/27	2	奥羽 充規☆	「読経概論・瞑想 一心を整える楽しみ」 聖歌<父母の歌>
5	5/11	1	坂本 峰徳 (常務理事)	「建学の精神と聖徳太子」 聖歌<父母の歌>
6	5/18	2	成田 由岐子	「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 聖歌<常不軽菩薩>
7	5/25	1	中田 貴眞☆	「学園訓ー礼儀について」 聖歌<常不軽菩薩>
8	6/1	2	上野 舞斗☆	「学園訓ー誠実について」 聖歌<みめぐみの>
9	6/8	1	矢羽野 隆男☆	「学園訓ー和について」 聖歌<みめぐみの>

10	6/15	2	南谷 美保☆	「仏像を知ろう」 聖歌<聖夜>
11	6/22	1	仲谷 和記	「薬物乱用の害について」 聖歌<聖夜>
12	6/29	2	原 祐子	「聖歌」について 聖歌<学園歌>
13	7/6	1	若松 正晃☆ 学生有志	「グローバル教育研修と和の精神」 聖歌<学園歌>
14	7/13	2	高橋 麻起子 (保健管理センター)	「性感染症の予防について」 聖歌<聖徳太子讃仰歌>
15	7/20	1	杉中 康平☆ 藤谷 厚生☆	「学修ポートフォリオの記録について」 夏学期を終えるに当たって 聖歌 (聖徳太子讃仰歌)

対面) グループ 1 ; 教育学部・経営学部・看護学部、グループ 2 ; 人文社会学部・短期大学部

② 「和の精神Ⅱ」(冬学期)

「和の精神Ⅱ」は「和の精神Ⅰ」の「礼拝(瞑想)・講話・仏教聖歌の斉唱」に写経を加え、より実践的に仏教について学べるようにしている。これは、平成24年度から2年間の「仏教Ⅰ～Ⅳ」が1年間の「仏教Ⅰ・Ⅱ」に短縮されたのを受け、従来、「仏教Ⅲ・Ⅳ」ではもっぱら写経だけを行っていたものを、写経だけでなく、講話等も行うことにし、「和の精神Ⅱ」に継承されたものである。ただ講話の時間が写経の時間を圧迫しないように配慮する必要から、写経の時間を最低20分は確保すべく、講話は10分～15分ほどに短縮することとしている。

「和の精神Ⅱ」で行われた講話は次の通りである(敬称略。なお、☆は仏教文化研究所構成メンバーである)。

<冬学期実施 和の精神Ⅱ>

No	日程	対面	担当者	講 話/聖 歌
1	9/21	2	仲谷 和記 藤谷 厚生☆	「写経の効果」 「冬学期授業について」 「ウパーヤについて」 聖歌『聖徳太子讃仰歌』
2	9/28	1	福光 由布	「写経の仕方・作法」 聖歌<聖徳太子讃仰歌>
3	10/5	2	上野 舞斗☆ 学生編集委員	『卒業生インタビュー』から考える 『和の精神Ⅰ・Ⅱ』の意義 聖歌<父母の歌>

4	10/12	1	奥羽 充規☆	「写経について」 聖歌<父母の歌>
5	10/19	2	南谷 美保☆	「写経と『経供養』」 聖歌<四天王寺学園 学園歌>
6	10/26	1	上續 宏道☆	「聖徳太子と福祉の心」 聖歌<四天王寺学園 学園歌>
7	11/9	2	藤谷 厚生☆	「聖徳太子の教えと言葉」 聖歌<四天王寺大学学歌>
8	11/16	1	グローバル教育センター (学生・奥羽)	「仮：異文化を通して学んだこと」 聖歌<四天王寺大学学歌>
9	11/30	2	若松 正晃☆	「“pilgrimage”とお遍路」 聖歌<みめぐみの>
10	12/7	1	和田 良彦 (副学長)	「人権について」 聖歌<みめぐみの>
11	12/14	2	矢羽野 隆男☆	「学園訓『誠実』について」 聖歌<聖夜>
12	12/21	1	李 美子 杉中 康平☆	「学園訓のエピソード入力について」 聖歌<聖夜>
13	12/28	2	明石 英子 展示内容企画・作成学生	南谷先生 聖歌<父母の歌>
14	1/4	1	中田 貴眞☆	「和の精神 -花と暮らす-」 聖歌<父母の歌>
15	1/11	2	須原 祥二 (学長) 藤谷 厚生☆	「終講にあたって」 「まとめ」 聖歌<聖徳太子讃仰歌>

対面) グループ 1 ; 教育学部・経営学部・看護学部、グループ 2 ; 人文社会学部・短期大学部

5. アンケートの実施

令和5年度は「和の精神Ⅰ」のアンケートを1回、和の精神Ⅱのアンケートを1回実施した。令和5年度入学の学生と再履修生を対象としている。

<和の精神Ⅰ>

設 問	5 年度		4 年度	
	大学	短大	大学	短大
1. 授業での先生の説明は分かりやすかったですか。	4. 15	4. 24	4. 32	4. 07
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	4. 17	4. 31	4. 29	4. 18

3. 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等の ICT が活用されていましたか。	3.93	3.97	4.27	4.21
4. 先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	3.43	3.32	3.81	3.40
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	2.92	2.73	3.45	2.82
6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	3.74	3.86	4.07	3.63
7. 授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	3.33	3.42	3.71	3.03
8. 毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。※5 択「4.5 時間より多い」「4.5 時間以内」「3 時間以内」「1.5 時間以内」「30 分以内」	—	1.66	—	1.44
8. この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか？	4.05	—	4.29	—
9. あなたは、履修要覧の授業科目編成表にあるディプロマ・ポリシーの「身につけるべき能力」をよく読んだ上で、この授業を受講しましたか。	—	3.56	—	3.38
9. この授業 1 回分に対する予習・復習等について平均してどのくらいの時間をかけましたか？	1.57	—	1.51	—
10. あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	3.90	4.02	4.13	3.93
10. この授業を受けて、シラバスに明示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか？	3.99	—	4.18	—

<和の精神Ⅱ>

設 問	5 年度		4 年度	
	大学	短大	大学	短大
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	4.14	4.17	4.16	4.09
3. 授業の学習効果を高めるためにパソコン、スマホやインターネット等の ICT が活用されていましたか。	4.02	4.12	4.25	4.25
4. 先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	3.54	3.57	3.96	3.51
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	3.12	3.08	3.54	3.08

6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	3.75	3.85	3.97	3.78
7. 授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	3.50	3.54	3.77	3.43
8. この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか。	4.12	4.19	4.23	4.25
9. 毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。※5 択「4.5 時間より多い」「4.5 時間以内」「3 時間以内」「1.5 時間以内」「30 分以内」	1.77	2.08	1.80	1.81
10. この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標にどの程度到達できたと思いますか。	4.06	4.10	4.12	4.04
11. あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	3.94	4.12	4.14	3.98

II 共通教育科目「仏教実践演習」について

1. 「仏教実践演習」の目的と授業展開

この科目は旧カリキュラムの基礎教育科目「仏教Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（卒業必修科目）が、平成24年度からの新カリキュラムでは「仏教Ⅰ・Ⅱ」（同上）に圧縮されるのに伴い、旧Ⅲ・Ⅳで行っていた内容を行いたいという学生や、さらに深い学びを希望する学生のために、共通教育科目における選択科目（3セメスター以上配当）として設けた科目である。仏教実践の背景にある仏教の思想についても考えながら、瞑想・写経の意義や実践の方法を説明し、Ⅰ・Ⅱで学んだ実践行をさらに深めてゆくものである。

夏学期の水曜2限に1コマ、講堂において、聖徳太子像の掛け軸を掛け、読経・瞑想・講話・写経などを行い、聖歌斉唱を行わないほかは「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と同様の形式で実践的な授業を展開している。

2. 授業内容

講話内容は、仏の智慧をめざす修養方法である六波羅蜜に関するものを中心に、日常生活での実践に有用と考えられる仏教の教えに関する講話を行っている。また、令和5年度も「お遍路さん」といった具体的な仏教実践行についての講話も行った。

以下では各回の講話を掲げる（敬称略）。

<講話一覧>

No.	担当者	講話
-----	-----	----

1	藤谷 厚生・中田 貴眞 藤谷 厚生	出席・課題レポートなど説明(5分) 仏教実践とは
2	藤谷 厚生	六波羅蜜について
3	西岡 秀爾	布施波羅蜜—慈悲を施すこと—
4	藤谷 厚生	持戒波羅蜜—戒律を守ること—
5	西岡 秀爾	忍辱波羅蜜—苦難を忍ぶこと—
6	中田 貴眞	私と仏教—聖地巡礼—
7	西岡 秀爾	精進波羅蜜—努力を重ねること—
8	西岡 秀爾	禪定波羅蜜—精神を調えること—
9	藤谷 厚生	般若波羅蜜—仏教実践と智慧
10	西岡 秀爾	聖徳太子の教え
11	西岡 秀爾	般若心経の教え
12	中田 貴眞	私と仏教②—巡礼と仏—
13	中田 貴眞	私と仏教③—巡礼実践—
14	藤谷 厚生	菩薩と和の精神
15	藤谷 厚生 中田 貴眞	仏教実践演習 (まとめ) レポート等提出について(5分)

Ⅲ 仏教教育に関するその他の取り組み

1. 仏教文化研究所の活動

平成 24 年度から、当時の西岡研究所所長（学長）の下、主任研究員（矢羽野）および研究員（上續・兼子・藤谷・源・桃尾・南谷恵敬）が任命された。研究所内には仏教教育センターが設けられ、研究所の主任研究員・研究員がセンターの構成員を兼務し、本学における仏教教育の内容・方法を検討し実施していく体制が作られている。平成 28 年度からは、学長の岩尾洋研究所長のもと、坂本光徳、杉中康平、奥羽充規の三氏が研究員に加わり、あらたな一歩となった。さらに平成 29 年度は、中田貴眞、南谷美保の 2 名が加わった。また、平成 30 年度からは石田陽子、令和 2 年度には李美子、そして令和 3 年度には上野舞斗、令和 5 年度には若松正晃が加わり、現在は主任研究員（藤谷）の他 9 名の研究員（専任教員）により、さらなる研究の充実を目指し、積極的に活動している。

研究所の具体的な活動としては、「和の精神 I・II」授業計画の策定、堂内の全体指導および指導体制の検討、提出された写経の点検評価、仏教教育広報誌「ウパーヤ」の編集発行等である。広報誌「ウパーヤ」は、本学の建学の精神や仏教の教学を身近に感じ、理解を深めてもらうことを目的に年に二回発行し、大・短の在学生・学園教職員および保護者へ配布するもので、令和 5 年度には 23 号・24 号を発行することができた。1 年次の学生には入学直後のオリエンテーションで配布し、「和の精神」（仏教教育）の涵養に役立てている。

特に「ウパーヤ」のトピックである「聖徳太子のゆかりの地めぐり」のコーナーでは、平成26年度から学生編員を募集して取材・執筆を依頼している。23号・24号でも引き続き学生編集員がウパーヤ誌上、研究所HPに学生ならではの観点で記事を執筆してくれた。今後も仏教に対する学生の興味関心を深める活動として継続していきたい。

2. 今後の取り組み

建学の精神を学部・学科・専攻の学修のなかに具体化し、理想とする学生を世に輩出していくことは、私学の最も重要な目的であり、また社会的な使命でもある。本学でも「アドミッション・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「ディプロマ・ポリシー」の三つのポリシーにおいて、聖徳太子の仏教精神を各専門教育の根幹に据えた教育を展開していることを明記し内外に公表している。

これまでも、各学期初めのオリエンテーションや大学1年次の「大学基礎演習」においては、建学の精神に関わる内容を組み込むことを各学科に要請してきた。今後も、「和の精神」を体現する様々な取り組みや活動を紹介し、大学全体での建学の精神の浸透に励みたいと考える。

令和元年度から、「学園訓」を体現し、実践できる人材を育成することを目指して、それまでの「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業科目名を「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、その内容の充実と建学の精神の涵養を図るよう引き続き取り組んでいる。

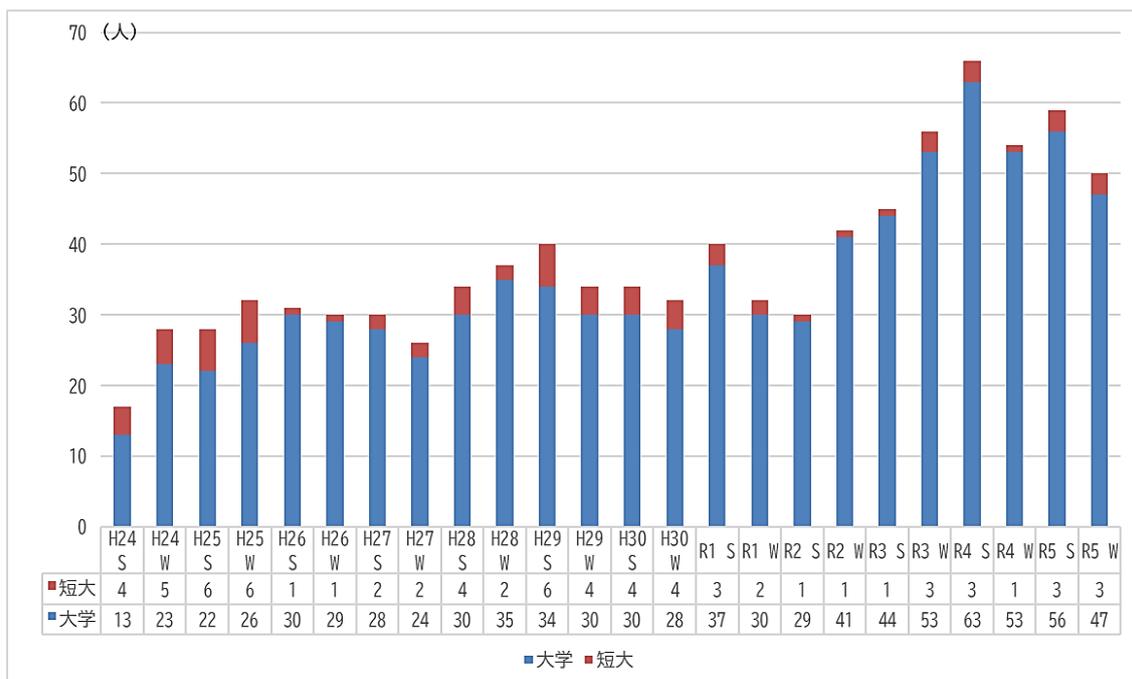
今後も「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業では、仏教文化研究所メンバーによる仏教関係の講話を主軸にし、その本質の部分を大切にしながら、聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を核として学べるよう、さらなる授業の充実と工夫に努めていきたい。

第5章 学生支援センターが取り組む学生支援について

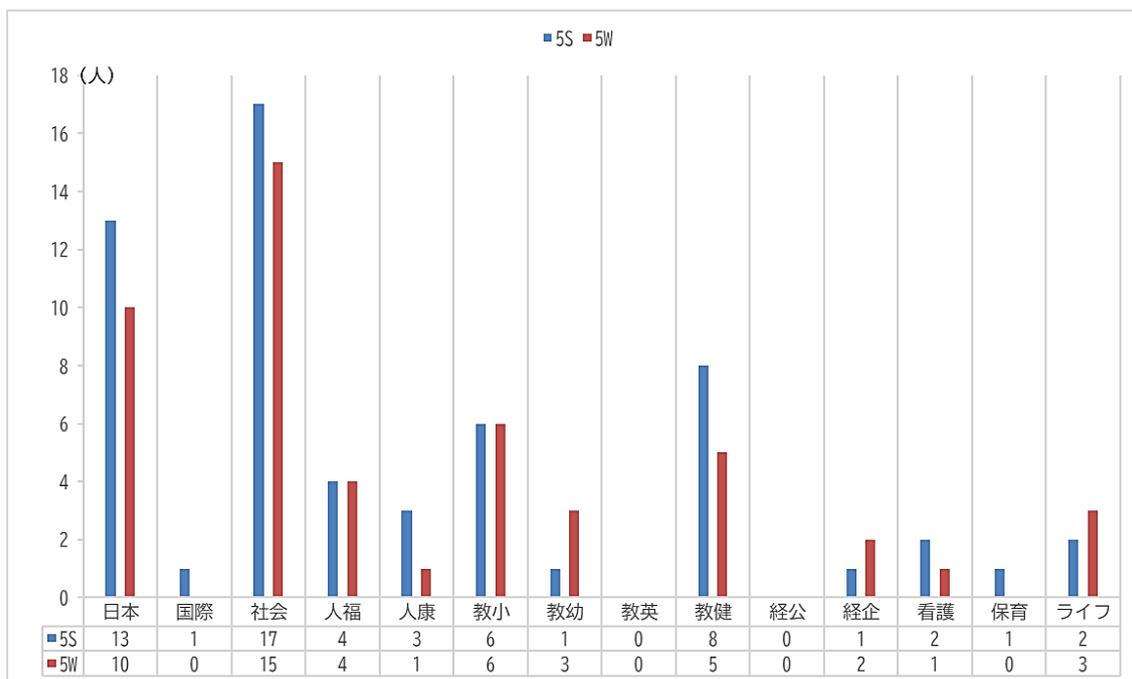
1. 障害学生への「授業配慮システム」の実施状況について

新型コロナウイルスの影響もようやく去り、対面での授業が始まることで、精神的不調を訴える学生の相談が増加したり、コロナ禍で実施されたオンラインやオンデマンドでの受講継続を望む学生も少なくなかった。令和5年度の授業配慮件数等については以下の通り。

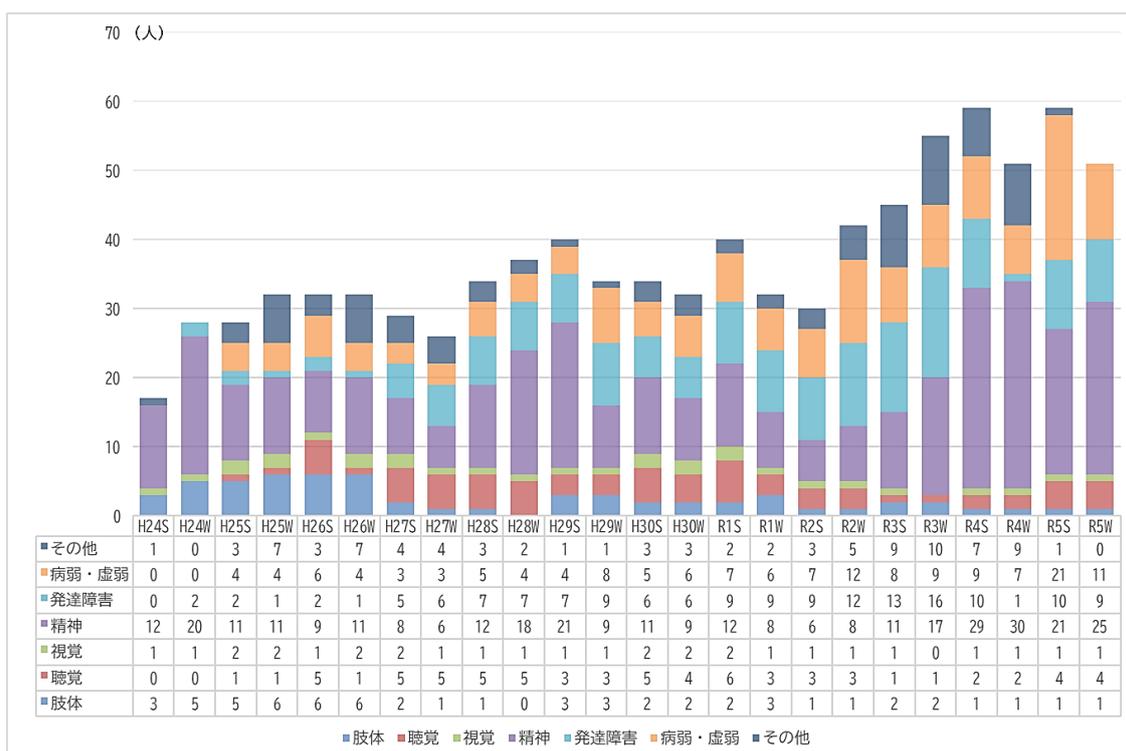
<図1:大短別授業配慮申請数経年変化>



<図2:学科別授業配慮申請数>



<図 3:障害等別申請数の経年変化>



(2) 課題

授業配慮申請数については減少しているが、昨年度末に危惧した通り、本来授業配慮になりむものかどうかの判断が難しいグレーケースが増加している。授業配慮は本来受講するための環境を整えることを目的に行われるが、授業環境そのものが科目の達成目的達成のために必須な場合、配慮することが学生の学びを難しくする場合もありうる。合理的配慮が義務化される次年度に向けてこれまでの授業配慮制度を再点検し、国が定める合理的配慮に則した支援を確立することが求められる。今年度の学生支援委員会では本年度を通じて、配慮内容の決定に際してこれまではなかった学科での検討の段階を新たに加え、DPに則して配慮の内容を考えていただくとともに、配慮開始後の適切な時期にフォローアップを実施していただくこと、さらに申請時期を早め学期の初めから配慮が受けられるようになるなど、制度の改善を検討し、新たなフローチャートを作成した。

次年度はこのフローチャートに基づいて合理的配慮を進めていく。新たな取り組みとなるので、適宜検討を行い、柔軟に改善しながら制度の確立に努めたい。

2. ピアサポーター・リメディアル教員等による学習・生活支援

(1) ピアサポーター・リメディアル教員等による学習・生活支援の状況

昨年までのピアサポーターの活動はコロナ禍の影響で知識や技術の伝承が途絶えたことにより、停滞気味であったが、本年度は加えて、それまで活動場所であった旧ラーニングコモンズが学生サポートフロア（学習や大学生活に困難を抱えている学生のため

のフロア)と改編されたことにより、さらに変革を求められる状況となった。ピアサポーターの人数も減少し、各学科にサポーターが在籍するという状況は望むべくもなくなった。また、指定スーツが廃止されたことにより、ハルカスの相談会も実施ができなくなるなど、活発に活動できる環境を保つことが難しい1年であった。

そんな中でも、学生企画でカードゲームの大会を実施するなど、学生の努力は継続していた。また、ピアサポートの在り方も含めたサポートフロア全体の環境整備のために、学生支援センターとしてもバックアップを強めるため、「学生サポートフロア会議」を月一回開催し、学生の活動の支援に努めた。

以下に令和5年度のピアサポート、リメディアル教員利用状況を示す。なお、表中、「事務職員」とあるのは、サポートフロアの事務担当者、また「学生サポート」とあるのは、昨年度から採用された学生サポート専門スタッフのことである。

<表1：令和5年度サポートフロア利用人数>

<学科別>

	人文社会学部				教育学部				経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	57	31	136	6	127	22	15	25	1	62	5	0	487	27	1	28	515
5月	126	33	118	2	188	45	22	24	8	67	2	0	635	45	4	49	684
6月	125	24	119	10	90	56	11	29	2	54	1	0	521	48	7	55	576
7月	84	24	98	13	112	54	22	31	2	54	5	0	499	46	2	48	547
8月																	
9月	42	9	53	7	47	28	2	4	0	35	8	0	235	1	1	2	237
10月	103	14	115	16	130	71	17	9	0	79	3	0	557	7	0	7	564
11月	70	4	122	44	126	93	23	14	0	56	9	0	561	32	1	33	594
12月	98	16	161	65	128	97	19	30	0	75	11	0	700	49	0	49	749
1月	80	18	82	43	78	59	12	6	0	34	0	0	412	15	0	15	427
2月																	
3月	5	2	9	8	6	5	3	1	0	3	0	0	42	0	0	0	42
年間計	790	175	1013	214	1032	530	146	173	13	519	44	0	4649	270	16	286	4935

<表2：令和5年度ピアサポーター・協力教員・事務職員相談件数>

<学科別> 対応者:ピアサポーターSA、協力教員、事務職員

	人文社会学部				教育学部				経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	34	1	25	6	5	1	0	38	2	8	5	0	125	0	0	0	125
5月	27	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	28	0	0	0	28
6月	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	0	0	0	32
7月	24	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	0	0	0	27
夏学期	117	1	28	6	5	1	0	38	3	8	5	0	212	0	0	0	212
9月	15	0	11	2	0	0	1	0	0	0	2	0	31	0	0	0	31
10月	26	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	0	0	0	27
11月	13	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	15
12月	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0	0	0	21
1月	38	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	38	0	0	0	38
冬学期	113	0	12	4	0	0	1	0	0	0	2	0	132	0	0	0	132
年間計	230	1	40	10	5	1	1	38	3	8	7	0	344	0	0	0	344

*4月 履修相談会(4/3開催)

<令和5年度リメディアル教員による学習サポート利用件数>

<学科別> 対応者:リメディアル教員

	人文社会学部				教育学部				経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	7	4	6	0	3	0	0	0	0	2	0	0	22	1	0	1	23
5月	20	2	8	0	5	0	0	0	0	2	0	0	37	0	0	0	37
6月	20	0	7	0	2	0	0	0	0	0	0	0	29	0	0	0	29
7月	6	0	3	0	6	1	0	0	0	0	0	0	16	0	0	0	16
夏学期	53	6	24	0	16	1	0	0	0	4	0	0	104	1	0	1	105
9月	3	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	6
10月	6	0	7	0	6	1	0	0	0	0	0	0	20	0	0	0	20
11月	3	0	2	0	6	1	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	12
12月	8	0	13	0	1	1	1	0	0	0	0	0	24	0	0	0	24
1月	2	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	6
冬学期	22	0	27	0	15	3	1	0	0	0	0	0	68	0	0	0	68
年間計	75	6	51	0	31	4	1	0	0	4	0	0	172	1	0	1	173

<令和5年度学生サポートによる相談件数>

<学科別> 対応者:職員 妻谷さん

	人文社会学部				教育学部				経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	2	2	18	0	8	0	0	0	2	16	0	0	48	0	0	0	48
5月	1	2	10	0	3	0	0	0	0	19	0	0	35	0	0	0	35
6月	2	0	15	6	9	2	0	0	0	16	0	0	50	0	0	0	50
7月	1	0	14	3	9	3	0	0	0	13	0	0	43	0	0	0	43
夏学期	6	4	57	9	29	5	0	0	2	64	0	0	176	0	0	0	176
9月	3	2	4	1	8	3	0	0	1	7	0	0	29	0	0	0	29
10月	3	2	16	0	15	6	0	0	0	12	0	0	54	0	0	0	54
11月	2	0	19	0	14	6	0	0	0	13	0	0	54	0	0	0	54
12月	2	4	22	0	22	4	0	0	0	10	0	0	64	0	0	0	64
1月	2	4	7	0	6	3	0	0	0	9	0	0	31	0	0	0	31
2,3月																	
冬学期	12	12	68	1	65	22	0	0	1	51	0	0	232	0	0	0	232
年間計	18	16	125	10	94	27	0	0	3	115	0	0	408	0	0	0	408

(2) 次年度に向けて

ピアサポートによる昼休みの待機については利用者が少ないため一旦は停止し、学生企画のサポート活動を確実に実施することで活動の実を上げたい。また今後は、障害のある学生のサポートについても担当できるよう学生への働きかけを行いたい。

学習や学生生活に困難を抱えた学生へのサポートを行う学生サポートフロアについては、学生サポート職員を中心に、学生相談室、保健センター、ピアサポーターと協力し、一人でも多くの学生が大学生活を享受できる環境を整えられるよう引き続き努めていきたい。

第6章 SD活動の取り組みと今後の課題

<FD・SD研修会の実施について>

- [趣 旨] 本学として生産系 AI 等を取り組むために、教職員の共通認識の形成を目的に実施。新しい技術を取り入れるためにより効率的、より効果的な使い方を考えることをテーマとした。
- [実施日時] 令和6年1月31日 13:15～14:45
- [参加数] 合計 168名(教員 90名/職員 78名)
- [内 容] 安松 健先生(大阪教育大学 特任准教授 AI コンサルタント)を招聘し『「生成系AI時代に求められるリテラシー」～AI・データサイエンスの知識・スキルは理系だけのものではない!～』を講演。
- [総 括] 社会の変化に対応し、教員職員の業務のDX化を行うべく、急速に発展する生産系AIをベースに、実際の業務にどのように活用・展開していくのか学ぶ機会となった。今後の業務効率化に生産系AIを利用するための足掛かりとなった。

四天王寺大学・四天王寺大学大学院・四天王寺大学短期大学部 ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

- 第 1 条 この規程は、四天王寺大学、四天王寺大学大学院および四天王寺大学短期大学部（以下「本学」という。）ファカルティ・ディベロップメントの企画立案事項の審議・推進を図ることを目的として、ファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）委員会（以下「委員会」という。）を設ける。
- 第 2 条 委員会は、第 1 条の目的を達成するために、次の事項について企画立案し、FD 活動の推進にあたる。
- (1) 授業内容、方法および、評価に関する事項
 - (2) 授業の改善に関する事項
 - (3) その他、FDの目的達成のために必要な事項
- 第 3 条 委員会の委員長を高等教育推進センター長とし、他の委員を次のように構成する。
- (1) 高等教育推進センター副センター長（委員長を補佐し、委員長に事故ある場合は、その業務を代行する）
 - (2) 学科長が学科・専攻所属の専任教職員就業規則に規定された教育職員、特別任用教員および有期・無期職員就業規則に規定された特別任用教員と協議の上、選任した委員
 - (3) 高等教育推進課長
 - (4) その他必要に応じて委員長が任命する委員
- 第 4 条 委員は、学部学科等の代表として委員会に参画し、全学的見地ならびに学部学科等の特性に応じて、委員会で審議された結果を学部教授会で報告する。また、必要に応じて学部の意見を集約したものを委員会で報告・審議する。
- 第 5 条 委員の任期は 1 年とする。ただし再任を妨げない。
- 第 6 条 委員会は委員長がこれを招集して、その議長となる。
- 第 7 条 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の本学教職員に委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 第 8 条 この規程の事務は、高等教育推進センターが所管する。

附 則

- 1 「学生アンケート委員会規程」は平成 18 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 「学生アンケート委員会規程」は平成 19 年 3 月 31 日をもって廃止し、「ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を平成 19 年 4 月 1 日より施行する。
- 3 この規程は、平成 20 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 4 この規程は、平成 22 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 5 この規程は、平成 25 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 6 この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 7 この規程は、平成 30 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 8 この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 9 この規程は、令和 3 年 8 月 1 日から一部改正し施行する。

スタッフ・ディベロップメント委員会規程

(目的)

第 1 条 この規程は、四天王寺大学大学院、四天王寺大学および四天王寺大学短期大学部職員としての資質の向上を図り、もって大学経営および大学改革を推進することを目的として設置されるスタッフ・ディベロップメント（以下「SD」という。）委員会（以下「委員会」という。）の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第 2 条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 事務局長
- (2) 総務課長
- (3) 人事課長
- (4) 教務課長
- (5) 就職課長
- (6) 学生支援課長
- (7) その他事務局長が必要と認める者

2 副学長は、必要に応じてSD委員会に出席する。

(委員の委嘱)

第 3 条 前条に定める委員は事務局長が任命する。

(委員長)

第 4 条 委員長は、事務局長がこれにあたる。

2 委員長は、委員会の会議を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代理する。

(委員の任期)

第 5 条 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

(審議事項)

第 6 条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) SDの企画立案に関する事項
- (2) SDの推進計画に関すること
- (3) SDの実施に関すること
- (4) その他SD推進に必要な事項

(委員以外の出席)

第 7 条 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の者の委員会出席を求め、その意見を聞くことができる。

(所掌事務)

第 8 条 この規程に関する事務は、人事課が所管する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

令和5年度
四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部
FD・SD報告書

編集・発行 四天王寺大学
ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会
スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

住 所 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL 072-956-9910

FAX 072-956-3891

E-mail koto@shitennoji.ac.jp